VOL. 8. NO. 3. MAR. 1931. THE SENRYUH ZASSHI. SENRYUHZASSHISHA, OSAKA.

川柳雜誌

主幹・麻生路郎

三月號
第八卷第三號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　昭和六年三月一日發行（毎月一回一日發行）

三月例會

▼日時　三月七日午後六時半
▼場所　南區清水町電停西入北側端の坊
▼兼題「勞働」三句
▼會費　二十錢

初心者の來會を大いに歡迎す

各地支部增設

本社は川柳の社會化を實現させるため全國各府縣に支部を增設いたします。

柳壇のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引き受け極力「川柳雜誌」の擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込まれたい。

川柳雜誌　第八卷第三號目次

文苑　麻生路郎（二）
小出楢重を悼む　福田山雨樓（二）
柳味を探る　蛭子省二（二六）
竹馬居雜筆　岡田三面子（二五）
めあきめくらに道をきく　安川久流美（二四）
難解史句の解　住田亂耽（四九）
フォルマリズムと川柳の觸手　龜井愚寵（三九）
湖舟君を悼む　松丘町二（三三）
眞實とは　路郎、葭乃、ひろし、琴人（三六）
作家展望　山雨樓、亂耽、町二（三六）
地下鐵　小石の子供　尾崎海洋人（二六）
正成、正行　片桐靈壺（二六）
サラリーマンロード（三）　楊井二南（一七）
氣の毒な病人の話（三）　中野裸人（九）
讃岐の春　庄萬よし（三）
本願成就　高橋かほる（三七）
火華一路集（募集句）……（四一）
大島濤明選
福田山雨樓選
中澤濁水
楊井二南共選
罰硯藥湯創作　麻生路郎（一）
近作　麻生路郎（一）
川柳塔……（四）
○新町二雅幽鐵洲耽
愚陀かほる
琴人一徹山雨樓駒人
雨町綠雨
◇杏三
明珠冕卓豆秋濁水
計加村樂錦水閑生
靈壺綠之助多郎蒼太
華水光路裸人觀月
夢裡双車一流二南
櫻果雪峰春秋帥
圓角冷々子黃峨樂
粒々集……（一四）
長崎柳秀　前田五健
大島濤明　蛭子省二
光耀抄　麻生葭乃選（一五）
近作柳樽　麻生路郎選（一六）
同　安井ひろし選（三〇）
各地柳壇……（五二）
續川柳家戸籍調　福田山雨樓（四一）
杭全町MEMO　橋本綠雨（四五）
編輯の窓　路郎生（六五）
表紙　大西孝之介

近作

麻生路郎

幻の黒髪となり脚となり

新らしき職に就く

味は知らねごとりあげる箸

市長助役収入役と上にゐる

芋蔓の端つぽにさへ生きんとす

世をいそぐ人病院に借が出來

彼氏も遂に晩酌へ月並へ

水府氏令息の訃に

今はただ哀しき乳豆檢温器

楢重を悼む

麻生路郎

本社客員　小出楢重畫伯、二月十三日午後三時溘焉として逝く。享年四十五歳。

回顧するに大正四年以來「雪」「土團子」「後の葉柳」

「川柳雜誌」の前後十有七年間に亘り表紙畫、挿繪、隨筆等々々、眞に犧牲的に我等の事業を援けられし氏の靈前に捧ぐ。

裸婦かたづけてあるじ弔ふ

楢重の訃に光るガラス繪

置きざりの妻と子にはや一七日

川柳塔

○　朝田新水

正月を待つてた樣に妻倒れ
褌にも春の白さが浮んで來
春宵のさみしきものに子猫の死
湯の宿の女の膝に寢ても雪
口紅のはけて多辯な女なり
ダンサーのおかしくも見る鼻の汗
肉襦袢悠氣の中によく動き
醜くも女房としての二十年
妹の世帶廣島菜が煮られ
ズロウスよ笑ふてくれな處女でなし
母に似ずモガに生れて眉長し
勘忍をして水盤へよろけかけ
若き身の多く語らず夜を更かし

合理化にやつと理解の印を押し
本名の名刺女に淋しくて
眞理だと夫の言を待たずして
櫻咲く孤の死体も二人なる
溝からを他所とも思ひ病める妻

○　松丘町　二

伸べし手に日も降らぬ日の悲しみや
漬物くさいをんなの息の割引車
茶碗割つて厨に春の嘘する
雨だれがラリルレロ ラ、リル、レ、ロ、木賃宿
電線が劇しく街の息を吸ふ
スカート搖すつてをんなよ罪の香を落せ
草で手を拭いて冷えたる握り飯
母病めりお醤油かけて子の晝餉
米櫃の米拾はれて粥の實に
片つほのよき魂は酒に醉ひ

○　安西杏三

棺側に友達一人居ればよし
ペーブメントゆふべの戀の跡もなく
トラックを押してゐるのへ揚げ雲雀
殺氣ある眼を運轉手背に感じ
ふん〳〵と聞けば隣はのろ過ぎる
一點に冬を集めて獨樂まはり

○　住田亂耽

機械になるつとめならもうやめだ
失戀の人に黒猫たゝかれる
ダラ幹をのせた夜汽車の赤い煙
銀行に蒼白き生ける算盤
警官がプロのひとりである事實
性格が複數になるウエトレス
にぎり鮓お前は無駄な色彩だ

○　伊藤愚陀

マダムの腕が煙の如くによりそふて
金貨の夢見て豚の如くに眠つたよ
口あいて惚れてゐるのかまことなり
KISSの唇が海豚に見へます

○　高橋かほる

教會を濟まして逢ひに來てくれる
恐はごはで下りるはしごで手を踏まれ
新聞は今日の日づけの酒の粕
給油所市電の人も話に來
唄本を口に蛇の目はひろげられ

○　關本雅幽

新春を兄も慇々飲みにきて
神棚の燈は他所事にしてゞもり
ごうせもう二月は二十八日よ

○　中島鐵洲

吹き出した眞綿も母のものゝ知れ
盆磨く前に居眠る母おはす
結局は自滅と知つて亂舞する

○　松盛琴人

病間日誌

不養生默つて醫者に診て貰ひ
寢汗びつしより溺れてる夢
醫者の言ふ養生法と暮し向き

病中例會吟を考ふ(暴力二句)

撲る蹴るに賀川豐彦むつとする
仕返しは嵐の樣に撲り込み
戀は得られず宿料は滯り
ごんなもんだいてな事もたまにあり
故郷は遠し動きもされず居る

○　長谷川一徹

はゞかりへ泣きに來たとは誰か知ろ
賣りに出て居るとは知らず住んでゐる
まだ踊るつもり目の色頰の色
時雨來て捨て得ぬ浮世見つむるよ

新博士電柱廣告してありぬ

○　岩崎柳路

味氣なさ醉つた女にからかはれ
ガンジーの氣持僕等は知つて居る
ビユローの通譯派出な中に立ち

○　福田山雨樓

＝嫂の死、一月三十一日＝（二句）

三十七厄年だつた寒椿
まだ立たぬ兒もほつこいて何處へ行く
經を讀むそのまなざしのづるいこと
てきぱきあほぐ朝のかんてき
雪降れば雪をつかんで食ふ父よ
下駄の緒がかたつばしから切れてあり
もうちつこごきつこさする明日であれ
腹が鳴るそのあこさきは眞人間
制服へ女給迂闊な眼を投げる
子供等に熱いばかりの藥風呂
藥風呂親父の顔のにがりきり
人間を罰で鞭打つ痛快さ
太陽に追ひつめられた罪こ罰

○　酒井駒人

猫の脊の冬の陽いつか黄昏れる
よく笑う仲居であつた雪の夜
碁敵が居た此の土地の變りやう
公設で娘時代の友に逢ひ
やき鳥屋外の寒さを客に見る
終電車くしやみの顔へ皆んな向き
鐵橋へかゝる頃から吹雪止み
聲色屋太い眉毛も役に立て
弟にいつそ任して旅に出ん
色街へ來て寒紅屋顔剛染

○　出口雨町

有馬まではる〳〵戀をしに出かけ
甲板へ欠伸しに出る二等客
かび生えたやうな亭主を守りぬき

この頃の自分（二句）

品行を疑はれつゝ金を借り
久々の友へ萬年床を見せ
死なすのも並大ていの世話でなし
惚れた〳〵も挨拶のうち

田舍の小料理屋

三味線も唄も悲鳴をあげてゐる、
クリスチャン家では下女をこき使ひ
學校で巾を利かすも地主の子

○　橋本綠雨

禍をおそれ女は默つて居
草の芽をステッキで叩く道で待ち
壓迫もあらうが親も妻も子も
貧しさに子はばら〳〵になつてつこめ
手のひらへ載せて見なけりやすまぬ金
若き女に窓數が多かりき
目をさますこ矛盾ばかりの世界なり
春になれ春になれよこ草が云ふ

◇　西村明珠

改心をした事にして靴磨き
紙屑は不平の文字の羅列のみ
初對面ここの空氣をほめちぎり
石炭の煙になれて遊ぶ子よ
節廻はし金をつかつた人に負け
目藥が一滴落ちるのを見てる
酒こいや雨の中をも來るものを
目的にされる裏町迄の三味
ゲラゲラ笑ひに實の子も叱られる

◇　木村晃卓

現金なものさ饅頭でだかれたり
金のない國を創造して見たし
丸髷は幾年ぶりぞ妻の春
もう何にたよるすべなく陽を拜み

路郎先生へ

陽の光今日はつきりこ認めたり

武子さんへ

寢つ醒めつ床寒からん春ながら

◇　須崎豆秋

二日醉まさかヤイトもすえられず
問題になる雨傘をりて來る
石炭貨車ガタンゴトンこ日が暮れる

◇　中澤濁水

呼びに來た子に飯粒を踏ませられ
醉つて乘るエレベーターはもう停り
奢るのヘメニューいきなり横ぐられ
飲みに行くここがあるので引きこめず
薪を割り損ねる如し詩にならず
馘になり賴つて行けば父も馘
葺き終へて去ぬる屋根屋の振り仰ぎ

◇　三好計加

丸こ線を描いてカンヂンスキーの繪
謠なんかやるのか本が積んであり
湯上りに未だ顎ひげがぬれてゐる
ごうせ出來なきや火ばちで暮らそ
降る雪を盆に受けんこ持つて出る
筆洗のかたちになつて氷出來
田の道を女恥かしそうに來る
雀達キヨロ〳〵こして下りてくる
ヒユウ〳〵こ風に大根の搖れる家
田家みな煙を出して朝の色
門前で犬に吠えられ道をかえ
乞食もう仁王さんこは馴染なり
座蒲團をほしたら猫は來て座り
氷ふんでギー〳〵なるに興じてる

◇　上村村樂

下駄箱は自分のばかり拗ねてゐる
忍從へ炭の崩るゝ音のする
今朝も來る雀に職をきこうかな

◇　上野錦水

今に見ろ見ろと貧しくなる計り
内職の眼鏡片方紐で掛け
孤兒院の筆塗布劑に思ひつき
賣られ行く身に斷髪のはなやかさ
玩具屋を出ると背中で寢てしまひ

◇　阿部閑生

刑務所を出て自叙傳を書きたがり
似て非なる下女ゐて一家をさまらず
踏み込んだばくち奥樣正坐なり
仲好しのこゝを出て亦そこで飲み

◇　片桐靈壷

右見ても左向いてもバット級
先生に見違へられた顎をなで
出戻りでいゝならたんとあるぜ君
ねいちやんになつて襁褓を疊まされ

◇　伊藤綠之助

誰も知つてる棒引がいつちいゝ
醉ひがさめたら嵐をきゝなさい

數年來の謎は半分解けた、彼女は何故日本海へ身を投じなければならなかつたか（二句）

共に唄ひしは少女の唄なりき
夢二ゑがくの線よ死んだと思はれず

◇　松田多郎

反物で女の横づらなぐりたい
何事も叶ふた事にするつらさ

節分

厄拂ひする萬歳もラヂオから

養老にて

もく〳〵と養老小唄聞いて寢る

谷汲寺にて

苦水に母の無事をば祈らんか
をひづるを納めるここも見てかへり

◇　平井蒼太

南歐の夢が鳴る鳴るたんばりん
ふとももの ほくろにわれはきすもせむ
煙突の煙に時を忘れたり
湯に浮いたうんこを見てる心かな
世之介の夢を見てゐる蒼いかほ

◇　日野華水

赤城颪雜感

義理に死ぬだけを俠客知つて居る

不朽洞を訪ひて

打解けて話せば先生鬚があり
園藝へ伯父の袖口きれてゐる　中見光路
朱子襟のきちんと坐る郊外車
父ちやんはお店と砂をいぢつてる
案山子ふと今の時世を考へる

◇

ハイヒール帽子こゝもと不如意です
何事もまろく〳〵と弱くなり　中野裸人
子のゆめよ圓かれ枕かひなほし
春と知る襯衣の手首の薄汚れ
ひとり身のいとのんびりな送話口
お互ひがマスクした三つの心
生活へ無駄な簞笥の錠の穴

◇

お客さんをそこのけにして髪をすき
阿呆になつて暮らせと返事書いて來る　川村觀月
問題を出して父親ねてしまひ
さかずきへ俺のたるんだ目がうつり
客のない店のタイルのたゞ白く
家を出てこつそりめがねかけて行き

◇

銅線の如き男と生れ來し

鮎美さんの結婚一週年を祝して

丸髷に結はして一度笑はせる　母の死
苦勞して死んだ人です如來さま　田舍にて
大阪へ行きたい娘ばかりなり
死ぬもよしとフット考ふ眠り際　千日前雜觀（二句）
猿芝居そつぽを向いた愁嘆場
藪入を連れ千日で揉まれてゐる　村松夢裡

◇

大人びた娘へ話し改まり
浮かれてる奴を笑つて風を引き　河野双車
金の要る或日の恥を思ひ見る

◇

奢る氣でゐたのは朝の氣嫌です
美容院貞女と見えぬ顔が出る　碌一流

◇

退院のやはりそれから生きること
責任は重く袴の皺が出來　楊井二南

◇

處女今はチューインガムを弄び

十七の純を今更らしく云ふ
落ちぶれた恩師に年を尋ねられ
今更こなつて謙遜要らぬこと
窮屈な思ひが嬉し裾模様
値切る氣で行けば夜業の印刷屋
緣談の當の相手はこゝにゐる
放課後は雪の話もせずに去に
雪解けに不滿があつて滑りかけ
竹箒隣りの雪は汚ながり

藤岡　櫻果

◇

お天氣が變るぞ汽車の音近し
出して呉れたかと財布を引込める
必勝の理を暴力が崩すなり
大部分家主の物になる汗だ
命まで取りにや來まいこたんと負ひ
湯上りの寒さ忘れて開け放し

本山大念佛寺もめる

管長にエロの噂が高いなり

池田　雪峰

◇

面白さこれだけ痩せて生きてゐる
オールバックも君に氣に入るやうになで
人目にも羨むやうに歩きましよ
首を振る博多人形のユーモアー

喜多　春秋

◇

市病院勝手知らずはほつとかれ
溜息をこがめた母と雨を聞き
邪魔くさい欺されこいてやらうかい
國寶の佛畫へ稀に人が來る

西田　艸樂

◇

墓口を開ける女は後ろ向き
これだけぞ祠兎も角信じさせ

櫻井　圓角

◇

遠慮だと云ふてあんまり無理をすな
そも〳〵が金に盲目の緣でした

淺井　冷々子

◇

金を入れつ雨解の雫夜に入りて

熊本　黄峨

◇

浮世からきかせたい程鉦を打ち
割箸の音をさしても打ちこけず
仲仕來るまで人道をかりてゐる
舟もなく嵐のあとの靜けさよ

柳味を探る

福田山雨樓

諺に『餅は餅屋』と云ふが全く『商買は道によつて賢し』の譬の如く餅のことなら餅屋に限る。あの杵取りの早さも丸め方のうまさも素人には感歎の外はない。これと同樣『川柳は川柳家』と云ふことが出來るのではなからうか。川柳をその掌中に收めて自由自在とは行かぬまでも、川柳の獨自な境地と妙味とを遺憾なく發揮するものは川柳家を措いて他にあらうとは思はれない。

餅は糯米から拵へるのである。時としては粟や唐黍等で拵へることもあるが、大體に於て糯米と云ふ一定の原料から出來上るのである。これは果して紀元何年の頃から始まつたことが知らぬが、隨分古い歴史を持つてゐるものであらうし、又將來日本の國土と共に恐らく廢たらぬものであらうと思ふ。こころが川柳は一口に云へば川柳味と云ふ原料から生れるのであるが、その川柳味なるものが糯米を見分けるやうにしかく簡單に參らぬのが厄介である。

川柳の餅屋は川柳を作ることばかしに熱中して、その原料たる川柳味の吟味をうつかりしてゐることが往々ある。

餅といへば普通白い丸いのを思ふが、餅にも種類が澤山ある筈だ。餅の大部分の原料は糯米であるにしても、そこへいろんな混ぜ物をして變つた形、色又は味のものを作る。この混ぜ物の量が過ぎると餅は遂に餅にならなくなる。搗いても〳〵バラ〳〵になつて、臼から飛んで出てしまふ。

川柳に川柳味と云ふ原料が缺乏することも亦妙なものになつてしまふ。そこで川柳の餅屋は時々この原料について、これも入念な吟味をしないと川柳でないものを川柳だと誤信するやうなことが起らぬとも限らない。じかも川柳の場合は餅のやうに全然バラ〳〵で搗かれぬと云ふやうなことがない爲めに、餘程氣をつけてかゝらないと見落す場合が少くないと思ふ。

（自分が川柳の話に餅の例を引いたのは、食物に於ける餅の存在が文學に於ける川柳の存在に相通ずるものを覺へたか

らである)

だが川柳味があるかないかを見分けるのは、一句を充分鑑賞して見るならば、川柳にいそしむものにとつてさまで六ツ敷ことでもあるまい。只如何に優れた川柳味が表現されてゐるかを見屆けることが、至難なのではなからうか。

尤も課題吟の場合は選者が大概三才或は秀逸等の評價、共鳴度を付けてゐるから、川柳味の濃淡、深淺及厚薄を識別するのに利便である。今參考迄に路郎氏が最近課題吟中『天』に選をされた句を拔萃して見やう。

(　)内は課題

(焔)焔といへば悲しきはマッチの火　亂　耽
(獸人)獸人になほぬくもりあるつ　山雨樓
(自殺)美味きに喰ぶ子を死ぬる恐ろし　金太樓
(肉)まはだかにまはだかの子を抱で夏　葉　平
(象)象の背に普賢在ますず蠅が飛び　毒　仙
(垢)ウルトラのネクタイの垢カラの垢　萬よし
(煙)一握り程の煙になるなら・ん　雅　幽
(麗人)羊の背なでゝ麗人氣がまれ　靖　弘
(喜び)喜びへかたくなゝ父ほつれ　二　南
(初夢)初夢の通りに生めば男の子　卯　三

これ等の句の上には川柳味なるものが如何に濃く或は鋭く滲み出てゐるかゞ窺はれるであらう。しかもこれ等の句はその課題を取つてしまつても、換言すれば題のなかつた句として鑑賞しても尚且充分句としての生命なり、價値なりを持つており、擧揚さるべき川柳味を表現してゐることに注意せねばならぬと思ふ。即ち課題吟を單に戯作的乃至技巧修練の一方便としての意圖に於てのみ作句するならば、その句は題を離して見ると何のことやらさつぱり譯がわからなくなつたり川柳味が著しく稀薄なものになる場合が多い。

これに反して課題吟と雖も、單にさうした方便視せず進んで課題吟によつて、自己の腦裡に眠つてゐる或は胸底に沈潛してゐる思想なり、感情なりを呼び起し課題を通じて自分の息を吹き込むことに努めるならば、課題吟も亦川柳詩作上の邪道でないのみならず、いのちある創作を提供することが出來るであらう。

このことに就て思ひ出したのであるが『ふあうすと』新年號に紋太氏が『作句と實際記』中に、題をこなす巧妙さを提示する爲めに例擧された

猿股を破いてやめる壓　相　撲
値の下る家賃へ目立つ壁の骨
村芝居幕がはづれて皆　笑　ひ

の三句が『露出』と云ふ題の三才であつたことは、題が消化されてゐると云ふ點ではなるほど感心しても、この句から題を外してしまへばどんなものかを反顧して見るときに、こう云ふ穿ちに走つた句が遂には狂句の畑へ足を入れはせぬかを危まずには居られない。

雜吟に於て、優れた川柳味を檢出し指摘することは仲々至難であり、時には非禮になることもあるが、川柳味の探求と云ふことが川柳の詩的研究の上に於て、極めて重要なる役割を持つことに氣付くならば、切に大方柳人の聲援と寛恕を乞はねばならぬ。

『川柳雜誌』が庚辰柳壇に對して一體

どんなに顯著な、特異な川柳味を提供したであらうか、靜かに振返つて見たいと思ふ。しかし斷つておくがこれは、山雨樓一個の鑑賞圈内に於けゝ未熟なら壟斷であるから、幾多の逸脫を冒しておるやも計り難い。この點は幾重にもお斷りを述べ併せて叱正を乞ふ次第である。

『川柳雜誌』の主張は事新しく云ふ迄もなく、川柳の質的向上を前提とし且つ之れと併行する川柳の社會進出を標榜するものである。即ち川柳を詩に近づけつゝ社會に押出さうと云ふのに外ならない。この目的のため主幹路郎氏を始めとして社關係の諸君が力一ぱいの努力を惜まれなかつたことは、今更喋々するの要を認めない。

この『川柳雜誌』の主張は決して一派一黨に偏せよと云ふものではない、川柳をよくしやう、川柳を世の中に廣めようと世の中の正しき鑑賞を求めようとする精神そのものが、即ち主張なのである。だから句風、句調及句材等に付ても各川柳家の眞劍な創作態度に委して、各獨自、特異な川柳味の開拓にその驥足を展ばす樣相勵精こそすれ、決して型にはめるやうな畫一主義を强調するものではない。

かうした廣々とした耕地に於て、多種多樣な川柳相が表はれ個色な作家の生れることは又當然の收獲であらねばならぬ

思想背景と川柳味

思想背景の上に立脚した川柳の出現、これは階級意識の旺盛な時代思潮の中に呼吸してゐる川柳家の免れない踏路であり、眞面目な罐頭である。

値下げの家に强い北風　杏三
會社との折合つかず家鴨なく　亂耽
妾となつて奪るも戰術　路郎
金をもらつてこゝろはだはだ　多聞
借つて來て返すとお前そ氣か　京郎
暴力はよしキリストも殺される　路郎
靴下が股の奥までつゞくモガ　涙人街
男の靴と女の靴と摩天樓　亂耽
油さし〳〵好き女工の機へ來る　木偶人
水銀は騰り默殺されてゐる　路郎
何をかくさん血の色は赤　雨町
ピアノが鳴つた金借りに行け　路郎
眞操の乏しそうなる眉をひき　公二
文明に毒瓦斯などもあつてよし　麗函
金貨はまばゆし握るは夢なり　綠雨
同志の顏へ月がよろめく　路郎
煙突の下に眼ばかりうごめくよ　亂耽
たまさかの紙幣だなめて數へらつば　雅幽
不景氣に慣れて手拭腰にあり　杏三
頰骨が高く求職斷はられ　素生
人の子を使ふ言葉がふと嶮し　麗壺
標札は檜生活樂でなし　ひろし
しぼられて居る氣づいた强さ見よ　一月十五日全國民衆黨結成
潮鳴る階級性に呼びかけん　ひろし

これ等の句の中には、特に思想背景を織り出してゐると云ひ切れないものもあるが、思想背景を通じて鑑賞することにおいて、より新しき川柳味を探求すべきだと思ふ。右の句の中で亂耽氏の煙突の下に眼ばかりうごめくよに付いては『たまむし』新年號で石井潛流氏が『川柳とイデオロギッシュ』と題して述べてゐられるから私見を呈して氏の再考を促したいと思ふ。

氏は第一、句をすつかり間違つてゐられる。（句主も違ふ）これは恐らく執筆

の際の間違ひで、ほんこうの句を必ず讀まれたに違ひないと思ふから深くとがめないが、川柳家として句や間違へられて再掲される位不愉快なことはない。充分注意をして頂きたいと思ふ。

第二に氏は『然し一言茲に斷つておき度いのは、私は川柳的藝術味を抜きにして内容的イデオロギーから惡舌を書いてゐるのだと云ふ事である。これは即ち作者自身が、イデオロギーの城廓に立つて主觀的に作つたのではないから無理な話である。』と斷つてゐられるが、句の内容と云ふものは句の表現と切離すことの出來ない關係にある筈である。即ち句の内容はその藝術味が齎すところの迫力乃至共鳴感、陶醉度を抜きにして檢討出來るものではないと思ふ。

しかしてこの句の場合は『眼ばかりうごめくよ』の齣が面憎いほど巧に被搾取階級の横顔を捉えてゐるのである。これは既成川柳味の範圍からたしかに一足を踏み出した、思想背景をもつ川柳味を提供したものであつて作者のイデオロギーなるものは、この句の觀點に照しかなりの鋭敏さが受取れるし、その鋭い批判性を聞くことが出來ると思ふ。（續く）

粒々集

魚崎　長崎柳秀

繪看板吸入程の口をあけ
世は情け下宿の膳も卒業日
出戻りのうかとショールのまゝ座り
出戻の長座に妻の氣が疲れ
何處からの雪か電車の上に積み
寒いわとショールのまん手をかざし
丹前の柄の好みも二號邸
臺所の煙り書齊に叱られる
かうも成るものかと思ふ無教育
馬鹿にした伯父の遺作が世に知られ
傑作は今に出來ると呑んで居る

松山　前田五健

脇息の滿足さうかくなり
氣休めに緣喜餡なごしやぶらされ
帶々のダイヤのあたり臍があり
牛の如く舌動かしてブルヂョアー
傘斡め踵の泥を拭く姿
掌へはいる子の尻快よし
お詣りにお茶挽き連と思はれず

大連　大島濤明

さすらひへいみじく照すホールの灯
水深く澄めごも水は清からず
世の中へ乞食あいそが盡きもせず

婦選論所詮女は女なり

朝鮮　蛭子省二

尤が根元をほつて梅の咲く
算盤あはぬ舊正月のお茶漬
舊正月にアンマとる瘦せよう
宿引の提灯借りる下駄がきれ
肥汲みへ茶碗酒出す妻とふたり
ふた兒へ名をつけ國言葉で笑ふ
共同耕作のアゼへつくくし

令孃を喪はれし萍花先生の御心情を思うて

ならむでねむる骨壺の小いささ

光耀抄

葭乃選

大阪　スエノ

あんな物買ふが嫌さに辛棒する
箸紙へ姉はきちんと座らせる
あらだきと明日の注文とは寢る
三十の乳の重みよ束ね髪
婦人科と美容院とに今朝は出る
失職にもう嫁ぐ氣のタイピスト
戀の浴衣むつきとやならん
白粉を塗る氣になつた夏の空

大阪　壽枝女

美くしい心になつて梅を活け
お前らの着物になると蠶飼ひ
風邪をひくまいと力んで歩くなり
失業へ野はしのぎよい春となり
屋根々々に雀三四羽五羽六羽

松山　武子

きさらぎの町に玩具のセルロイド
酒の粕やいた殘りをおつゆにしい
盛り花の梅も咲き出す春なれや
歯ヨージがAの字におよぐ洗面器

一尺の雪暖國らしいさわぎなり

魚崎　吟女

レーヨンを着ぬかたくな笑はれる
風呂の硝子にママの顔パパの顔
銅このつやよ祖母の家の思ひ出
腺病質とか瞳のさえた子よ
惡口になつてしまつた日記帖

大阪　不路子

何か言へば身分々々と言ふ夫人
すきやきを女中は皿へよそはれる
此の顔でまんざら女給にも成れず
はからずも遇ふた其の人つまを連れ

大津　量子

願ひごと數々あつて神の前
空瓶に水仙生けて平和なり
妹はマスクをかけたまゝ眠り
風邪引の子はカナリヤを友にして

大阪　紅蔦

入院の母を忘れて近寄らず
此の病ひ神の試練と諦らめる
夕燒へ歸る小鳥の羨まし
冷たさは向ふの屋根へ白く見え

大阪　浪路

恢復へ向つて居たに風邪を引き
母からは何がほしいときいてく。
在りし日の我が子の姿かべにかき

大阪　房子

倫落へ伯母が情の岩田帶
空バスにガールお客の樣に掛け
張る乳へ落ちる泪の日が續き

松本　和加子（十才）

餅つきに用事があつて困つてる
鉛筆をなめて算術出來そうな
親類の者が來たとて皆騷ぎ

大阪　かつ美

肺病はいとし我が子がよせられず
たよりないのぞみをもつて生きてゐ。

岐阜　誼女

うるはしく處女を匂はす爪の色
頰だけは豐かなれとマッサージ

○　葭乃

浴槽へずらり立つたは皆わが子
新婚の氣にもなれ〳〵割烹着
眠るよりほかに淨土の地は見ず

近作抄録

路郎選

更生のおもひに山の秋の風　螢ヶ池　白眠
冬の雨死んで行くのによしといふ　同　同
ごん底に生きれば生きてをれるなり　同　同
俺だつて赤い血を吐くものと知れ　同　同
初詣唯就職を祈るのみ　尼崎　虚白
赤い屋根低利のものと見えぬなり　同　同
隠されぬ道具に琵琶を持つて居る　同　同
嘘つきが又も割り込む焚火の輪　同　同
同んなじ肺病だのに手を洗ひ　螢ヶ池　沙門
大悟せよと見舞人他人のこと　同　同
影膳を据えましたともいふてくる　同　同
生きて行く道の曲りの面白し　京都　丁路
儲からずいる事ばかり持ち上り　同　同
道一つ隔てゝ同じ物を賣り　同　同
日めくりのこゝらで一人子が殖える　大阪　苦笑
豆炭の匂ふ我が家となりにけり　同　同

小石の子供

尾崎海洋人

ジツト掌を握つたまゝ、此子は「家へもう歸らない」と心の中で考へて居た。夕陽が落ちかける、子供は、先ッき拾つた、小石を思ひ出して掌を開いて見た。美しいチョコレート色の小石は汗ばンで居る。小石は「幸福だ」と子供は心の中で思つた。フト夕陽にかざして、見たら小石はどんなに喜ぶだらうと思って、右手に握つた小石を高く差し上げて見た……。

不幸な子供達は此様にして悲しい日を送る。

正成・正行

片桐靈壺

僕の家の近所に家主の抱大工の旦が引越して來た家號大龜で通つてゐる旦には十六人の子がある。此話をすると誰でも直ぐ二腹かと尋れるが一腹であることは勿論これから何人生れるか知れない。而かも酒豪で（家

職工のくらし考慮に無い會社
教科書へ口出して母言ひ負ける
靴だけが傘から見へる子の姿
あひた椅子また重役の闊が伸び
酒飲んで尖つた風の方へ行き
バラックの隅にめでたき男の兒
飲みにまで秘書をいふのが附きつきり
衝立に仕切らせて飲む個人主義
カンテラの灯へ動いてる地獄の圖
面白う暮さにや損の眉をひき
監督に冗談言へる碁の敵
職長の子供と見ればとびついて
容態を云ひ云ひ亭主米をとぎ
名を呼んでみたい低空飛行なり
病んでゐる娘へ羨ましい羽根の音
男の眼それけだものにみえて來た
くすりとり嗚呼お月さまお月さま
福引へふしくれだつた指がのび
生きてゐるあかしたてゝる年賀狀
馬鹿になりすまし勤めて居るのです
死ぬるとき何をたよりにするつもり
堀る土の片畔なる物思ひ

同　長野　柳兒
同　同　同
同　同　同
同　神戸　隨帖
同　同　同
同　大和　勝二
同　同　同
同　大阪　日日城
同　同　同
同　同　同
同　螢ヶ池　石松子
同　同　同
同　螢ヶ池　愚寵
同　同　同
同　螢ヶ池　照夫
同　同　同
同　服部　利生
同　同　同
大阪　海洋人

號はその意味から附けたものとは思はれないが)背は低く細く極めてお人好である。子供は十六人と云つても大きいのは次ぎ〳〵に丁稚奉行に出したり緣付けて了つたと見へて夫婦の他には八九人位居る樣子だ。其下から何番目かに溝鼠によく似た年子の腕白がゐる。出没自在で遊び仲間の他には遂いぞ現狀を見屆けた者は居ないが引越して來た早々から近所の塀に田圃の泥をぬたくり中庭の植木と云ふ植木をきれいさつぱり丸坊主にしてしまつたのである。所で此村の小學校では兒童の年級と姓名を記した——紙製で赤く緣取つた名刺形の標札を貼らして置く規則があると見へて日の門にも此の兒童標札が五六枚も貼付けてあつた。殘念なことには諸君に御紹介するも間もなく全部剝取られてしまつたが其下からの二枚が出没自在の御本尊日正成、日正行であつた。

サラリーマンロード（三）

楊井二南

人足の早い寒い夕方であります。

高橋盛大堂の前で喧嘩がありました。喧嘩と云つても並々のものではないのです。

太つた紳士「こらッ、貴樣はこんなインチキをやつてよいと思ふのか」

縣珠屋「何がインチキです。つまらないことを云はないで下さい」

太つた紳士「インチキぢやないか、正解のないもので人をだまそうとしてゐるんだ」

縣珠屋「(せゝら笑ひよろしく)何を云つ

喰べたくもなく寢衣の襟を掻合せ　同　同
僕に似た人と云ふのに金があり　西條　英賀夫
眞白なショールよみんな處女であれ　同　同
足袋の石蜜柑畑を越して出し　大阪　桂枝
濁流へ橋の上から手が屆く　同　同
首卷きの息の白さよ月寒し　大阪　拓二
吸ひつけた煙草へ用事持つてくる　同　同
乘合へのさばつて出た牛の尻　大阪　さだを
鶏よ怨むではない珍客だ　同　同
戎橋なる程春の裾さばき　大阪　志洋
女房に恥かしくなる十二貫　同　同
恩は恩金は返してもらひたい　金澤　三波子
洋服に飽きた子供の伊豫絣　同　同
脈をとる看護婦の頰のまるさよ　神戸　三霞
人がよすぎて淋しがられる　同　同
をなごらに春をまかせて觀世流　金澤　白雨
ごのひとも妻とよびたし春の街　同　同
氣が狂ふ迄の惱みも知らずして　明石　啞聲
米の値も知らずマルクス讀んでゐる　同　同
生き延びた元日雪となりにけり　叡ヶ池　康夫
冷たくされて青空へ目を向ける　同　同
スキーヤーサンタクロース程背負ひ　大阪　無鬼

てゐるんだ　もつと研究して下さい、研究を」

果せるかな段々と騷ぎが大きくなります。段々見物人が多くなつて來ます。太つた紳士は手に紙片を持つてゐます。黑い丸が幾つも鉛筆で書いてあります。察する處この人は盤面を寫し取つたものと見えます。聯球屋は確かにインチキをやつたらしいのです。彼は平然と煙草を喫ひつけました。憎らしい程落ち付いてゐます。而も盤面には既に白石も黑石もありません。彼は確かに不利に立つてゐます　太つた紳士には直ぐに味方が出來ました鞄を持つた男が聯球屋を罵倒しました。續いて鳥打帽の男が威丈高に叱りつけました。そして〳〵……　いつち終ひに和服の男が彼に退場を命じました。みんな今にも鐵拳の雨が下るかと思ふ位ひ大きな聲でありました。而もなんと彼は落ち付いてゐるではありませんか。朝日を一本根元まで喫ひ盡した彼はやをら荷物をしまひ始めました彼はなか〳〵の度胸者です。年に似合はない太つ腹です。太つた紳士は物足りない顏をしながらそれでも勝利者の悦を感じながら去つて行きます。

エツヘ……と私は笑ひたくなります。だつておかしいぢやありませんか。先刻目をむいた鞄の男も、口角泡を飛ばした鳥打帽の男もそして刑事の樣に退場を命じた和服の男も、揃ひも揃つてうまそうに朝日を喫けつけたではありませんか。

頭腦明析なるべきあの紳士は　この大きなインチキをも圖解して見なくちやなりませ

喰ひ兼ねて居るのに嫁の話が出　同　同
詰襟で歡迎されぬ故郷の驛　吳　落葉
お隣の子澤山から夜が明ける　同　同
人生も時に定石外の妙　大阪　沒食子
輕石を使うてる人がけなるくて　同　同
貧乏は子の夢さへも破れがち　東京　音吉
くされ縁人の命の永いこと　同　同
オートバイ遮二無二道を開かせる　鳥取　青水
赤色の名殘りを母の袖に見る　同　同
虛榮から虛榮の果は塲末にる　大阪　沐天
たまに來た朝湯にボンチ幅を取り　同　同
獨身でこほすかくごの生花とお茶　姫島　方眠
平凡、平凡十時間勤務なり　同　同
藝術家その變屈に名があがり　大阪　洋々
戀もよし金も蓄めろと叙父は云ひ　同　同
失業を見榮にする程良い暮し　大阪　道夫
離したくない手を分ける灯の流れ　同　同

病兒入院す

元旦の街を病院越しに見る　大阪　黑天子

入院後死亡す

ありし日の姿其儘着せて泣き　同　同

んね。聯珠屋はいゝことを云ひました。
「もつと研究して下さい、研究を。」

氣毒な病人の話（三）

中野　裸人

そうです、其の日は節分でした、僕が禁酒してから丁度廿日目の日だつたんです、僕は總ゆる方法を講じて酒の事を忘れ樣と努力したんですが、此の日はなぜか酒が飲みたくて仕方がなかつたんです、それで散歩でもすれば酒の事は忘れるだらうと思つて、固い心で家を出たんです。

そうですね、僕の足は矢張り賑やかな方へ向きましたよ、そらあもう、とても澤山な人出でした、僕も澤山な人に混つてぶら〳〵と歩いて行つたんです、いや別に三味線の音やピアノの音や酒や燒き肉の香に誘惑されたんじやないんです、まあお聞き下さい、僕は妙な性分でしてね、道を歩いて居ても僕の頭は決して遊んで居るんじやないんです、僕の眼は絶えず若い女へ注がれて居るんです、其の日もさうだつたんです、そして僕の目に觸れる女と云ふ女から僕は美を見出さうとするんですね、例へばです、僕の心臟をぴんと撞く樣な女、つまり僕の理想に適つた女が僕の眼につくとしますね、そしたら僕は其の女の髪や顏や姿や肉付きの工合から着物の柄模樣に到るまで總ゆる方面に亘つて綿蜜に觀察するんですな、そしてそれ等の物を僕の寶として一々味つて喜こぶんです、僕に其の女がとてもいい肉体の持主としますね、そし

病んでゐた事は知つてる散髪屋　松山　紫石
怒つてる様に女給の立姿　同　同
柳散るあはれ女給のなり下り　松本　民郎（らつぱ改）
いゝ花火巡査も整理ふと忘れ　同　同
羽織一枚買はぬ縁切れ　大阪　千雨
春よ春叫べご戀の來らざる　同　同
バイブルをひねくり廻し牧師老ひ　神戸　浪人街
カクテルや戀の破片を金で買ふ　同　同
卓燈のコードを卷いて飲む話　大阪　哲郎
マンホール踏めばさびしく夜の音　同　同
年始狀こゝしは妻の名も並べ　大阪　憲坊
年の暮事も有らうに女中病み　同　同
うつくしい谷を見下ろす春の丘　金澤　木偶人
客なこゝだけ母に似てるなり　同　同
白山を背景こして墓は立ち　石川　山々
サンルーム冬日灑けば猫が居る　同　同
靴下の足に冷こい大廣間　大阪　秀眛
詰襟のこゝで盃はかゞらず　同　同
闇なれば闇にこ思ふひこゝろ　豊中　有三

出家とその弟子を讀みて

坊主は嫌申すお方はごちらさま　同　同

たら僕はこんな事を考へるです、若しあの女が帶を解いて着物を一枚づつ順々に脱いで湯ぶねへつかつて終ふまでの經路をぢつと穴からでも見せてもらへたら、さぞ愉快な氣持ちがするだらう、そんな時にこそ俺は本當に救われるだらう、定めし僕の熱望して居た垢じみた、色々な赤い物を見られるだらう、斯う思へば僕はもう夢の國へ行つた様な氣がするんです、そして柔和な肩や張り切つた乳房や、すんなりとした輪郭の整つた腰の邊の柔かな白い皮膚が僕のすさみきつた心へ迫つて來る様な氣がするんです、こんな事が瞬間の間に僕の頭をかすめるんです、處がそうなつたら僕は愉快な氣持と云ふより、息苦しいまでに僕の氣持は鉛の様に重くなるんです、そして僕には一種の厭世じみた觀念が起つてとても悲觀するんです、もう僕には過去も未來もなくて只嘘僞な現實があるばかりなんです、斯んな氣持に襲はれたが最後、僕にはどうしても アルコールの力を借りなければ僕の氣持ちは晴れないんです。

あなたは又お笑いになりますが事實だから仕様がないんです、そうですあなたの云われる様に僕は實際氣の毒な病人なんです。

處が其の日も固い決心で家を出たものゝ何うかして酒にありつける様な條件が浮かんで來はしないだらうかと、思つて居た矢先斯様した暗い氣持が幸い襲つて來たもんですから、僕には如何する事も出來なかつたんです、併し僕も少しは考へました、あゝして

圓タクの衝突がなんだ日向ぼこ　大阪　大夢子
ベッドから見れば霰の雲がきれ　螢ヶ池　虹雨
解剖のメスから眞理飛んで出る　大阪　清河
墨をする何の好い句が雲に飛ぶ　豊中　川規
寢たる子の顔に慰められて寢る　三木　雨聲樓
廣告も配れぬ髭を剃り落し　松山　青帆

社頭雪

一番に俺が詣つた道の雪　鳥取　聽松
量見をかへてすがらう伯父の腕　神戸　醉月
押したのは女であつただまりこみ　福岡　不忘
持ち歸る落葉を掻くに恩に着せ　大阪　鯉友
寂寞の野を寒さうに馬を追ひ　長野　風來坊
壁一重隣の悔み聞いて寢る　愛知　文醉
働いてくれる心になればよし　大阪　丸葉
だらしなく袴を下げて松の内　高岡　かずま
無我の境それ神前にあればこそ　鳥取　源太夫
可愛い子も帳場にくれば叱られる　新潟　爲八
お氣の毒ニ云へば病人泣いてゐる　伊丹　松好齊
機の速さに緞縹も結髪もなく　大阪　童史
濕布すればするでそれ丈いゝ女　京都　水馬
原形を崩さずたぐん灰になり　大阪　千草

禁酒誓約書に爪印まで押して渡してあるし、近い友人には通知してあるんだし、此の場合は絶對酒に手をふれてはならぬと自分の心へ叱つて見ました、併しそんな事は却つて僕の心をいら〳〵させるに過ぎませんでした、僕にはもう立派な條件が出來て居ました—人生は短いものさ—酒は百藥の長　適量にやればいゝんだ—恐い物にはぶつゝかれだ—俺の意志が如何に强固なか試して見るのも面白からう—僕の氣持は何だか勢々して來た樣です、そして僕は勇敢にも片ッ端からカフエーや酒場を見て歩いたんです、處が如何です、其の日はどこの女給でも皆お化と云つて丸まげを結ふて居るじやありませんか、殘念な事に僕は赤い「カノコ」を見たんですフエルトの上の大きな脚も、胸高に結んだ帶も見たんです、僕はもう理性のない人間になりました、ふら〳〵としたかと思ふ時分にはもう僕の咽喉を辛い液体が鳴つて通つて居ました、初めの味ははつきりしませんでしたれ、斯樣して僕は固い誓を破つたんです、此頃では電氣のつく頃になると横町の酒屋へ行つてこつそり一合宛飲む事に定めて居るんです、併しお願ですから僕が近頃又酒を飲んでると云ふ事は誰にも云わない樣にして下さいませんか、そうでないと誓つた人々に工合が悪いですから、そうですか誓つて下されば僕も安心です、何れ又折がありましたら一度何處かでゆつくり一杯話し乍ら飲まうじやありませんか。（終）

醉醒めの密柑で女房愚痴を聞き　高石　凉哉
淋しさに歩いて見たる吾影よ　大阪　ぎさん
蝕める心詩にして赤い酒　長野　可醉

船中吟

鼾々旅の女を羨やませ　神戸　不然
出張のお膳え妻をなつかしむ　鳥取　湖山
ペン先が戀をささやくかと思ひ　廣島　露斗
兄弟は多し一人も頭抜けてず　大阪　四五麿
時は金茶が沸く迄に四十分　名古屋　草石
ハモニカの眞先君が代が出來て　長野　蛙皷
大晦日用もないのに出てもみる　大阪　樹光
徐行するこゝ燈臺の灯がとゞき　宮津　水郎
火を借つてこれは〳〵の人に逢び　龍田　翠峯
大阪が吐いだ煙りを吸ふて生き　大阪　周波
朝霧に魔物の樣に汽車が來る　同　清光
麻雀に妻の病氣など忘れてる　同　しげを
一錢と言ふ子の足にひゞがあり　螢ヶ池　長二郎
看護婦の羽子追ふらしい聲がする　同　詩櫻
きつちりときびすにのせた賴みごと　加古川　篤男
盛り花の置き處なき煤拂ひ　川西　普天
停電に火鉢の顔があるばかり　神戸　一鴉

讃岐の春

庄　萬よし

無産運動の三年生で、まだ檢束も尾行も、体驗したことのない自分は、同志安藤君と高松の埠頭で分れて、高松驛を通過して鬼無驛に着いた。一月も三十日といふ朝の七時である。角帶前掛けに鐵無地の羽織、マントの下には、明後日の演說會のポスターとビラの風呂敷包みを、忍ばせてゐることは言ふまでもない。

二三人しか下車しない改札を出ると、黑椽の眼鏡をかけた、皮ウソのマントを着た壯漢が、頰の筋肉をピクつかせ乍ら、驛前の廣場で自分の行手を遮つた。

「警察の者ですが、一寸お尋ね いたしますが」！

三日間は、其の筋の眼から免れて、行動せねばならない、使命を持つてゐ乍ら、一歩香川縣の土地を踏むなり、もうとつ捕まつて仕舞つた。

同志安藤君は四五日前、夜の二時半に上陸して見事に其の筋の警戒線を突破したのだ。昭和三年の三一五事件までは、香川縣の農民組合は、燎原の火となつて、全國に花々しい光彩を放つてゐた、當時の鬪士だつた蓮井、川西等の同士と連絡をとつた、三ヶ年に餘る官權の彈壓に、根こぎぶちのめされた無産運動の旗を立てる、演說會の會場の借入や、宣傳の方法とを打合はせて、潛行艇の使命を全うして歸つたのだ。

孫の熱今度も虫にしてしまひ　鳥取　暢山
きつぱりと別れたい氣も年の暮　大阪　いわを
麗人の襟足寒く見て通り　同　柳次
ストーブが不平の唾をあびて居る　同　三碧
病み疲れ母の眉毛のいと長く　兼二浦　如空
斷つて置いて又來い等の世辭　愛知　巧笑
自尊心皆張合つて生きてゐる　大阪　八歩
娘の思ひ親の思ひに元旦くるゝ　同　山茶花
たゞゆするだけが子守でないものに　明石　了念
鰯燒屋こゝら學校冬休み　三重　沃里
双六にまけて去ぬ子に忘れもの　大阪　吐句坊
死んだ子に父も口づさむ晋陀落や　同　泉流
お人好親父に似ても似つかれず　螢ヶ池　喜代志
行人のステッキも輕いお正月　同　十德

施療院の正月

院長の年始つめたく通りすぎ　同　奈緒美
失業とは見えない妻のかざりやう　大阪　梨風
能率も糞もあるかい月の暮　同　大和柿
不景氣は何處まで行くかあてもなく　大聖寺　溪鶯
教會を景色に入れて居る寫生　大阪　山月
竹馬を一とふし上げておこられる　同　一夫（十才）

この奇襲を見逃がした警察として、今日は安藤君を逸する筈はあり得ない、正面衝突を豫期して先進した安藤君が、檢束せられた時に、第二陣の自分は、この演說會を開くまでの準備する責任を負ふてゐる、にも關らずもう、高松警察の一室で、署長と一問一答を展開せねばならない羽目となつた。

署長「君は合法的々々といふが、安藤君が潛行して、會場を交渉したり、君が鬼無驛まで行き過ぎたり、吾々として合法的とは認めない」

S「正面から行けば、尾行を附けるし、訪問した同士を檢束するし、全農も、社民も、手を空うして遂ひ歸されたではないか」

署長「大衆黨の幹部が十人以上も出掛けて來て、二十疊も敷けない個人の宅で、演說會が出來るかと言ふのか」

S「會場を借りる跡から、干渉でぶつつぶされるから、同志の宅で開くより外に方法はない。香川縣で演說會をやつたといふ事だけで、吾々の意義があるのだ」

問答の間に安藤君も別室へ檢束されて來たらしい、高聲な激論が聞える、署の電話は香川縣廳なり、大阪府廳の特高なりとの引つ切りなしの連絡だ、ごゃの結果は「合法的な演說會は許すが、合法的に取締る」といふ、妥協が付いて、尾行の案内で内田の關屋旅館に引き揚げた、もう二時過ぎだ。

會場が高松市から二里近い圓座村の圓座劇場と、阪出田の青物市場と決ると明日の午後二時の、飛行便に着くやうに、ビラを大

めくらめあきに道をきく

安川久流美

A『句會なら行きます、川柳會なら御めん蒙りませう』

B『同ンなじじやありませんか、折角誘つたんだから、いらつしやいな』

A『いゝえ、異ひます、うちの親父なんか、川柳をお茶だと思つてゐるんですもの？』

B『じや、お茶の會だと思つて尙更都合がいゝじやありませんか』

A『デモ番茶の會ではネ』

B『ナル程さう、ヘッ……』

A『それに今年未だ尋常の娘ッ子が變なことを覺えましてネ』

B『どんな事ですいナ心配になりますゼ』

A『ナーニ矢張り句の事なんです』

B『苦は一寸早いですナ』

A『洒落じやありません、……この頃俳句や川柳の事を學校の先生から聞き嚙つて來るんですヨ……古池や……だとか五七五だとか老せ事をぬかすんですヨ』

B『ナール程』

A『二三日前にも娘ッ子曰く『川柳ッてのは排句よりも滑稽なのでせう、わたい等の今習つてる讀本に出てゐる番町でめあきめくらに道をききがその一句でせう？』と質問するんでせう、ナル程こんな事でも覺えるやうになつたのは親として嬉しいにちがひありませんが『番町』の句は有名な狂句ではありませんか、こんな句を兒童に川柳だと敎へる文部省の國定敎科書にも全く愛想がつきましてネ』

阪へ注文せればならないし、新聞社を訪問して、ニュースを輯まればならないし、人夫の手配、處轄警察の了解、會場の踏査、等々になると尾行諸君も案外者として有難いものとなつた。

三十一日は、安藤君は阪出の會場をSは圓座の會場を見分した、ポスターは眼拔きの町々に張られた、土地の夕刊は三段拔きで宣傳して臭れた、同志蓮井、川西兩君も尾行携帶で訪れて臭れる、やつと一と安心の晩酌をした名の同志で傾けると、華やかだつた二萬と數えられた、農民組合當時の愚出が、隣室の尾行のことも忘れて、心措きなく語り續ける。

「伏石事件の責任觀から、自殺した若林辯護士の位牌は、僕が毎朝燈明を欠かさない」

と蓮井君がしんみり言ひ出すと

「あの時犧牲となつて倒れた植田平太郎君の墓へ同志一行で墓參をしやう」

と安藤君が元氣に提議して可決、後で聞くと兩君はいゝ氣持ちになつて歸りには四五軒も梯子を極め込み、尾行を困らせた因果で歸宅したのは、四時過ぎだつたそうだ

一日、安藤君に起されると、昨日に代つた土砂降りだ、雨を冒して七時半に着いた幹部諸君を樋橋に出向えると、夜行列車で睡眠不足の同士一行は、拳闘の興行團そつくりである。改札前でレンズに這入つた一行の重量を調べると、

麻生(二十二貫)淺沼(二十三貫)田萬(十九貫)水谷、阪本(各十八貫)の五名で百貫也といふしろ物、年齡合百八十才、一人平均三十六才といふことになる。

B『それで『川柳』の文字が急にイヤになつたのです？』

A『まあ、さういつたわけですネ』

B『そんなら、めあきがめくらに道をきく材料を川柳——即ち句にするにはどういふ風にすればいゝのです』

A『……わたくしにあなが少し智恵を借り……斯うしたら少し位狂句を脱したやうです

B『ありがたう、ではサヨナラ』

新春特輯號

難解史句の解

岡田三面子

(1)四七頁第一二句歌人へ小鰺の句。後拾遺和歌集の異名を小鰺集といふ當時の歌人たる源經信大江匡房等を措き藤原通俊其撰者となりし所へ攝津住吉社の津守國基が小鰺を贈つて機嫌を取り爲に其歌多く撰に入りたりとて斯る異名を生ぜり

()同頁第一四句は樽九〇、三一〇に。ぐるんじの草紙の意味は不くえ經。とあり源氏物語の眞精神は法華經であるとの意味にて樽九〇、三一才妙智力比喩方便の物語、の姉妹句、源氏をぐるんじと訛りし例あるも今思ひ出さず、法華經をほくえ經と云ひしは樽一〇七、一〇才は上もなき地の下にしてほくえ經といふ例あり

(3)同頁第二一句皇統を梅で繼搏、第二句この花の歌御連枝の義理の二句は大鷦鷯尊（仁德帝）と菟道稚郎子と互に皇讓りあひ給ひし時歸化人王仁の奉りしといふ難波津に咲くやこの花冬ごもり云々を指ししものならん。

(4)同第二三句三烏の一羽に就ては柳樽研究第六年四月號川柳三烏傳、同第二四號沖の鷗ではに就ては同十月號川柳都烏を一覽ありたし。　竹重虛心若

野武士組といふべき、この五名に滾田河上君はそんなに肥えても居ないが五尺六寸を超えてゐる、何としても字義その儘の闘士連である。ボラのチリ鍋で、夜汽車の疲れに息を入れて、同士のゑびに任せて交ぜ書をした。

長江日夜流　麻生久、故山依渭斜　田萬清臣、闘志　濱田昌尾、香川奪還　河上丈太郎

余は種を蒔く者なり收獲は知らず　水谷長三郎

泥靴で踏まれた畔の下崩えて　安藤國松

尾行せられ乍らの宿を朝寢する　庄健一

夕方より晴れた兩會場は、四五里の山奥から自動車で來た有志を首として開會一時間前に滿員、河上君の霧社規祭の報告演說が、二回の注意を受けた他は中止もなく三分年が渡つて聲も聞かなかつた無産黨の獅子吼に完全に闘ふ取られて往年にも勝る堅實な組合を見る日は遠き未來ではあるまい。この行、忙中閑二三のエピソートを生んだ、ナンセンス物語りである。

一、讃岐男

田萬氏は高中出身の關係上、高松名物のカマボコ、煎餅、讃岐米、豆腐や黑豆の辛煮まで郷土名物の棚卸しに氣焰當るべからず、口角の泡沫は飛んで男自慢に及んだ

「諸君！讃岐男に阿波女つて、香川縣には好男子が多いんだよ」

口の悪い同士、しつぺい返しに

「左樣！論より證據、香川縣出身の代表を見よさ、三土忠造と三木武吉と菊池寛とが好男子見本としてネ」（以下四十七頁へ）

竹馬居雜筆

蛭子省二

(15) 讀本の川柳其他

先年『鯱鉾』誌へ數ケ月に亘つて、國語讀本に採用せられた川柳を紹介し、一二卑見を加へた事がある。私は子供をもたぬので、子弟教育には全く無關係の立場に置かれ、現在の教科書がどんな内容に、改訂編纂されて居るかを知らぬ。あの當時も同樣であつたのと、且つ朝鮮の田舍に住み、教師先生方に知己を有しなかつたので、調査の不行屆は勿論、材料の蒐集に手を盡す事の不便もあつた事情上、貧弱な記載よりなし得なかつたが然し有名な讀本は大體網羅し、概略を窺ふには足りたらうか。其後の新版にもつと興味深い解釋を、下し得らるゝものがあるかも知れぬが、近刊『川柳新譯』中の『教科書に現はれたる川柳』の項をみても、私の紹介した以外のものは載つてゐないのみか、去十二月富山房から創刊號の出た『國漢』誌上、高坂氏（東京明治中學教諭）の、『川柳と中等教育』を讀むでも、異つたものは引例されてゐないから、拙稿で凡そは盡されて居るのかも知れぬ。

此道に就ては實際に教鞭執らるゝ竹重氏が、完全な蒐集研究をして下さるゝの御通信にも接して居るので、後日讀者諸氏の御滿足さるゝ、御發表があるであらう專門的に手分けをし、從事して頂くのが寔に合理化的であり、安神ができる。

私は教育學とか、中學の教育方針とかを知らうとした事もなく、專攻外であるために、多分の興趣を誘ふまでにも到らぬので、實は高坂式の一文を味讀してもその御高評が處々諒解し得ず、全く知識の無いのを示すわけである。然し川柳詩徒として、教科書の採用句に對する時に或は教育家と觀賞上の相異を釀すのも止むを得ないのかもしれぬ。敢て高坂氏に反對してみるものではなく、又反對するのであれば、一應竹重氏にお尋ねしてか

らで事足るのであるが、そういふ謂でないから直に筆を下ろす所以を、切に御諒承と御寛容を願つて置く。

川柳が擡頭し、イヤ流行し始めたから和歌俳句なみに、教科書に加えてみようといふ、單なる色ごり丈けのものではなからう。『川柳』の一課を遲ればせ乍ら挿入した主張は、編者により種々雜多であるであらう。が古句をもてやたらに、現代思潮にあてはめて解說し、教授せんとするのは迷惑する研究詩徒のあるのみか、そはやがて詩の冒瀆ともなる場合がある。古句は古川柳として生命あるもので、古川柳家は百年後の社會狀勢をも豫想し、大未來吟を作つては居らぬ。古句の味到するには、江戸時代の知識がいる元と古句研究は江戸文學研究なのだから生徒に江戸文藝の一端を窺はすれば、主要の目的は達せられるのだ。因て以て現代相にまで對比し、披判するは應用にすぎぬ。應用とは人々個々の思索にまつべきもの、川柳の一課は古句の含蓄する、時代的詩精神を率直に完全に說けば、學問上にも教育上にも、正しい教材たり得るであらう。徒らに教師が自らの個性をさらけだして、講義するが如きは、程度を超ゆるものではなからうか。私は中學に教師用の參考書が、別纂されて居る、道理を察するのである。

○釣りなどもしてみる馬鹿な軍學者
○太平の世は兵法もはらこなし

と云ふ句にしたこころが、『穿つなあ！』と笑つてばかりも居られないと思ふ。近親知友に、一人も失業者が居ない！と見えを切れる人はおそらくないであらうこの失業時代、少しでも下手な事を云つたならどんな激動を生徒の胸に刻むかもわからないのである。

と。近年の失業情況と思想問題とを、古句に連緒して深慮さるゝは、御親切な解釋なのではあらうが、そは內面的に古川柳家の係るこころではない。寧ろさうまでも現代世想觀に捕はれるのは、中學生をコマッチャクした神經過敏なものに、リードしはせぬか。私は古句の詩的にもつ餘裕あるユーモアを、素直に理解する力をのみ養成したならばと思ふのだ。

○源左衛門鎧を着ると犬が吠え
○佐野の馬戸塚の坂で二度ころび

に至つては、かく迄主人を思つてもかゝる悲慘な生活をせねばならない事に對する、失業乃至は下級武士の絕望的暗い笑ひなのだから、これまた、生徒にどんなに強い教へを植えつけるかも知れないのである。

の如きも、德川時代の武士の風習及そが制度活下の精神を詳にしたなら、詩の表示明朗性な淸いシムパシーを持つて見れると信ずる。青年の頭はピエアーだ。そこへありの儘の『眞』を授けるのが教育なのだ。況んや源左衛門の結末は、三箇の庄を子々孫々に至るまで頂戴して、本領に安堵して歸るぞうれしかりけるとあつて、必ずしも失業の句とのみ、偏解してしまふの理由を、見出し得ない。

彼れ正成は、大忠臣とはいへぬ。なぜならばタッタ七度生れかはつて、國に報ひむとの、限定した忠義ではないか、吾等は幾度も幾度も絶對忠を捧げるのでなくてはならぬと、解釋した教師がある。隨分な脱線であつて、詩を理解しないものが、小主觀的な個性に多分な理智を加えると、言葉の含蓄を見落してしまふ。七度が三度でもよいのだ。假りに古川柳一課により、惡思想に走つた生徒があつたとすれば、そは所謂應用解に禍されたもの、否現代教育全體に缺陷があるからなのである。

社會の思想的大波が狂ひに狂つて、道德さへも轉換させんとする現代、頭腦未だ定まらぬ中等生徒に、この盲目的神聖暴露の句を教へるのは考へものではあるまいか？、表面的滑稽だけに講義を止めた處で、彼等の鋭い智識へのあこがれは必ずや自由に飛び行くであらうから……

と。そこだ。若し自由に飛びゆかなかつたなら、教育はヒカラびてしまふ。嘗彼等に暴露をのみ恐るるならば、毎朝配達される新聞は讀ませ得ない。政治に經濟に漫畫に三面に、餘りにも痛切な雜刻である。眞に社會の實情を憂ふるならば、古川柳の如きこそ却つて、詩方面から穏かな理解が與へ得られる。スポーツに親しむ青年に、左傾者はないと聞くが、古句の堂奥に入つたならば、等しく世間を騒がすの徒は出ない。川柳詩は赤裸々な人間性を詠むもので、相互を知り得るからである。生徒の經驗と知識が、古句を味はひ得る迄の詩情をリードすれば教授は足るであらう。

川柳の教材として適當なるは……實生活の寫實的句であろうと考へるのである。そしてまた、川柳の上乘なものも多くはこの部類にあるのである。

はた言であつて、川柳は大衆的な人間詩であるからだ。私が常に歴史吟に餘り重きを置かぬのは、川柳本來の意味からの名句が少いからで、某誌の投句家中に、何年來と未だに日本歴史やお伽話の飜譯的な、句許りを寄せて居る人を見出し、其の創作熱の乏しいのを思はせられる。

（私は川柳玉虫社中の編輯に係る、『卓球タリムス』誌にも熱心に執筆して居る外、スポーツ誌に關係をもつて居るが、川柳のスポーツ句＝丁度本誌五月號に森氏選の『スポーツ』なる課題もある。＝は、ルールの蒸返のような作が多い。そんなものは運動家の眼からは舌足らずに過ぎないのだ。）

高坂氏の如く、古句を觀るに、きつと現代の都會人生活と對應されなくては、御滿足が出來ないとすれば、何にも古句を借りる必要はない。現代人の痛切なる作がありあまる程ある。國語讀本が現代作を採用せず、古人作のみによる事實にも、留目しなくてはならなくはなからうか。

私は某中學三年生四十數名に、古句を出題した答案をもつて居るが、少し古いからここに掲載は見合せる。案外率直なもので、そう神經過敏にはなつて居らぬ否三年位では、ごうも江戸文藝の知識の貧弱なのを認めさせられるのだ。即ち古川柳を通じて、切に其點を補ふ事が肝要である。

川柳を狂句とか川柳點とか種々の名稱で呼ぶ事は、川柳と云ふ語が一般化して居る今だ。統一してほしいと思ふ。と、最後に注意を與へられて居る。川柳と川柳點とは意味が違ふ。又明治代に新川柳の復興したのは、狂句打破にあつたのだから、川柳と狂句を同一に見做して居る者は、眞の川柳詩徒にはない。だから今日、川柳と川柳點と狂句の三者が併存して何等妨げとならない。川柳丈けにしてしまふ運動は無理だ。國語讀本に三語が勝手に用ひられて居るのは、正しい場合もあり、正しからざる場合もある。そは内容に就て論ずべきである。所謂狂句を掲げて、川柳とヘッヂングされないためにも、必要ではなからうか。而して眞に古句が理解されてくれば、編纂者に於て眞川柳のみを採用するに至るのだ。

追記　西落本などに、川柳へキヨウクミルビを振つて居るのがある。又川柳點の狂句などもいつて居る。（今私の机上にある尾崎氏の江戸文學研究の『銀鷄作の妙な人情本』の一節にも『食べながら飲みながら、皆々雜談、川柳（と假名打つてゐる）の穿ちの實例やら云々』）昔の狂句と今の狂句との用ひ方の相異は知つて置き度い。野崎翁の『私の見た明治文壇』中に狂歌の説明がある。狂の字の意味が詳にしてあるのは一讀を要する）

古川柳を漫畫化する折りに、現代風に描き直してしまふ事には、全部賛意を表し得ぬけれ共、更に句精神を損ぜぬものは、支障なしと言はねばならぬ。例へば

○箸を置く置かぬに息子ついと出る
（明和代）

池部釣氏は息子が中折帽をこりつゝあるを描く。明和時代には中折帽はないのであるが、句意は損じてゐない。

○借金を潔さよくする祭り前　明和代）

池田永一治氏は、小判を描いた昔風になつて居る。此句の如き、神田　山王祭禮關係の話柄を知る時に、金に執着心の多い現代には、もうそんな意氣張りは喪せてしまつて居るのだから、借主がオールバックでは融通がつかぬ事となるのだ。細木原青起氏が、清水の舞臺に、中折帽ロイド眼鏡の背廣服、大丸髷の若夫婦が下を覗いて居る圖を描かれ

○添ひとげて覗けば怖い清水寺
（明和代）

としてあるのは、此句の生まれる迄の古俗説を全然無視して居らるゝ故、句の生命が表示されない。これはごうしても古風にしてこそ、『添ひとげて』句主のネラヒ所が宿胚するのだ。古川柳は江戸文藝なのだから、時代風潮を度外視してはならぬ。『清水寺』を『ビルヂング』と替へて、通用する繪であつてはならぬと信ずる。（節分に送稿）

近作抄録

ひろし選

あかつきに女の指もあたゝまり　近江　たけし
冷たき襟のプラトニックラブ　同　同
ポケットに鉛筆の芯折れてゐる　同　同
抱けばありし日の匂ふショール　島根　麗函
ある時は家主丁寧振つたりし　同　同
たまさかのお酒に醉つたいゝ良人　同　同
小氣味よく惡阻を見てる六年目　香川　三汀
古着屋の眞晝を時計ボンと鳴り　同　同
忘れ得ぬ炬燵の味となりにけり　大阪　鶴峯
貧乏の上に有閑婦人たり　同　同
派出婦は有閑婦人の雜巾よ　加賀　白花子
三十とは見えぬ若さで生きてをり　大阪　詩郎
淋しさは箸の音なり母と子と　長野　有爲郎
冷えた茶を飲んで借らずに引下り　大阪　鷄鳴
肉体美腕卷時計の幸福さ　高野山　於菟彦
打扳器と給仕いつしか遊んでる　大阪　素月
表書賴めば夢をからかはれ　長野　道樂

選後寸評

▽川柳塔の異彩たけし氏も、長らく句を見せなかつたが、まだ過去の澁滯から脱して居ないようだ。「あかつき」の句は、氏の女に對する氣持がよく感じられる。「冷たき襟の」は原句「襟よ」であつたが、「よ」は感傷すぎると思ふ。三句とも寂しい句だ。

▽麗函氏——今月のものにはいゝ句が少なかつた。「抱けば」は單なるセンチメンタル「ある時」「たまさか」共に氏のものとしては平凡。

▽三汀氏——相變らず異彩のある句を見せてくれる。「小氣味よく」は痛快な句だ。「古着屋」は平凡。

▽「有閑婦人」二句（想は異るが）鶴峯氏のは文字の遊びであり、白花子氏のはするどいものをもつて居る。句をつくる立場の相違がこんなにも異るものか。

▽「肉体美」は微苦笑せざるを得ぬ句だ。

▽「打抜器」面白い事務室風景である。

▽「枯並樹」は原句「失業者の樣に立つて居た」だが「めいて立ち」とした。失業群の都會の冬を現はして居る。

正月を火鉢かゝへて一人者　大阪　一久
こうさせた人の唇忘れかね　大聖寺　吉祥
亡祖父の事を思ふて家まもり　大阪　靜香
笑はない娘の氣にもなつてやり　一宮　眞美
角帶へ手を貸してやる初奉公　大阪　菊路
負けそうな方が煙草を灰にして　石動　政斗
北風に向ふ車の軋る音　大阪　卯三
ありあはせですがお酒は封切さ　郡山　右月
おゝ寒い風は大地をけつて行き　大阪　一价
さて出るときまれば兵舍よいこころ　羽衣　松枝
かくしてる病を人は聞きたがる　螢ヶ池　銀花
藪入の汽車あまりにも遲すぎる　大阪　龜坊
さらゝゝと紅葉散り小雨降る　島根　量子
新妻の手紙戀文めいてゐる　大阪　宏朗
床の間の飾りへ除夜の鐘を聞き　螢ヶ池　杜洋
枯並樹の失業者めいて立ち　大阪　羅浮仙
髭ひねり地主靜に筆を取り　島根　夕陽
私生兒の戀を女は理解して　大阪　千春
効能をあるだけ書いた藥風呂　同　金角歩
酒癖を車掌に話し乘せてやり　東京　氷村
寢かへりへ今度は右の鼻つまり　大阪　木馬

○

▽今回の集句にはすつかり失望させられた。原稿を何回となく繰り返し讀んで苦るしめられた。

▽ほんとうの事を詠んだものは句の構成がまづくとも、人をひきつける。たゞつくつたものでは力がない。うまい句を作るよりもほんとうの句を生んでほしいと思ふ。

▽川柳はこうあるべきものだとか、かく進まねばならぬとか、限定すべきではあるまい。各自の持分に自由に進んでいゝと思ふ。それらの中から特異な實を結ぶ花が咲くと思ふ

○

▽欣女が死んでから一年を迎えた。二月廿八日がその記念日である。頂いた悼句や弔詞を揖め、遺稿と共に「はるかの希望」と題し小册子を刊行すべく、只今印刷中であります。

▽此一年間私は川柳的に、いつも眠り勝ちであつた。自分の才分が川柳的でないのかを疑ふてもみる。ガムシヤラになれない自分を悲觀もするが、此機界に奮勵する覺語で居る。

（ひろし生）

◇　◇　◇

◇　◇　◇

火華

○ 劔花坊は今日悲劇的といふ言葉を冠し得る唯一の川柳家だ。彼は常に動搖する抒事詩人であつたと共に、不幸を計量する抒情詩人であつた。亦あるのだ。年を取つて月並が好きになつたなどゝ悟り顔に脂下つてゐる周魚などに比べて、彼の情熱が胸をうつ所以だ。

善惡は別として巨人は常に悲劇的である。（柳亜木）

○

宿命的に傳統主義に貫かれた番傘きやりの作家達が、理論を輕蔑してきたことは當然である作家が理論を持つとは、自分といふ人間がこの世に生きて何故川柳制作などゝいふものを行ふのか、といふことに就て明瞭な自意識を持つといふ事だ。少くとも之が紙問に强烈な關心を持つ事だ。云はゞ己れの川柳家たる宿命に關する認識理論を持つ事である。

川柳を遊びと解する彼等が川柳上の理論を持たず、又持ち得ぬのは當然のみ。（同）

○

川柳の定義を訊かれてきやりの迷亭答へて曰ふ。「川柳は人生の記錄であり、世相の描寫であり、社會の批判であり、哲學であり、宗教であり作家の魂の反映である」と。如何にも美事な言葉である。如何にも空々しい言葉である。恐らく頭を搔いて引さがつたであらう質問者へお節介ながら申上げやう一川柳とは人間の肉體が歌ふ人間詩だそれ以外の何物でもない」（同）

○

○丸帳に於ける○丸は常に正しい。だがその正しさは說教の範圍を出でない。成程あなたのいふ通り、青年は先つ走りで穢れる。同時に亦老人は脂下つて穢れるのだ。あらゆる穢れを甘受して一點の穢れなき理論こそ我々の希求の的。だが之はあなたには餘りに青年過ぎやう（同）

○

○丸さんよ。世間は廣い。川柳は愚かあらゆる文學なんか屁とも想はぬ冷酷な教養を持つた勤勉な青年がうよ〳〵してゐる

化粧柳壇

題「春」　三月十日締切

その他雜吟を募る

▼用紙　官製ハガキ（化粧柳壇と用記の事）

▼賞品　秀逸數句に薄謝を呈す

大阪市西成區千本通五丁目七　麻生路郎氏宛

化粧新聞社

のだ〳〵先つ走りも困るがあなたやあなたのぐうぶみたいに脂下つてゐても仕方がありますまい。（同）

「番傘」が其舊同人杉村蚊象の追悼會を催したのはいゝが、その兼題が鼻であつたのには少なからず驚かされた。それは故人が特異な鼻の持主で「鼻さん」の異名を頂戴して居た人だけに折角の會が故人を偲ぶ會であつたのか侮辱する會であつたのか解らない。こうしたことにも番傘幹部のぐうたらさを遺憾なく曝露してゐる（S）

○

雨田君が「荒海や」の句を翁の作としては不出來だと言つたのはまだしも文法上の誤謬を指摘したのはフルイぞ。横たはると言はなかつた處に詩人としての翁の偉大さが偲ばれるナンテ釋迦に說法だが構想の比較で變に脫線したのかな（むの字）

○

「むさしの」二月號に「水府さんと路郎親分と溪花坊先生の……」云ふ書出しで天王氏が「大阪の柳誌とその人〻」をものされた。可成公平に大阪の柳壇を見てゐる。それに「大大阪」白雨君の懸賞金を問題とする等中々ヤナリステツク、インテレストにも豊んで居る。近頃稀れに見る才筆と云ふべきだらう。天王人が何人の匿名であるか聞きたいものである（Y）

○

先日路郎主幹を訪問した處玄關に来俵が五俵程ころがしてあつた。柳人で失職して食ふに困る人はよろしく不朽洞につめかくべきである（Y）

川柳時評

眞實とは

松丘町　二

一

世の可憐な喇叭卒共は、嘘にも値せぬ嘘を、幻暈を知らぬ論理的記號のみの戯列を、臆面もなく吹き立てる。だが一體如何なる眞實か彼らの喇叭を通じて語られたといふのか。川柳は眞實を歌つてゐては一向つまらないと諸君はいふだらうか。それは眞實の何物かを知らない漠然たる概念だ。この概念は從つて事實と眞實との區別を辨へない。

今夜は舊暦十五日だ。月が皓々と輝いてゐる。時々雲が掠めると、すうつと瞼を閉ぢたやうに庭木の影が曇る。これは事實だ。月の在る限り正に月の齎す事實の報告だ。『ぢつとみると月にもかすかに苔が生へてゐる』これは眞實だ。月が芥川龍之介といふ一つの鋭い眼を通じて語つた一つの眞實だ。

幻を織る理智のことは既に說いた。言葉も亦それ〴〵の陰翳を所有する。例を擧げて說明しやう。茲にAなる人間がそのあやまたぬ能力で、健康だと信ずるB及びCなる人間の最も精密な感情的な會話を正直に寫實したとする。出來上つた手記を讀んで諸君はその荒唐無稽な記錄に驚くであらう。虚で現實はこの會話は正當に通用した。何故か？、二人の間だけに通ずる隱語、その姿體か語る一瞬の瞬き、掠める微笑、言葉の抑揚による無限の陰翳――會話が正當に通用したのはこれらが無言の役割を勤めたが爲だ。荒唐無稽な手記を得たのは、Aにとつてこれらのノートは不可能だつたが爲だ。諸君がこの會話の曖昧をAの不才に歸するも、BC兩人の精神的不健康に歸するも勝手である。只諸君は日常の會話が完全に遂行される所以は、互に相手の言葉の無限の陰翳に忠實であること、即ち相手の絶對言語を誤たず直觀するが故であることを了解すれば足りる。

今BC二人の會話がAの正確な寫實主義によつて荒唐無稽な手記として提出された。我々はこの手記から、假令ば二人が戀

愛について語り、Bが信を主張し、Cが之を反駁したといふ單なる事實は知り得るのだ。同時に我々は我々の望む眞實はいさゝかも探り得ないのだ。諸君はこの手記を齎したAが若し優れた川柳家の眼を持つた川柳家であつたなら、この一見荒唐無稽に見える寫實の中から、書かれた文字以外に何事かの眞實を摑んでゐなければならないと確信しないか。二人の姿體から、言葉の陰翳から、詩的眞實の主觀的把握を誤らなかつたと思はないか。諸々の事象は詩人の寫實主義に於て捕へられる時、初めて正當に人を動かす眞實となるのだ。眞實が人を動かす最もよき例を人々は「正確な現實主義精神の發露である小兒の叫びに於て知るであらう。

かくて川柳家は人間事情へ自然萬象へ寫實の眼を向ける。數々の眞實が川柳を通じて語られなければならない。

二

以下私は句に就て聊か危險な解析を試みやう。

淋しさが細い肩からとんできた　丹路

朗かに笑つてゐる。彼女は文學を理解する。チエホフの線の細かな鋭い併し飽くまで人間的な作品を愛する。映畫を論じ、階級鬪爭を批判し、友愛結婚を認める。彼女は確信を以て人生へ微笑みかける。然も三一年の女性たるべく最大の條件である肉體の健康性に缺けてゐる。固より彼女の罪ではない。彼女は知らない。彼女は笑つてゐる。ふつと男の心へ——共に談じ共に笑つてゐた作者の心へ『淋しさ』が飛込んだ。彼女の細い肩先から。作者の眼はこゝに相手の姿體から詩を摑んだ。

無賴漢心の奥へ歸つて居　閑生

世の中には味もそつけもない人間が多い。そして金と名譽と教養とを備へた人間に、味もそつけもないのが多いから妙だ。『愛すべき無賴漢』といふ言葉がこゝに生れる。味もそつけもない人間の眼を知るには、味もそつけもない人間の眼で澤山だ。だが無賴漢の眼を知るには、作者の如く眞實を探る非凡の眼が必要だ。こゝに心の奥へ歸つてゐる無賴漢の心境は、作者の心境にまで引上げられてゐる。人間の心の影を作者は覗いてゐる。

生活に臍の存在さへ忘れ　公一

生活に齷齪することはよろしい。事新しく云はれるまでもなく、臍の存在など生活の如何にかゝはらず忘れてゐるよ、と諸君は云ふか。お先走りのシークガール。人生はエロチックだナンセンスだグロもいゝわと、きよろ〳〵しながら輕薄に笑つてゐる彼女らが、お臍のあたりで秘かに握りつぶしてゐる愁ひ顔を作者は知つてゐるのだ。被搾取階級の人々が臍のあたりにどんな覺悟を締めこんでゐるか。又ゐなければならぬか。だがやゝもすれば生きることのために臍の存在を忘れやうとする。忘れやうとしてはハツと自省する。人事ではない。これは作者の

嘆きの聲だ。と作者は云つてゐるのだ。人々は臍にこそ各々の眞實を握る。それが見透せないやうな眼は擬眼だよ、と作者は云つてゐるのだ。

子を連れて行けばバッタもイナゴもゐ　　緑雨

作者の心が靜かに微笑んでゐる。『子を連れて行けば』全くだ。子を連れてゆけばこそバッタもイナゴもゐるのだ。子と一緒でなければバッタやイナゴなんか一匹だつてゐやしないのだ。誰が戀人と歩いてバッタやイナゴに呼びかける童心を持つだらうか。作者は秋の野の姿を、自然の眞實を見事に捉へて、何の野心もなく淡々と表現してゐる。底深い眼だ。微笑だ。

人妻もおりく夢は見るものぞ　　一徹

獵奇と戀愛と、夢こそは人妻にとつて樂しくも怖ろしい。人妻が夢の世界で、どんな性的冒險を樂しんでゐるか。そこは彼女が家庭の暴君である夫から獲得した絶對自由の世界なのだ。人妻の夢を追うて、作者は遂にその夢を肯定しなければならなかつた。夢を捉へて斯くばかり扳き差しならぬ眞實が他にあらうか。

風よそんなに押して吳れるな　　二南

智識階級の智識が演ずる悲劇を考へながら、サラリーマン・ロードを歩む作者の姿だ。風こそは蒼ざめた都會の膓を撫でゝ、人々の耳に囁くのだ。『君の智識が演ずる愚劣は、君自身で觀よ』と。

妻に死なれ屋根の布團を眺めゐる　　濁水

不幸にも死れる汽車道近かつた　　春秋

世渡りを吃る仲仕の晝休み　　新水

（第一句）呆然と屋根の布團を眺めてゐる。又しても空洞の心を充すものは悲しみだ。この場合、屋根の布團は作者にとつて全部だ。悲しい眞實だ。

（第二句）不幸にも、全く不幸にも。

（第三句）生活の苦勞を知らぬ人間は、決して世渡りを吃りはしないのだ。吃る心とは嘘のつけない心だ。作者の眼だ。

掛茶屋の猫今月はみもちなり　　かほる

久し振りにかほるさんの眞骨頂に接した。

猫の戀は俳句の季題に拾はれて、古來幾千の句を生み、或は題吟としてあらゆる猫の風貌が川柳にも讃み盡された。だがみもちの猫に至つては……かるほさんの、そしてかほるさんのみの世界がこゝにある。柳俳無數の概念の手に弄ばれて、一向浮ばれなかつた猫の姿が、かほるさんによつて始めて板についた。かほるさんの才は今日稀有である。一度失つたら二度と得る事は覺束ない。當來の作家等、誰が氏の作を模倣しやう。氏のやうに歌へこいつて誰が歌はう。誰に歌へやう。今日新しい川柳に潑溂たる情熱を傾けつゝ、尙氏の作に心をうたれるこいふことは、餘りやさしい業ではない。このやさしくない業をなしとげて、作家かほるを生んだ育ての親は、申すまでもなく路郎先生である。

月評 作家展望

路 葭乃郎
琴 ひろし
山 人
亂 雨 樓
町 耽 二

月評「卓を圍んで」に次いで「作家展望」を引き續き掲載することにしました。例によつて御愛讀を願ひます。

（編輯局）

關本雅幽

1 終點の灯にはつきりと飢えて居る

2 淋しさは癒えずチツプを投げてやり

3 飲みに來てくれぬと怒つて居るそうな

4 腹空かぬ日だ屋根ばかり見ゆ

山雨樓——何れの句にも雅幽氏の個性が受とれるやうに思ふ。殊に(二)の句に於ては目のあたり同氏に接するやうで、氏のありつたけのものが迫つて來て居る。川柳も斯う云ふ風に出て來ると決して遊びごとではないと云ふことがはつきり判るだらう。何れの句にも一抹の淋しさが流れて居るが自分にして見れば氏と手を握り合つて語りたい程の懷しみをしみ〳〵感じて來る。つまり句に雅幽氏が出て居るのだとしか思はれない。

琴人——雅幽氏の句は四句ある。此の四句の力點をよく見ると何れも甲乙がないやうに思はれる。傷付いた心の惱みを酒場等で癒やさんとする。そう云ふ事は多くの人のやる事だ。初めに此句を讀んだ時にはそれ程に心は打たれなかつたが後に同氏が子を亡されたと云ふ事實が「中堅作家は語る」の中にあるのを讀んで初めて私は此句が如何に深刻な惱みを以つて生れ出たものであるかと云ふ事に心を打たれたのである。で此句にはそうした事實の前書でもあつたなら、より以上句に深刻さを增しはしないかと私には思はれます。

葭乃——そうした前書を置くには ふさはしくない句だと思ひます。此句をすつと讀みますと何うしても戀の痛手を負うた人とか、もう到底戀を追ふ事の出來ない年配にある人の淋しさのやうに思はれます。夫れでこう云ふ考へ方はそうした境地にある人の誰もが考へて居る事ですから、それ程珍らしいと思つたり、感心したりする句ではないと思ひます。

亂耽——便宜上私は此句を「淋しさは癒えず」を上齣とし「チツプを投げてやり」を下齣と分けて考へると上齣の「癒えず」と云ふ語から詩人的な神經質的な響きと、下齣の「投げてやり」の語から受ける弱い諦觀的な響きが相呼應して此句を生かして居ると思ふ。

町二——(一)の句は鋭く(四)は特異(三)は平凡(二)でチツプを投げつけられた女給の哀しさうな眼を作者が見て居なければ投げてやり」と云ふ表現は不遜である。四句中句として(四)を私はとります。

ひろし——(一)の句は終點の灯に飢えて居ると云ふ現實をしつかり直載に摑んで居る。中五の「はつきりと」が餘りはつきり過ぎる嫌ひがあると思ふ。(二)は葭乃女史のお說に同感である。(三)は雅幽氏の句としては凡調(四)は調子が特異なために目をひくが矢張ありふれた句ではないかと思ふ。

路郎——四句を通じて生活上の淋しさが出て居る事は事實だが、且つての雅幽君の作としては今一段の磨きをかけて貰ひたい。先程此等の句と雅幽君の近狀を結び付けて前書の必要を說かれて居たが、此等の句を讀んで先づ誰の頭にもピンと來るのは葭乃の云つた失戀の痛手か或は生活上の破綻、失戀と云つたやうなものであらう。尤も作者自身は琴

人君の説いた子供を亡くした場合から來た失意であるかも知れないが、それを一々前書で補綴する必要はあるまい。四句の中で題材は古くとも句として相當價値付けられて居るのは(一)及(一)であらう。(三)はひろし君が云つたやうに雅幽君としては凡調である事は免れず、(四)はしみ〴〵とした淋しさを出しては居るが此れも詠み古されて居る境地である。こう云つたからとて四句が四句共そう拙い句ではないのであるが、今迄に多くの佳句をはいて來た雅幽君の句として物足らなさを感ずるのである。

蔑乃——雅幽さんの此の四句の中では(四)の句が一番いゝと思ひます。併し此の句の調子は雅幽さんに一寸珍らしい調子で川柳雑誌の同人であつた刀三さんの匂ひが調子の上にあるやうに思はれます。雅幽さんの淋しさの表はれた句では以前にもつと官能を刺戟した、つまり私達女性が嬉しがるやうな句が澤山ありました。もう一度さうした句をどし〳〵拝見したいと思つて居ます。

山雨樓——(四)の句は蔑乃奥樣さんも町二氏も推賞せられたやうですが、も一つれれて居ないやうに思ひます。單調にこうつぶやいたとうけとられても仕方のないやうな、叙法上のもの足らなさを感じます。それから(一)の句の場合勿論主觀句ではないのであつて、句主の淋しい心象に映つた一點景であらう事は疑問の餘地がないが、こう云ふ句境をとらへた處にも作者の個性的な心の現れが覗れると思ふ。

路郎——雅幽君の句で優れたものを少しく紹介して置きたいと思ひます。四卷一號に

南無阿彌陀佛と炬燵へぐつと伸び

お前もお前だと膝嫁へ向き

待遇法たゞやゝこしくなるばかり

皮ばかり赤き蕪もあるぞかし

講義錄神々しくも五燭の灯

等があります。それ以前には

脊の子が夕陽を浴びて落ちそうな

姉さんにまけずに生んでみぢめなり

從うて行かれば犬の首締り

一齊にをせば倒れる柵なるに

愚痴きいてくれぬお客はいんでくれ

あかるみへ出て來て蚯蚓死んでゐる

嫌はれてゐるとは知らず喋舌つてゐる

嬉しさは手紙の中にまた手紙

等々々がある。

蔑乃——(四)句を讀んで居ますと、別にする程の仕事もないし、そんならと云つて出かけて行く程の金もないし、又出かけて行く程の氣にもならず、如何にも屈托した男が二階でぼんやりして居るのが眼に見えるやうに思ひます。そうした場合ですからあゝ腹がすかぬと云ひ切つて更に屋根ばかり見ゆと稍落付いた調子で止めてあるのが誠にピッタリと來て居る樣に思ひますが何故叙法に無理があるのでせうか。

路郎——叙法に無理があるのではない。今蔑乃が云つただけの内容は充分にうけとれるのであるが、斯うした倦怠の境地から生れた句が可成澤山あるので、云ひ古された點からもう一息だと云つたのである。斯うした倦怠の境からも慾を云へば何處かに燃ゆるものが欲しいのである。

山雨樓——僕もその點が云ひたかつたのですが、つまり古い句と云ふ點でもの足りないと思つたのです。

大山露斗

1 **鍬をにぎつて長い孝行**

2 **御長命秋のひがんにおはします**

3 **淋しくなるよ金の親切**

4 **心得て候と云ふ返事なり**

山雨樓——廣島から大阪へ、大阪から廣島へ轉々と流轉生活を續けて居り乍ら、川柳の精進を怠らない露斗氏に心から敬服するものである。(一)の句、田舍の素朴な農夫の姿がこの十四字の中に現れてゐる。僕は元來、百姓の生れで鍬を握つた事もあるし、實父は現に六十の今年まで一途に土の生活にいそしむでゐるが、僕の親爺こそ、この句にうつてつけの感じがするのである。こうした句にはやゝ警句めいた句がするものあるが、句主の敬虔な純眞な心境から生れたこの句にはそう云つた非難を加へられない樣な氣がする。

路郎——私が露斗君の句をみだてからもう幾年になるか、隨分長い間である。今山雨樓君の言はれた樣にその長い年月を幾度か郷里廣島へ歸つたかと思へば大阪へとび出して來る、かと思へば又郷里へ舞戻ると云ふ流轉生活を續けてゐて しかも川柳には不斷の努力を續けてゐるのを見ると感慨なき能は

ない。露斗君はあのたど〳〵した折れ釘の樣な文字でしかも自分の魂を自由に表現して來る所に常に驚かされる作家である。この四句をみて同君の全豹を窺ふことは出來ないが、(二)の句に至つては流石多年の精進を思はせられる心境の徹底と技巧の妙味とを推賞せずにはゐられない。川柳雜誌の第二卷頃をみると內容に至つては幾分今日の露斗君を偲ばせるものがあつたが、叙法等は弛みがあつたり、拙劣さが際立つたりしてゐた樣に思ふ。その點からみれば近來の叙法は全く格段の相違がある。或る作家は時に佳句を出しても途中からふつと月並に墮したりするものであるが、露斗君の作品にはさう云つた蹟きを見ることがないのを喜んでゐる。

亂耽——露斗氏の句には先程路郎氏の言はれた非常にのび〳〵した方面と私に云はしめると所謂型にはまつた所も多い樣に思はれる。前者の例を上げるなれば、以前の「男かと思はれる程おちぶれる」「ゴールデンバットが全部しまいなり」「ある村のかたほとりなる戀にして」後者の例は以前の同氏の句「一番つよい金の親切」があるに對して二月號の(三)句「淋しくなるよ金の親切」と云ふ樣な句を吐かれる半面がある。もつと私はのび〳〵した方に向つて露斗氏が進まれん事を希望する。何日か大阪であつた時に同氏は松郎氏の句が好きだと云つて居られたが「粕汁の湯氣の中なる御長命」(松郎)の句に對して本二月號の(二)の句「御長命秋のひがんにおはします」の句があるのに微笑まされる。

路郎——露斗君が幾度も同じ境地から句を生んで來ると云ふ事は成程と肯かされる。同君は多くの語彙を持たないで自分の生活境地から句を拾ひ上げて來るのであるから、勢ひ自分の句の類句が現れて來るのである。語彙が豊富であると云ふ事は一般的に云へば詩人にとつて非常な强みであるに違ひはないが、眞實に打たれて句を作る詩人には必ずしも語彙の豊富のみを以つて誇りとするには足らない。露斗君の如き語彙の至つて少ない詩人であつて、尙且つ同君だけの句が讀めるのである事を思はされる。たゞ自分の類句と云ふ點から云へば幾度か觸れる同じ心境に陶醉した結果止むを得ないものであり、これは寧ろ選句をした僕の罪だと云はればなるまい。

町二——讀んでみてその空々しさに腹の立つ句が餘りにも多い今の柳壇に於て、露斗君の如く眞實を語つてくれる作家をみる事は句の出來如何によらず好感がもてる。亂耽君の云つた「金の親切」の二句にしても露斗氏の切實な心の動きが覗はれて兩句とも心をうつ句である。

ひろし——露斗君は恐ろしく粘り强さがある作家だと思ふ。亂耽君の指摘した樣に一つの着想から幾つも句を作つてゐるが、それもその粘り强さから來る執着ではないかと思ふ。四句の中では(一)が虐げられ行く農村の青年の氣持をよく出してゐると思ふ。

琴人——近作柳樽に露斗君の名が目に觸れると非常に懷みを覺える。露斗君の句は烈々と火華を發する樣な句ではなく、以前から句を通じて感じてゐる事は澄んだ水が流れる樣な落着がある。自己の心境を詐らずにそこへ投げ出してみせてくれる。この露斗氏の句から私が考へられるものは多くの句語を有してゐないと云ふ點でお說があつたが、その點は町二氏のお說に私は共鳴します。それで露斗君が私に云はしめれば宿命論者の群に陷らないある力强さをはつきりと握つてゐられる事を(四)の句から受け入れられる事が出來る。

葭乃——平常露斗さんの句を樂しんで拜見してゐます。先程も皆さんが云はれた通り、露斗さんに同じ着想の句がちよい〳〵見受けられますのは、自分の境地を眞面目に詠んでゐられますから同じ思想が更に變つた形としてちよい〳〵生れて來るのは免れ難い事だと思はれますけれども、それを避けるために强いて他人の境地へまで手を延ばして戴く事は絕對に不贊成です。この四句の中では(三)の句輕味があつて好きですし、(二)の句は先に亂耽さんの云はれました「粕汁の湯氣の中なる御長命」の句よりも句品があつて結構だと思ひます。

路郎——琴人君が句語と云ふ言葉を用ゐられたが、語彙と句語とは區別しなければならない。

琴人——語彙のつもりで言つたのです。

(一九三一・二・一〇、杏三・愚陀筆記)

湖舟君を悼む

亀井愚寵

君を知つたのはたしか一昨年の今頃だつた。稍々落凹んだ君のその瞳は鋭さを思はせるような、ことは無かつたけれどどこか心の裡に燃えてゐるモノを秘めてゐて、何をみるにしても心の底までも見極めなければ濟ませないような、そんな感じのするものだつた。

お互に姓も名も知らず逢ふと直に親しくなつて、碁等を圍んだりしてた。こんな風にして病院で初めて逢うた君と僕。その一人の僕が今、こうして君の思ひ出を書かうとは。

◇

僕が別室に居た頃のことが思ひ出される。君はよく僕のところへ尋ねて來てくれて、句會へ出す句や、本誌へ投ずる雜吟を筆記してくれた。

君は久克く、刀根山柳壇の爲に、氣を吐き努力もしてくれた。

『初心者の迷ひ』として、本誌（七卷四號）へ投稿されたのもその頃だつた。あの文にもあつたようにその頃は番傘川柳社か、當病院へ進出した時代であつて、そのことに付いて君は可成心配してゐたようであつた。同じ病院に異つた主義主張を持つ、二つの流れ、この流れへの個々の批評はさし措いて、これを大きく考へればいゝことだと思ふ。

それがよき刺戟となつて、發展を成し遂げてゆくと思ふから。

刀根山柳壇への君の功績、それはこうした二つの流れを超へて、いつまでも記念され感謝されるべきものだと信じる。

◇

湖舟君の名は柏田正則本年二十九才、香川縣の人だと聞いてゐる。どちらかと言へば、言葉寡い人であつた。川柳を初められたのは、入院されてからのことであるから、昭和三年の初め頃からかと思はれる。當螢ケ池支部の幹事になられたのは、退院された前幹事、牧田晋門氏の後であるから昭和四年十二月からである此間短い期間ではあつたが、默々として熱心に川柳に努力された。

◇

君がしづかな眠りについた二月一日、永らくの療養戰の効ひもなく、惠まれることの薄い逆境の生涯の終りを告げたその日——その日はこゝろなしか、早春の冷たい雨が、君の死を悼むかのようにしめやかに降つてゐた。

先に吾人が支部を復活したとき復活に俺もうつかりして居れずの句を寄せてくれた君、その君もいまは早亡き人となつてしまつた。

しかし君が面影は、眞實に川柳に、生きたよき柳人として、將又、昂後まで刀根山柳壇の爲に盡力してくれた人として永く君が名は餘くであらう。

湖舟句抄

生きたし死にたしと思ふも病なり

病む俺に此の圓本の重たすぎ

孝行をせよと兄貴は死んでゆき

朝顏も淋しく咲いてゐれて居る

寂しければこそ看護婦もしてゐます

母親に賴られる程淋しくて

成る樣になれとは君は短氣だれ

下駄をはく事も嬉しき病上り

どうして暮らすも一生と呑むばかり

生きんとする煙が物干から見へる

面會に行く々々の手紙のみ

人生を超越せよの何のかと

强情なだけに律義な男なり

骨格をつくづくと見る年の暮

早く寢て早く夢見て樂しまむ

魂をふばはれそうな春が來て

手紙が來れば金が入つてるかと思ひ

看護婦の何に結ふ氣か洗ひ髮

日光浴仕事の手眞似して見せる

氣持よき筈の風にも油斷なく

病みついた大阪なれど懷しく

妻子なき身をを現在の幸として

看護婦をやめて女給で暮します

病上り春だ春だと髭を剃り

から元氣出して見舞を喜ばせ

空青々と友の足ごり

現在に樂しい事を見つけ出そ

魂の器破れるに咲くまじ

かけ引で子を歩ますも親の慈悲

カントよハイネよ等と看護婦らしい口

死ぬるのに御氣嫌などがとれるかい

食ふて寢て不足も言へて無事にゐる

死んだこと電話で一寸と言ふてのけ

金さへあればと施療院の宵の口

書置をしたとて見せるものもなく

病上り天神髭を笑はれる

取り留もない雜談へ疳をたて

貧困へ疑獄事件の金の高

空想は嬉し道頓堀の人出

すぐに子を叱る女房になつてゐる

金の力で食慾をすゝめてゐ

餅だけの小包が來る施療院

施療院焚火がほしいなと思ひ

この上の無心にペンの動きかれ

少しよくなれば心に隙が出來

過去の事想ひ出して微笑まむ

病みついてからの寢卷が破けて來

全快をすれば東京へイラツシヤイ

土へ話せば土がもの云ふ

轉宅を金の力がせきたてる

ベットから見る雪空は降れば よし

死んでもよいのか見舞に來てくれず

死ぬとなれば人間のあわてまい事か

噂した通りに人が死んでゐる

飛ぶ鳥の自由をれたむまいとす

十七の春へ未練がなかつたか

米の値も知らずに痩せて居るのなり

惡口の口の下から世話になり

カルテに見えた俺の命よ

レシーバで聞く本蟲打あつけなし

首筋へ春を知らした風が吹き

寢て居れば人のあら等考へる

生きて居ることが氣兼になつて來た

やさしいなかにも敬遠主義が見え

五尺三寸四十キロの男にて

一路集

（募集句）

大島濤明選

罰

親の罰窓眞つ白に更けた月　勝二
初年兵口を開けば罰せられ　康夫
免囚の朝夕寒く罰を知り　吉絃堂
罪の子の罰も當らずよく肥り　紫石
罰杯を笑つて呑むは年増なり　利生
父さんの罰はよいことばかりな　龜坊
刑罰の手は神聖な主義に延び　白眠
彌陀の慈悲信じて居れどつらい罰　沙門
罰金と別に計畫出來上り　柿次
シベリアの野に流謫の血は寒い　照夫
心靜かに罰を受けたる尼の顏　有三
罰杯といふを雛妓の遣け廻り　三汀
酒の上の罰が目覺める留置室　松枝
拘引をされつゝ扱けを考へる　暢山
あらたかにして神罰を恐はがれ　吐句郎
罰を知る罰受けつゝも暮れる年　ぎさん
修養としてひご過ぎる罰をくひ　鶴郎
罰杯を強ひて上座は上氣嫌　巧笑
黒板へ今日の賞罰消え殘り　有爲郎
交通へ巡査叱つて罰があり　四五麿
罰則のあるを新木教ゑられ　靈壺
罰金も納めた女給すましてる　武坊
天罰を聞いて寒う部屋を出る　洋々
高飛びば釜山て罰に追ひつかれ　山月
母の愚痴今に親罰當りまず　石月
惡運の強さに罰も知らずゐる　英賀夫
泥棒のふと罰思ふ日もありて　同
泣いてゐる子供へ罰か眼のあたり　哲郎
神罰をよそに神主醉つてゐる　虛白
罰俸の妻には言はず暗く寢る　千雨
營倉にゐるとも知らず親は訪ひ　鯉友
天罰に懺悔のつゞく窓に星　不然
妻も子も裏切つて病み續け　沐天
何の罰やらと子供に惠まれず　蛙皷
お行儀をつねられた子の聲を上げ　同
罰金を出しても無理が通したい　夢裡

續川柳家の戸籍調

係　山雨樓

◇（一）姓名（二）雅號及別號（三）出生地（四）現住所（五）生年月日（六）職業又は勤勞先（七）好きな句（八）自信の句（九）川柳以外の趣味（一〇）配偶者及子供の有無（一一）嫌ひなもの（一二）川柳に手を染めた年月

（242）　房川素生

（一）房川善之助（二）素生、別號なし（三）大阪市上福島（四）神戸市塚本通五丁目四四（五）明治三十三年八月二十八日（六）餅饅頭商（七）春早々暦をめくるのが仕事、紋太　表情を忘れて足の爪を切り、睡花（八）子の机子の書棚から拭き初め、市の端をバス傾いて通るなり（九）川柳に構ふてあまりありません　まあ演劇、旅行が好きの程度（一〇）妻あり子供男三人（一一）小我（一二）大正十年の暮と覺えてゐます（神戸柳壇から）

（243）　近江砂人

（一）夷佐一（二）近江砂人（三）大阪市（四）大阪市東區高麗橋五丁目三三（五）二月十一日紀元節です。年ですか、年は明治四十一年ごろだつたと覺えてゐますが（六）會社員（七）賣られたは三味線に手の屆く頃　水府氏。おもほれてゐるとも知らぬ十三四、路郎氏（八）つもりして來ました

罰金ですんで漸くほつとする　不路子
罰杯をあふれば友の高笑ひ　音吉
目の迷ひ心の迷ひ作る罰　清光
罰俸へ妻算盤をおき直し　不明
主謀者の處罰で爭議ぶり返へし　同
攘夷論唱えて松陰罰を受け　しげを
金光の消えた神罰佛罰　周波
萬引の女に手錠からみつき　一介
履歴書に停學丈けは抜いて置き　憲坊
罰金の受附口を聞いてゐる　紅
親類を借り歩いてゐる罰當り　水馬
罰則はどうあらうとも逢ひに行き　白柳子
履歴書へともかく賞罰なしと書き　木馬
令夫人息子の罰を金で買ひ　羅浮仙
エス樣の御手に縋つて罰はなし　いわを
嚴罰に處す立札の無駄に立ち　湖山

佳作

罰金はまだ寢返りを打つてゐる　日日城
授業料拂へぬ名前貼り出され　繁坊
罰金へ藝者は派手な紙幣を出し　紫石
罪になる覺悟で猪口へ手を延ばし　凉哉
其の罰が餘りにひどい鼠の死　千草
寃罪へ罰のかけらが飛んで行き　白花子
罰金をつまらなく妻持つて行き　虹雨
規則を作るから罰が出來るなり　普天
絞首臺矢張り自分の足で行き　馬慧
縛られた耳へトルストイは囁く　艸樂
神樣を信じて罰に甘んじる　明珠
罰金を課すのに一日がゝりなり　裸人

罰杯に埃が浮いてゐるを知り　司郎
履歴書へ血の氣の多い罰のあり　圓角
神の苔にひれ伏してゐる　十三絃堂
先生ふと罰で立たせた子を思ひ　道樂
思想まで罰することは出來まいぞ　康夫
小氣味よい程重役の家が燃え　沒食子
或夜ふと佛の罰のあからさま　かずま
不孝者天罰といふ態になり　方眠
罰するも罰せららゝも人の子よ　泉流
十月目に女、子を産む罰を持ち　勝二
醉ひしれ我れをあざける罰を見る　多聞

五客

自らを欺くことが出來ぬ日ぞ　沃星
評　或る日の自責
奇形兒の母だけ知つてゐる昔　千春
評　人知れぬ惱みだけ罰に痛たし
被害者の眼に其罰が輕る過ぎる　櫻果
評　さりとて仇討は法度の世の中
罰則の線へすれ〳〵ダンサ舞ひ　桂枝
評　そのエロ線へ集る男達よ
親切に叛いた罰の雨に濡れ　卯三
評　厚意と謙讓との美しい人達にも皮肉はある

人位

天罰のあるを善人疑はず　双車
評　素朴は一面愚鈍にも見える、善人の純情も惡人の眼からは寧ろ哀れであらう

地位

氣が太こうなつて工女の罰せられ　民郎

女小聲なり、飲みなれたウヰスキーあり旅戀し(九)短歌、ひとり酌む、ひとり歩く(一〇)どちらも有りませんから九項の如き個人趣味に徹底出來得てゐる譯です(一一)茄子の外は食物でも人間でも嫌ひはほとんどありません、大抵相當の敬意と好感が持てます(一二)大正も末の頃でした。

(244)　阿部閑生

(一)阿部兵太郎(二)閑生(三)大和宇陀(四)大阪府下豐中町(六)角一ゴム合資會社(七)子を死なし學校に子の多いこと、路郎。飲んで欲し止めても欲しい酒を酌ぎ、路(八)子をあげて大阪見たか京見たか(九)笊碁　俳句、其他受感的には多趣味(一〇)妻、子、女一男一(一二)昭和二年夏

(245)　片桐靈壺

(一)片桐惠(二)靈壺(三)仙臺市(四)大阪府中河内郡玉川村岩田五一八(五)明治三十三年十二月十八日(六)獅子齒磨大阪工場會計(七)君見給へ菠薐草が伸びてゐる路郎。ほろ〳〵として小兒科の扉を開け零骨。春の海マッチをすれば消ゆるなりかほる(八)處女作「青空に戀と云ふ字を描いてみる」より以上の句が作れず毎日川柳詩境に彷徨ふてゐます(九)宗教、音樂ドラマ、スケッチ、心理學研究、座談

評、女の美しさは弱々しさであり、しとやかさである。逆に女が自棄的になつたら男よりも強い。

天　位

硯

事務長は硯の前で小言云ひ　可都惠
寄附帳へ硯持ち出すい丶家主　紅
臨終の部屋に硯の運ばれて　夢裡
硯箱なにか注文あつたやう　龜坊
悪筆の硯が一つありはあり　四五磨
缺けてゐる方が硯を大事にし　右月
双六へ硯の用意云ふて來る　靜花
書初へ硯の影が氣にかゝり　伊勢子
自信ある筆は硯へ投げ込まれ　杜洋
弟の仕業か硯繼いであり　梨風
俳諧の硯へ櫻おらが春　照夫
ごの筆も書けそうにない硯箱　奈緒美
水のない硯淋しい旅の宿　利生
硯箱墨のゆがみも淋しまれ　英賀夫
納經所卷繪硯の古びれし　山月
硯箱ペン先一つ錆びてゐる　柳次
先づ硯出して代書は聞き初め　鶴郎
應揚に聞いて代筆墨をすり　虚白
海と陸見けのつかぬ程古く　詩郎
墨をする香りへ病後なつかしみ　松枝
代書人硯鹿爪らしく摺り　哲郎
趣味の硯に座して閑日　巧笑
父の硯に新しい墨　馬慧
立たされた子の泣くまいとする　町二

評　川柳の新しい進路は内容の精選と叙法の改良である。しかも川柳の藝術味を高唱するに於て直更である。

福田山雨樓選

集印へ社務所の硯凍てゝゐる　櫻果
正月へ帳場の硯買ふて來る　八念
氣が變り硯石でも洗つてる　神經草
代筆を賴む硯の缺けてゐる　艸樂
する墨へ硯かすかに泣いてゐる　白花子
先生の硯へ筆は意の如し　千雨
硯箱やはり女のなまめかし　道樂
詫狀を書けとの硯鼻の先　鯉友
砂摺つてよき文案を失ひし　吉絃堂
ちよつぴりと摺つた社長の硯石　無鬼
沈默の中に硯は黑くゐる　沐天
向ふから妻も硯へ筆が伸び　蛙皷
硯箱三文判が見つからず　方眠
硯箱父の昔を秘めてゐる　洋々
奥樣の秘密を知つてゐる硯　双車
新の水硯の底が見えるなり　木馬
書初めの硯隅まで光りあり　凉哉
喜びの未だ殘れる硯箱　ぎさん
訪れば硯へ筆をおいた音　日日城
冷えてゐる硯へ宿の夜は長し　千春
繁昌を見せる硯の凹みよう　泉流
入れ過た硯の水をもてあまし　憲坊
ちゝろ虫硯の水をかけられた　卯三

(一〇)純粹なセッターの仔を伺ひたがつてゐる妻と一男三女(一一)借金、不潔、養子根性、法螺吹、手紙の返事をくれぬ人(一二)昭和五年五月

(246)　山上月下

(一)山上六三郎(一一)月下、別號では氷人(二)大阪市(四)大阪市此花區大野町二丁目七〇番地(五)明治四十三年二月七日(六)會社員、堺市福助足袋へ七)「片戀の手代が死んだ衣裳藏」當百、最近の句では「鏡臺の横に氣まゝな九文」破竹、殊に家庭の句が好きです(八)「結納が屆いてからの蒲團綿」私の姿は「戀のない淋しさ眼鏡拭きなれる」これからいゝ句が作れませう(九)讀書、散歩、圍碁、將棋、校正(一〇)無し(一一)モダーンなムスメさん南海高屋島の水色の女店員事務服(一二)昭和三年二月

(247)　鈴木九葉

(一)鈴木豐太郎(二)九葉(三)神戸市(四)神戸市荒田町二丁目三三九ノ一(五)明治四十年五月一日(六)三越神戸支店(七)子に貰つたそら豆の皮をむきながら作られたような感じのする五葉氏の句に強く心をひかれてゐます(八)ありません(九)讀書、テニス　野球(一〇)なし(一一)片隅の幸福をさまたげるもの(一二)大正十二三年頃

硯見つめて戀の芽生へよ　吉祥
縫針や硯箱からつまみ出し　湖山
退院の久々向ふ硯箱　菊路
硯箱鼻を眼鏡の落ちそうな　一鴉
朱硯を出せば生徒は氣を引かれ　虹雨
履歴書へ古き硯を取り出しぬ　康夫
硯箱裝飾だけの机なる　同
狀差にさも急がしい硯なりスエノ
ごの筆を使ふて見よう硯箱　同
硯借りに來たので死んだ事が知れ　裸人
値下げ斷行小僧は墨をすらされる　同
優等の話も古し硯箱　靈壺
役人は君よし給へ朱墨する　同
受付の硯下から生えたやう　有爲郎
硯箱雖然として文士てふ　同
硯ぢつと見つめて夫憎くなり　勝二
硯すり直して別な嘘を書き　同
目錄へ吉き日の硯流ふなり　桂枝
流連の炬燵へ硯引き寄せる　同
埃り吹き〳〵硯箱貸す　同
凹んでる硯が今日も儲けてた　民郎
ぼんやりと硯に顔が浮ぶ戀　同
賞與なき月の硯に蚊が溺れ　同
水引のきちんと濟んだ硯箱　明珠
催促を頼む硯を向け直し　同
よろこびに硯の水を注ぎこぼし　同
風と共に硯を訪へる花びらや　二
硯から春の愁が湧くばかり　同
よきごとの報せの硯洗ふなり　同

箸紙に硯の向きを直させる　多聞
袖口は寒し無心を書く硯　同
人の氣は硯の水の汪ぎごころ　同
佳

硯とは別な思想の髭が延び　哲郎
惡筆は承知の上の硯箱　沒食子
硯石見なれぬ顔でペンを取る　素月
硯の水に冬が來てゐた不然　同
賣られ行く女心の墨をすり　沐天
實印を押さして硯仕舞はれる　白柳子

五　客

經木書あせるを硯笑つてる　卯三

評　行人織るが如く黄塵舌頭にざらつくそれ若し彼岸の天王寺に詣すれば經木書所狹げに併び立てり。無情の硯彷彿として語るが如し。

障子明るく赤間の硯　壹絃堂

評　清淨拭うが如く靈氣澄むに似たり。机前に端座して靜かに詩想を暖むるの境。聲調殊に快。

硯箱不吉な事の中にゐる　明珠

評　離散か、災禍か將又訃音悲報にや、その何れなるかを詳かにせずと雖も森陰の氣充ち滿ちて愁雲家の棟に漂ふ。下五叙し得て妙。

椿まつかだ蒔繪の硯　大夢子

評　前評障子の句と同巧異曲なれど、天然の艶絶、人工の絢爛よく美の頂點を表す。

硯へも恨み殘した盞の音　桂枝

---

(248)　中野裸人

(一)中野正信(二)尺八雅號雪舟、川柳雅號裸人(三)大阪府南河内郡白木村白木(四)大阪市浪速區惠美須町二丁目三十二地(五)明治三十九年十二月十日生(六)飲食業(七)ピアノが鳴つた金借りに行け、路郎。青葉の影に馬の性慾、豆秋(八)こぢあけて這入ればたべた後があり(九)散歩、キネマ、芝居、讀書(一〇)妻ある、二才の女兒一人(一一)政治界、小さな事をこせ〳〵云ふ人間、皮肉や腹に持つて居る人間(一二)昭和四年五月頃關西中央柳壇に投句、須崎豆秋氏より川柳雜誌を進められて讀む、同九月頃初めて川柳雜誌へ投句

(249)　奥田柳甫

(一)奥田循之輔(二)柳甫(三)京都宇治(四)大阪市東成區東桃谷町二丁目十二番地(五)明治四十二年一月二十日(六)紐育ナショナルシテー銀行(七)草にねて志ある壮一、文久氏。月を尖らせて風夜もすがら、茶六氏(八)自選も出來ないのですから迎もありませんが最近の句「タオル乾いて不眠症の朝」(九)川柳だけです(十)獨身です(十一)女に見せられない樣な句(十二)二年程前

評　閨怨の一語に盡きん。

人

主婦同志義理をまこめて墨を摺り　山月

評　長屋中の妻君連が相寄り相議して、その中の一軒へ祝ひ物かなんぞ贈らうと云ふのであらう。中七の叙法はその間の消息を巧みに言ひ表はしてゐるし、下五に至つて氣分と情景が手に取るやうである。句が感情の上に盛上つてゐる。

地

硯箱むこうへ向けて金を貸し　紫石

評　中七の表現によつて金を貸すものと借りるものとの人物及びその地位などがよく覗はれる。しかもこの句はさうした場面の單なる寫生に終つてゐるものでなく、句の脊後に作者の熱意、作者の主觀が顔を出してゐることに氣付かねばならぬ。それは穿ちだとか着想だとか云ふものより一歩進んだ觀點であり、思想の濾過である。主觀の客觀化に成功してゐる

天

先生の手心にある朱の硯　無鬼

評　句が縱にも横にも躍つてゐる。句の着想と表現とリズムとがピッタリと融合して餘すところがない。手心とは依怙贔負のそれのみを云ふのではない。指導的態度に於て各子供に相應した賞辭と鞭韃の程度をも指すのである。決して甲に厚く乙に薄くする精神ではない。それを生徒自身やその母姉などが兎や角囀るのであるさう云つた複雜味がこの一句の中にいみじくも織込められてゐると思ふ

附記　課題吟「硯」に付て大正十五年四月號の「川柳雜誌」に久良岐氏選で發表されてあるから一覽せられたい。參考迄に三才を拔萃する。

(人)宿帳に硯を添えて恐れ入り　千鳥

(地)得心をさせて硯の蓋を取り　三平

(天)夏服に硯汚いものにされ　其象

藥湯

◇　濁水選

皺腹をつめつて藥湯長いこと　白花子

藥湯を鼻までふやす人の來る　松枝

臭いのがよく効くといふ藥湯　いわを

藥湯の匂ひに妻の邪推消え　鯉友

藥湯に何か効いてる樣にゐる　水馬

藥湯に入れば氣の合ふ話しづれ　ぎさん

中澤濁水
楊井二南　共選

藥湯の中へ娘はは入りかね　量子

藥湯を樂みにして越さん冬　音吉

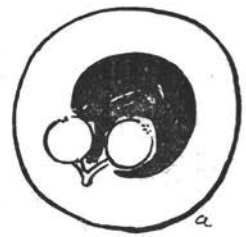
熱くない程に藥湯親しまれ　同

藥湯へ三度もつかるお正月　四五磨

昨日も今日も朝の藥湯　清光

藥湯をほめて持病の治つてる　杜洋

藥湯へ伸びて日曜つゝがなし　同



杭全町 MEMO 綠雨

▼本社二月例會から使用してゐる美麗なセルロイド製の句箋臺が出來ました、殺菌力に富んで衛生上に至極良きものです。

▼福田鶴峰君は新に本社々友として入社されました今後の活躍を祈ります。

▼太田朝陽君は多年勤務されてゐた南海鐵道を病氣のため退社されました。

▼水谷鮎美君は妻帶滿一年の思ひ出に鳴玉鮎美、同夫人の三人連れで歌劇見物に行からたそうです。

▼永田里十九君の令閨は一月上旬死産をされその後自宅で療養中です。

▼三好計加君は俳句王國の松山へ廣く川柳を知らせるため講師として關係してる塾や樂燒研究會の繪畫部へ「川柳雜誌」を吊らくつて宣傳に努力されてゐます。

▼前田五健君が本社の推により客員たることを快諾されました。今後一層の御後援を祈ります。

▼和田源坊君は二月九日目出度長男源太郎君を擧げられました。

容態を聞き合ふ畫の藥湯　樹光
藥湯の今日は仙氣の話なり　康夫
藥湯の父の指圖で子は洗ひ　山月
藥湯へ這入つて來て風邪をひき　無鬼
藥湯の加減めつたに變へられず　圓角
藥湯へつかつて隱居經を讀み　沒食子
藥湯の効きめつわりになつたとぞ　暢山
儲からぬ話からする藥風呂　泉流
世帶持つ話も出てる藥湯　鶴郎
藥湯へ首だけ出して話してる　拓二
藥湯の入墨何んとグロテスク　巧笑
藥湯にごこも取得のないからだ　沐天
温泉へ行く氣藥湯けなされる　同
顔役が來て藥湯があぶれてる　同
藥湯の底ぬら〳〵と氣味惡るし　奈緒美
藥湯につかる病む身の淋しかり　同
藥湯嫁の病弱知れわたり　新水
藥湯の桶が朽つて匂ふなり　同
不景氣な話藥湯聞いてゐる　哲郎
藥湯の話ドクトル跣足なり　香雨
藥湯へタオルうつかり漬けちまひ　同
藥湯に効能書の多すぎる　桂枝
藥湯に何やら唄ふ首が浮き　同
効きさうな香がしてる藥湯　英賀夫
一人きりゐる藥湯唄になり　同
香ひだけ殘し藥湯薄くなり　湖山
藥湯へ中將湯の滴落ち　同
藥湯でそこらの藥湯の噂　右月
藥湯へ花嫁行けとすゝめられ　同
藥湯で不意に產み月たずねられ　裸人
無駄話捨て場のやうな藥湯　紫石
藥湯よく似た顔で向ひ合ひ　同
藥湯で人の弱さが察せられ　洋々
藥湯へ手拭染まる程通ひ　白柳子
よくもまああんなに居れる藥湯　同
藥湯の熱さ温泉話しが出　木馬
藥湯でこう〳〵相談出來たらし　武坊
藥湯へ別人らしくゐる師匠　千春
藥湯の一人は別府の湯をも知り　方眠
藥湯に月を浮かせてヂッと居る　蛙皷
朝湯から臭ふ手拭提げて來る　同
泣きに來た藥湯へ人混んでゐる　明珠
藥湯の中へも見せる傘があり　同
若いのも默々とゐる藥風呂　白眠
藥湯で首と首とが話しあふ　双山
藥湯タオルが外で待つてゐる　同
藥湯は長生も出來さうに書き　吐句坊
藥湯の熱さ耐える首が浮き　同
藥湯で神經痛の顔馴染　不然
藥湯に入れば股の子よく動き　同
藥湯の書閑消しの顔ばかり　虛白
藥湯に禿とお灸が並んでゐる　同
氣味惡い色と香の藥風呂　憲坊
いつしかに藥湯好む程に老ひ　同
藥湯の色に氣味惡けにつかり　スエノ
藥湯で佛の樣な朝心地　同
藥湯を今日から替へた色になり　櫻果
極樂へ來た氣で藥湯にゐる　同

▼丸山公二、越中今雨、森石竹の三君は家事の都合で退社されることになりました、復活の日の速からんこと祈つて居ります。

▼本社客員小出檜重氏は その後自宅で靜養されてゐましたが、神經衰弱その他に餘病を併發されて 二月十三日午後三時遂に永眠されました。哀悼の意を表します。

▼植田湖舟君は 支部幹事として久しく盡力されましたが、二月一日二十九歲で永眠されました。哀悼の意を表します。

▼川村觀月君の母堂 六十八歲の高齡で一月廿一日永眠されました。哀悼の意を表します

▼森本黑天子君の令孃が 一月上旬永眠されました。哀悼の意を表します。尙同君は南海鐵道深日驛長に榮轉されました。悲喜交々の有樣です。

▼本號の編輯は路郎先生。琴人、山雨樓、町二杏三、雨町、愚陀、朝陽、豆秋の諸君と私で本社事務所で致しました。

新誌友

（六年一月十八日まで）

「川柳雜誌」前半分金壹圓八十錢以上拂込の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載します 何卒此際新讀者を御勸誘下される樣御願ひ申します。御紹介下される方には、「川柳雜誌」の近刊を見本として差上げますからお申込み下さい。（綠雨）

水本勝（竹內多聞）谷內與一郎（長崎柳秀）和田四三二（日野華水）竹原淸（廣瀨無鬼）中井

薬湯濁れご　我にいゝ感じ　卯三
冷え性の母が喜ぶ　無花果湯　同
薬湯の表で　女給　母を待ち　三汀
薬湯の治りそもない色で　沸き　同
薬湯の分折表は湯氣で焦げ　同
薬湯に氣安く笑ひ合うてゐる　民郎
薬湯に想ふてる鬚漬つてる　同
薬湯へ避けて欠伸の絶間なし　同
薬湯へ浸つて柿のあくを待ち　菊路
醫者に飽き灸にも飽いて薬風呂　同
痩せこけた顔が浮いてる薬風呂　同
薬湯の長さに孫を見せにやり　同
人間が煮えてるやうな薬湯　紫石
薬湯何處か淋しい顔がより　同
薬湯に親しむ父の影うすさ　千草
春の陽よ薬湯が廣うなり　同
健康になれ薬湯を汚う見　柿次
薬湯へ親しむ父の爪の色　同

薬湯でもうこんなです足拍子　吉祥
薬湯のぬくみ復縁考へる　勝二
薬湯へ少しこわれた躰來る　同
永らへてまた薬湯にしたしみぬ　夢裡
薬湯に無念無想が二人ゐる　靈壺
薬湯の顔はしづかに眼をあける　春秋
鬱憤を姑薬湯まで運び　町二
薬湯へ姑をつれる赤てがら　利生
温泉の氣分になれぬ薬風呂　同
薬湯の書は鼠を見てつかり　多聞
薬湯はアバラはつきり見せ寢る　同
安住の目星がついた薬風呂　日日城

薬湯で號外らしい鈴をきゝ　同
薬湯をきたながつてる達者な子　雨町
薬湯でいゝ方針がふと浮び　同
薬湯は世の雜音を知らぬこと　同
(人)我壽命預けてはいる薬湯　紫石
(地)薬湯に唯安然と餘生なり　虚白
(天)大阪の空氣を語る薬風呂　吉祥
(軸)薬湯の俘り虜おとなしさ　濁水

◇　二　南　選

薬湯で故郷の唄を口ずさみ　白花子
薬湯で變な男に又も遇ひ　神經草
上りたい兒を薬湯でまた温め　櫻果
薬湯に何處も取得のないからだ　巧笑
世帶持つ話も出てる薬湯　鶴郎
健康になれ薬湯を汚う見　柿次
靴づれの明日も困つた薬湯　新水
薬湯で家主にあつて雨の事　英賀夫
恩給がもらへて朝の薬湯　奈緒美
薬湯へ何時もの顔で歌が出る　杜洋
薬湯を利くと信じて浸つて居　白眠
薬湯へもう慣れ切つたはいりぢう　康夫
信心もしましたがと薬湯へ　量子
薬湯のあさゝに子供入りたがり　不路子
薬湯タオルは隅へ丸められ　卯三
だしぬけに薬風呂から名を呼ばれ　憲坊
薬湯よく似た年で向ひ合ひ　紫石
薬湯を呑めば子供も呑むと云ふ　ぎさん
天窓に星を見つけた薬風呂　町二
薬湯の隅に將校丸ういる　洋々
薬湯の方に有閑らしく入り　勝二
薬湯に氣安う笑ひ合ふてゐる　民郎

洋々(丸山公二)濱野敏子(橋本絲雨)柳生胡月、大野了念、奥村偉三郎、吉田淋坊、廣瀬無鬼、長景雄、荒田練居丁、伊藤喜一郎、片山雲雀、梅村道男、小阪魚郎、加藤月天、道田嘉三郎、高見柳骨、糸谷淺吉　長崎柳秀、近久太郎、立井登美坊、塚本掉二、中出木公、越智恒子、富士野鞍馬、中村安太郎、荒井英賀夫、安多政年(事務所)(括弧内紹介者)

轉居

森東魚君は大阪市北區紅梅町九三中尾方へ
森田輝翠君は大阪市天王寺區筆ヶ崎町八二

貳月號の「正誤」

記念撮影の人名中、第二列は向つて右よりとあるも向つて左よりの誤。

年酒なく國族に暮る家を辭し　光路
努力せぬ副職に生きるのも皮肉　人生
(地)臨終へいつそ會はない許婚　雨町
(軸)つきあひに生きて人に夢もなし　路郎

(二十五頁よりの續き)

流石の田萬苦笑して
「あれは君例外々々」

二、麻生議長奢らず

阪出から歸りの列車中で、麻生議長を捕えて、江戸ッ子の河上君
「麻生君は今夜奢るべしだぞ、庄君の紹介は、或る雜誌に無産黨内閣の、最初の首相は我麻生議長だと書いてある　なんて、すつかり首相扱ひにしてゐたじやないか」
麻生君すかさず

きいて來た　裸人
藥湯黑く濁つて居　沒食子
藥湯の効能身動きせずによみ　沒食子
定連が居つて藥湯うめられず　圓角
藥湯の傷はつく〴〵眺められ　草樂
藥湯を有難がつて孫と來る　哲郎
藥湯の熱さに耐えて痩せてゐる　同
藥湯の畫は鼠を見てつかり　多聞
藥湯を出てから灸へ誘はれる　同
藥風呂頗へポトンと又雫　春秋
藥風呂大きな足が出て行つた　同
やつと立つ子を賞めてゐる藥風呂　泉流
儲からぬ話からする藥風呂　同
諦らめてゐて藥湯にほつとかれ　明珠
藥湯の中から叱る聲があり　同
藥湯でそこらの藥湯の噂　右月
藥湯でのばした足に誰か觸れ　同
藥湯へ浸つて柿のあくを待ち　菊路
藥湯へ持病と持病うまがあひ　同
藥湯の長さに孫を見せにやり　同
揉め事を片附けて來た藥風呂　日々城
安住の目星がついた藥風呂　同
住み馴れて藥湯に居る足の巾　同
藥湯で話せば息が近すぎる　同

佳作

藥湯はつきり冬の陽の弱き　新水
藥湯の父の指圖で子は洗ひ　山月
藥湯の外は生きてく人の聲　多聞
藥湯の韻はしづかに眼をあける　春秋
泣きに來た藥湯へ人混んでゐる　明珠
藥湯で獨り動いた温みが來　沒食子

五　容

藥湯は髭を剃らない顔が浮き　新水
藥湯にひたつて利子のこと思ひ　白眠
藥湯へ沈んで居れば水の音　春秋
藥湯に別人らしくゐる師匠　千春
藥湯へ入らうとする無口者　明珠

人位

藥湯に勿体ないをいひつゞけ　多聞

老氣は稚氣に等しと云ふ、頑陋なる中に一圖に物事を信ずる性なり、餘命幾許もなくして見聞する處盡く善意に解す、一碗の飯、一睡の夜具總べて感謝して足る藥湯に快感をむさぼる老人の顏貌髣髴たり。

地位

藥湯に子の行末を思ひ過ぎ　民郎

藥湯に浸れば萬感油然、思案自ら時を過ぐ、身を思ひ人を思ひ家を思ふ、此の主人公未だ老耄の域に達せず、其の子尙若くして市井に齷齪たり、身一人なる時の藥湯眞に思案を樂しむによし。

天位

藥湯のぬくみ復緣考へる　勝二

妻ありしも今は亡し、或は又夫ありしも今はなし、而も齡未だ壯、人ありて復緣をすゝむ、言下に之を奚遲せし彼又は彼女なりしが今蕩然として浸りゐる湯氣の中に靜かに自問時を移す、眞面目なる人の姿を寫せし句、感吟に價す。

拙吟

藥湯で喋つたことを叱られる　二南

藥湯をそしらぬ顏であがるなり　同

「いや、僕が演壇へ着いた時には議長だつて代議士だつて、英雄化しちやいかない諸君の代表であり公僕であるに過ぎないなんて丸つきり下男扱ひだつた、奢る處か慰勞を要求するよ」

兩辯護士の討論終決せず、麻生氏は散財を免れた。

三、尾行にニックネーム

安藤君が阪出へ行つた留守の徒然に、尾行のK氏と碁を打つて二勝二敗した、碁の後は人間同志の會話となつて初對面の誰もがする樣に郷里や閲歷の話になるとK氏が

—私もあなたの郷里播州山崎で代用教員を二年程やりました つい土地の藝者との關係がばれて、失職したのが今の商賣になつた動機です」

爾來、密かにK氏を呼ぶに

「代用君、々々々」

本願成就

高橋かほる

一度川柳の連れと芝居がしたいと思つた甲斐があつて、華水氏や二南氏や里十九氏とばた〳〵と話が定まり赤城颪の二幕を演る事になつた顏師に顏をしてもらふ時に肌を脫いでも寒くなく固油を引かれる時の筋張る樣な感じも濃い白粉をつけて貰ふ時もほんまにうれしかつた。顏師に顏をして貰つたのはお稚兒はんに出た折りにしてもらつて二十年振りだから懷しく想いました。……川柳は毎月あるが芝居は初めてやさかい嬉しいてたまらず川柳をようせなんだ。……

フォルマリズムと川柳の觸手

——形式力の強さに就いて、或ひは「殘されたる誤謬の揚棄」の揚棄——

住田亂耽

川柳人一月號に於て、岡本嘘夢氏は『殘されたる誤謬の揚棄』なる論説の最後に形式か川柳を決定する事に重點を置く誤謬を揚棄しなければならない事を大いに力説せられてゐたが、私は之より更にこの誤謬の揚棄の揚棄を叫ばんとするものである

便宜私は、甚だ凡であり、陳腐たる誹を免れないかも知れぬが、こゝに中河與一氏の嘗ての主唱形式主義藝術論の第一規定並にその一部を抄出する事によつて所論を進捗さして行くであらう。

(一)まづ素材がある。(二)作者がそれに形式を附與する。(三)内容とは形式と素材とを通して第三者に觸れて來るものである。

——素材は作者の方向と興味とを示し形式は作者の能力、技術を示し内容は作者から切り離されて思惟の對象として社會に放散する——(形式主義藝術論の第一規定並にその論延)

即ち私はこの第一規定の三項に從つて論駁を加へて行かんとするのである。

こゝに或る句がある。この句は表現の技巧に於ては百パーセントの練達さを持ち大衆を惹き付ける しかしその内容を檢討してみると何等の社會的批判もなく又自己反省の跡も見あたらない とすれば、それは川柳として無價値なものである。これに反して表現にはやゝ無理がある(それも文字の使用方法にだ)としてもその句を通じて句主の作意を知るに充分であり、社會批判に生活の把握に成功してゐるならば川柳の本質を受け入れた句として共鳴を感ずる。(川柳人一月號十一頁參照)と嘘夢氏は言はれる。

表現技巧即ち形式に百パーセントの練達さを持つ事は作者の能力、技術が或る程度まで熟して居る事を示す。然もその内容に上述の批難を加へらるゝ餘地のあるのは、よき素材を選擇しなかつた結果である。即ち如何によき形式を持つと雖も素材の選擇が惡ければ、つまらないものになる事だけは明かである。この點に於て嘘夢氏の説とはやゝ同意見を持つのであるが、更に之を詳細に説明すれば素材の選擇が惡いといふ事は作者の方向及び興味が低級であり無價値である事を示し(三)の公式によれば、素材の選擇が惡い爲に形式が或る程度まで良くても、

第三者に觸れて來る内容はつまないものになる事は當然の歸結なのである。

然し更に考察を他の方面に轉ずるならば、同じ惡しき素材を持つてそれに拙な形式を附與するより、それにより良き形式を與へる事は誰ものよしとする所であらう。そしてこのよりよき形式の爲にたとへそれが惡い素材であつても、生かされる事が屢ある事實を容認しても差支へないであらう。だから形式が内容を決定しないと言ふ暴論は先づ一九三一年の初頭に於て撲殺さるべき必然性を充分に持つてゐるのである。

次に、表現にやゝ無理があるといふのは作者の形式に對する能力技術が未だ圓熟してゐない事を明示する。卽ち

（素材＋形式—内容）なる規定によつて形式拙なるものから、たとへいかに素材がよくつても、よき内容を味ふ事は出來ないのである。この種の句に對し嘘夢氏の如き言葉の出る所以は蓋し彼等所謂自稱新興川柳家にありがちな過度の思維によるからである。はつきり言へば買ひ被りすぎなのである。そしてこの事が新興川柳の進展を如何に妨げ、如何に獨りよがりの作家を揑造してゐるかの事實に氣付かない哀れな彼等なのである。

氏は又、内容の選擇は吾々の立場から絶對に揚棄する事は出來ないといはれる。

然し今までのべ來つた所によつて、形式の前に内容が存在しない事は明かに推知し得られるのであり、作者は素材の選擇こそなし得るも内容の選擇は絶對になし得ないのである。

こゝに於て、嘘夢氏は素材と内容なる語を全く、混同してゐる誤謬に氣付かねばならぬのである。

恐らく此の場合氏の内容といふ語も素材といふ意味であらう勿論素材の選擇は吾々の立場からも絶對に揚棄する事は出來ないのである。（吾々といふのは主として私の屬する川柳雜誌社のグループを指す）

然し素材が作者の方向と興味とを示す以上既成川柳家より見たる新興派の人達の素材の取扱ひ方、又新興派より見たる既成派の素材の取扱ひ方に、異つた行き方があるのは當然であらう故にもうこの素材に對するお互ひの愚論は、一九三一年に於ては、たゝかはして貰ひたくないのである。川柳家の等しく、今後ますゝ心掛くべきは形式である。表現技巧の問題である。如何にしてよき素材によき形式を附するかの問題である。

（この場合よき素材の選擇を忘れてはならない）

よき素材の選擇を忘れての表現技巧重視は、確かに川柳を遊戯的ならしめるが、よき素材を提げ、更に之によき形式を與へる、表現技巧を加へる事は決して遊戯に墮するものではない。

だから、表現技巧を重視する事によつて（嘘夢氏はこゝでよき素材の選擇を忘れて、といふ言葉を使用されてゐない）川柳の本質たる社會批判性を失ふ事は斷じてあり得ないのである。

更に現代の所謂新興川柳家達の間に於て、嘘夢氏の言はれる表現にやゝ無理がある句を見受ける不幸さを往々にして我々は味はされる。蓋しそれ等川柳は吾々の認める川柳として、素材

が形式を持つまでに發展し充實してゐないのである。たとへば一月號川柳人にその大御所劍花坊氏の句に就いて見るに

グヅ〳〵云つて居たがとう〳〵破烈した炭火

の句にしても劍氏はあまりにも素材そのまゝを露出しすぎてゐて（劍氏は由來素材露出症に冒されてゐるかのやうである。）形式力の强さを全然忘却してゐるやうに受けとれる。

我々は——少くとも私は——之の句は川柳だとは思はない。よき形式を持つた川柳だとは思はない。まことに概念的な、あまりにも概念的な句と言ひたい。

之は素材が形式を持つまでに發展し充實してない顯著なる一事例である、素材があるからと言つて必ずしも形式があるとは限らない。形式は素材のみによつて決定するものではないのだ。即ち素材が形式を持つまでに發展するか高められるかしなければ、形式を持つ事は出來ない。凡て形式とは存在である。形式のない事を存在を失ふ事である。この意味に於て劍氏のこの句はそれこそ川柳として全然無價値である。

そして、この種の劍氏の惡癖にならつて、墮落する所謂自稱新興川柳家の如何に多い事よ。

新興川柳家たちよ。お身達は只今直に最寄のトイレット・ルームへ入らねばならぬ。そしてとくとそこでなすべき本能的動作を終へた上出直さねばならない。

大きな口を聞くのはそれからの事である。（六、一、二十一）

創作奬勵 懸賞川柳

第二回募集の言葉

川柳の社會化運動を徹底させるにめ、本社は既に創作奬勵の名に於て弘く社會より、より良き作家のより、良き作品を募集したところが前號發表の如き多數の秀句佳吟を蒐め得たので更にその第二回を募集するこにした奮つて應募せられんことを切望する。

課題「靴下」

選者 麻生路郎氏

賞
一等 貯蓄債券（拾圓券）一名
二等 同（五圓券）二名
三等 川柳雜誌（壹年分）三名
佳作 若干名 記念品贈呈

句數 「一枚五句以内（但一人にて幾枚投ずるも可）

用紙 「川柳雜誌」新春號より毎號添附の投句用紙に限る

締切 昭和六年三月五日限

發表 昭和六年四月號（四月一日發行）誌上

大阪市住吉區杭全町六〇三

投句所 川柳雜誌社内

創作奬勵懸賞川柳係宛

若く潑溂たる柳誌「紅座」

御覽下さいまし、キット貴方の心に添ふものがあると信じます

—募集—

「雜詠」三十句 中村山門選
「聲」五句 川上三太郎選
「ぬるい」五句 名譽選

——〆切三月末日——

天位は紅座銀牌を呈し翌月の選を依頼す

（投句と共に二錢切手二枚同封あれば創刊號を贈呈）

投句所 東京京橋區新佃島東町二ノ十一

川柳紅座發行所

各地柳壇

—れ創を句るあちのい—

本社二月例會

二月五日　於端の坊

當日は立春の好季ではあつたがつめたい雨が朝から降り續いた。ほんとに憎い雨であるしかしそれにも拘はらず熱心な多數の柳人がつめかけられたことは感謝の外はない。當夜は新らしい試みとして「十分間スピーチ」をやることにした。

趣味の緊縮整理に就て　福田山雨樓
川柳への發足と啄木の歌　片桐靈壺
藝術的漫談　安西杏三
何が新しいか　麻生路郎

を語つて柳壇の爲め大いに氣を吐いた。

（當番幹事、公二、新水、雅幽）（山雨樓記）

（參會者）路郎先生、綠雨、山雨樓、公二、狂司、杏三、主稅、洋々、靈壺、愛緒、水煙、葉平、九葉、亂耽、さだを、二郎、新水、かほる、柳甫、哲郎、竹水、觀月、卜居、忠彌、三碧、星光、夢裡、柳次、翠峯、世紀、雨町、山抱子、雅幽、沐天、愚陀、海洋人、いわを、吉一、石皮、裸人、鶴峯、里十九、明暗子、柳狂人、千鳥

兼題　暴力　路郎選

暴力は酒の中から出る如し　智惠子
暴力へ女の操遂に勝ち　不路子
暴力に訴へられたエゴイスト　公二
サーベルを中にはさんで專務居る　翠峯
暴力をにげて社長は飲んでゐる　さだを
暴力を怖れもてゝるとは知らず　忠彌
愛すればこそ暴力を振るつて見　吉一
暴力と言ふにはあまり疲れたり　二朗
暴力の腕をぐつて息を知り　柳甫
暴力へ腕の釦がころげ落ち　裸人
暴力に輕く出られ間の悪き　無裡
暴力を鼓ふ舞臺のさびしすぎ　雅幽
暴力の殺して吳れと弱くなり　綠雨
暴力に女房の居ることを知り　觀月
暴力へにんまり笑ひ咳一つ　かほる
暴力の後賬かな街へ出る　山雨樓
爲朝があばれる力おもしろし　同
暴力へ寒暖計はのぼり切り　新水
暴力に又船長が生捕られ　同
暴力の淋しきものにサボタージュ　九葉
過激派がにぶい電氣に照らされる　同
テロリスト日本の空がたよりなし　同
（秀）脅迫に冬の電車に乘つて來る　路郎
（軸）テロにより餘命僅かを生きんず

席題　昔　山雨樓選

家すじを聞けば昔へさかのぼり　狂司
昔の火鉢の灰掻立てゝ見る　滄洋人
昔着たチヤン〳〵もある土用干　世紀
昔話まじめくさつて笑はれる　雅幽
其の昔流行つた唄が賬やかせ　山抱子
拍子木へ昔乍らの爺かな　柳甫
むかし話にさむい首すじ　愚陀
母上の花嫁姿着ぶくれて　靈壺
廣告に昔と書いて黑燒屋　かほる
さりげなく昔の恩を賣りにくる　さだを
昔のまゝなら金もたまるに　鶴峯
酒の席昔ながらの叔父であり　主稅
ふりむけば過去は否定の手をもぬ　亂耽
倫落に昔を問へば笑ふのみ　公二
その昔昔へ子供はれてしまひ　柳次
醉へばすぐ昔を語る父なりし　同
（人）餅搗けば昔話になつてゆき　九葉

(地)貧乏を昔語りにせんとする　柳甫
(天)昔者が二階へ一人ほつとかれ　裸人
(軸)朝寢など昔の夢か祖父の咳　山雨樓

席題　自　炊　杏　三　選

自炊今日隣りの下女へ贈りもの　里十九
自炊の二人へ春の陽の麗ら　柳次
自炊する火種を下へ貰ひに來　主税
初めての自炊眼鏡が落ちるなり　かほる
自炊したあの時分が戀しいれ　星光
自炊今日隣りの好意無にしたり　柳甫
自炊もう玄米パンを喰ひあきる　裸人
自炊して先づ自己陶酔をやつてゐる　無裡
啄木詩集を懐ろめしをたき　葉平
春になつて自炊のちとつかれ　雅幽
自炊今日うれしい人が來る日なり　狂司
自炊ふと過ぎにし戀にふれてみる　同
(客)自炊して葱の青さを嬉しがり　九葉
(同)恩給を訪へば自炊の手を休め　翠峯
(同)制服のまゝで茶を沸し　さだを
(同)自炊にも馴れて八百屋を怒ると　かほる
(同)自炊し馴れていと丸き鍋の底　山雨樓
(人)知事酔うて自炊のこゝを話す哉　路郎
(地)自炊もう二階を降りる手がくらり　山雨樓
(天)お隣りの鉢その儘の自炊なり　さだを

席題　札　束　新　水　選

札束へ氣になる風が吹いてゐる　愛緒
札束をグツと握つて飲んで居る　いわを
色々な目で札束を見てるなり　公二
札束に脊すじの寒き男かな　愚陀
札束の中の一枚すかされて　竹水
札束を時計に遠い部屋で讀み　九葉
小口當座札束ばかり見て戻り　主税
重役の鞄札束かと見られ　同
算盤が要る札束にむせ返り　亂耽
會社のものだ厄介な札束　同
(佳)札束へ彼女何度も坐り替え　沐天
(同)札束の一部を奚れる月給日　山抱子
(同)札束へ風邪をひいてる出納課　九葉
(同)札束を投げつけられたモガの夢　山雨樓

席題　アパート　亂耽　選

アパートの三等室へ餅が着き　裸人
アパートの室を見せ合ふ仲になり　水煙
アパートへ夕闇せまる靈柩車　新水
アパートの晝深しパンを燒く　葉平
アパートの電氣がゆれる客があり　主税
アパートにその唇は空々し　愚陀
アパートよ密柑の皮の多かりし　さだを
アパートの戀は多角でありにけり　洋々
アパートの陽射しへ女首を出し　卜居
アパートの物のにほひに大人びる　山雨樓
アパートすらも留守勝ちの彼　路郎
(人)歸つたあとのアパートの興奮　柳甫
(地)アパートで女の智慧にあきたり　山雨樓
(天)刑事が去つたアパートの門　靈壺
(軸)アパートの愛人になる紅雀　亂耽

席題　裾　互　選

裾からけ役者の樣な男を見　新水
裾にハネ上げて女がついてゆき　狂司
舞姫のその裾さばき春なれや　葉平
嫁ぐ娘の裾に座數は狹くなり　水煙
階級に裾がまだある御殿の場　二朗
同窓會きつちり並ぶ裾模樣　主税
テーブルの下にはだけた裾があり　さだを
仲居の裾が瞬間の襖　亂耽
裾模樣立つたあたりを眺められ　九葉
裾模樣雪になつたは知らぬなり　同
後から裾へ母親たしなめる　山雨樓
裾引いて進まぬ夜の寒いこと　同

神戸川柳祭

主催　川柳雜誌社神戸支部

後援　ぶあうすこ川柳社
拍子木川柳社
川柳雜誌社

一月廿四日夕　於　八幡神社内
楠町事務所

一、漫談「上かん屋川柳と市會議員」　庄萬よし氏
一、漫談「柳人解剖」　廉生路郎氏
一、餘興・赤城颪」二幕　川柳座出演

當日の參會者(不路子、かほる、卯生、啞聲、一狂、呑人、南耕、九葉、默川、翠石、柳骨、千年、明珠、鬼笑太、三霞、四三二、亂耽、昭明、嶺月、桃水、無鬼、素生、華水、竹風、了念、空栗、草人、紫亭、秋晴、萬よし、山都、紋太、沐天、碎月、二南、路郎、其他招待者大勢)

幹事　楊井二南報

兼題　傑　作　西村明球　選

傑作へ飲まされる日のつゞくなり　鬼笑太
傑作もまだこれからと言ふ若さ　不路子
ユーモアを交ぜて傑作けなされる　碎月
傑作にされて寂しい身のまわり　空栗

傑作にされて時勢へ賣れて行き　素生
凄い作人の一念恐ろしや　春秋
傑作へどの新聞も如才なし　亂耽
傑作へ妻と云ふ身のやつれすぎ　華水
傑作へ約束事を忘れかけ　千年
傑作を見て來て母の肩が凝り　了念
傑作の前でわかつた顏をする　二南
賣約のある傑作を疑はず　同
傑作の話が溫泉で出來上り　嶺月
傑作の苦心談など書かされる　同
(人)傑作の中からもるエピソート　卯生
(地)傑作の前にモデルの瞳の魅惑　桃水
(天)傑作へ心の疵は未だ癒えず　同

席題　案外　大山一狂　選

内狀を聞けば案外儲けてず　無鬼
終電車案外無事に車庫へつき　空栗
凡人は案外樂な日を暮し　柳骨
案外の無罪へ子分達の顏　南耕
早引の電車に人がこんでゐる　卯生
案外な男にされて見送られ　桃水
手術室案外笑ふ聲がする　明珠
應接間思はぬ窓をあけてくれ　九葉
嘘ついてからの表情動かない　二南
案外な返事へ雨が降つてゐる　同
(客)案外を妻の心にして了ひ　華水
(同)趣味の會案外若い人に逢ひ　啞聲
(同)案外な裁き女となる被告　桃水
(同)案外な横顏を知る朝のバス　亂耽
(同)晝の風呂案外廣きものに見え　嶺月
(人)案外な電車一直線に來る　亂耽
(地)跡取りの案外老けて店にゐる　竹風
(天)縫ふてゐて案外强い事を云ひ　九葉

席題　幸運　田中草人　選

卒業後專務なれる株を持ち　空栗
幸運な男三面記事となり　千年
カフエーを背景とした幸運兒　亂耽
幸運の男やぶれた靴をはき　華水
債券も當るものだと話し合ひ　春秋
幸運を五圓債券まだ見せず　嶺月
幸運の丸髷になる髮を梳き　一狂
幸運な人と云はれてまだ一人　啞聲
幸運が來そうに思ふ陽に當り　同
幸運に遠く藥を呑みつゞけ　三霞
幸運のせめてわが首恙なし　同
(客)幸運の一汽車後を感謝する　無鬼
(同)幸運を話すサロンの窓に雪　亂耽
(同)姿見へほゝ笑んで見る割烹着　空栗
(同)幸運へヒステリツクな妻の笑み　桃水
(同)幸運は笑ふてならぬ席にゐる　二南
(人)幸運の明日を信じて窓へ立ち　鬼笑太
(地)幸運は家の狹さに氣が付かず　二南
(天)幸運はソファーに居て續くなり　素生
(軸)幸運の二人へひろい空と海　草人

席題　姉妹篇　住田亂耽　選

姉妹篇二度目の戀に破れてゐる　九葉
姉妹篇愛人今日も訪れる　桃水
その主義にゆるみが見える姉妹篇　卯生
相入れぬ神と人との姉妹篇　啞聲
姉妹篇矢つ張り三井財閥さ　一狂
病室へとゞけてくれた姉妹篇　明珠
桃色の灯で姉妹篇讀んでゐる　嶺月
姉妹篇同じ辯士の聲に飽き　呑人
後篇のゐはりでプロの世とはなり　三霞
廣告にだまされて買ふ姉妹篇　草人
姉妹篇同じ思想で出來上り　二南
姉妹篇この前程は泣かされず　同
(人)姉妹篇濕布の友が返へしに來　九葉
(地)インテリを甘く見てる姉妹篇　春秋
(天)姉妹篇愛のもつれの其の後なり　素生
(軸)ジヤーナリズムの阿片なる姉妹篇　亂耽

席題　マスク　房川素生　選

怒らない證據マスクをとつて云ひ　二南
標札を見ながらマスク取つて居る　了念
叱らうとすればマスクのある巡査　亂耽
親しさへマスクは何時か外してゐ　桃水
マスクして楠公樣を通り拔け　卯生
カフエーへ半月ぶりと云ふマスク　草人
ポックスのマスクに派手な同伴者　同
ポケツトへマスクを入れて醉はる　華水
よく似てる顏へマスクの大き過ぎ　同
裕福にされて親子がマスクで出　九葉
くびきりをまぬがれマスクで出る　同
マスクして辯當箱の空を下げ　明珠
マスクした人へ圓タクよつてくる　同
(人)朝のバスマスクマスクを向ひ合ひ　一狂
(地)兄弟と話すにマスク取つてゐる　卯生
(天)マスクを忘れ夜勤出てゆく　亂耽
(軸)家賃取マスクへ手間をかけてる　素生

雜誌社　川柳　天王寺支部二月例會

二月九日　於　内藤製作所　丸山公二報

ストーブで暖い室に電話のベルが絶えずなる。今夕の會に出席出來ない海洋人君が風邪

の床から席題を聞いて電話で句を傳へてくる。參會された諸氏の顔に、君の素晴らしい熱に感動されたが明るい笑が浮ぶ。窓外に眼をやれば夕間暮から降り出した雪が粉々として地上を掩ふてゐた。

兼題　便　箋　かほる選

便箋へ夫の僻も書いて來る　三汀
意見合はぬ事便箋へ長う書き　裸人
便箋へ部屋住だけの事をかき　海洋人
便箋へリンゴの皮が落ちて行く　豆秋
便箋に社長の顔をかきなぐり　綠雨
ハイカラな便箋從妹からの文　鶴峰
初戀の便箋少くたゝまれる　琴人
ペン字上手に彼女から斷はられ　同

席題　古　參　綠雨選

呑こんだ題で古參は口を切り　公二
電車から見へた古參は歩いてゐ　かほる
親切な古參を今に忘れ得ぬ　鶴峰
巾ばかり利かして古參なまけて居　琴人
着席がやつと決つた古參順　豆秋
安う飲める店を古參に教へられ　裸人
(佳)ものかずは云はずに古參茶(ぎ)　豆秋
(同)あせるのはと古參は椅子を立ち　裸人
(同)たちゆかぬ事も古參は知つてる　公二

席題　旅　僧　琴人選

旅僧の膝をかゞめて湯につかり　かほる
旅僧がスツト立つてる渡し舟　豆秋
交叉點を旅僧消へる樣に行き　裸人
旅僧は宿がきまらぬ街に着き　綠雨
(人)良寛の心にふれし旅の僧　公二
(地)旅僧へ二百十日も無事にくれ　裸人
(天)街の灯を見る旅僧に惱みあり　公二
(軸)旅僧へ柳が芽ぐみ草が萠え　琴人

席題　日　和　互選

恥かしい程はつきりと晴れた朝　豆秋
いゝ日和ほめて髮結からもどり　裸人
日曜の日和にそむく財布なり　公二
お天氣に煙草の灰がコロリ落ち　海洋人
聲が凍てつく寒念佛の雪ぞら　同

川柳雜誌社　御旅支部例會　(大阪)

二月一日於ライオン工場　櫻井圓角報

兼題　家　鴨　路郎選

副業と思えぬ程に家鴨飼ひ　多郎
田から田へ家鴨の聲になつて暮れ　靈壺
群れて居る家鴨へ默る子を抱き　同
一羽づゝ家鴨籠から消える夕　翠夢
生きた家鴨を目方で計る　同
氣取るなど思ひもよらぬ家鴨なり　圓角
娼婦にも似たる家鴨の境涯よ　同
ダンスしよなどゝは家鴨考へず　同
(人)家鴨まで美し相な京の水　飛佐志
(地)遲刻する道で家鴨の群に逢ひ　多郎
(天)たゞ家鴨がや〳〵(さい)運を待ち　圓角

兼題　夫　婦　路郎選

戀よりもいつそ夫婦と云ふ女給　みつる
深謀を妻輕る〳〵とお茶にする　圓角
カソエーへ女房を連れた味氣なさ　靈壺
夫婦てふ名に束縛をされて居る　翠夢
共稼ぎ家に子供は待ちかねる　ちとせ
母ちやんに似て不細工と夫云ひ　飛佐志
夫婦しておだて上げては金を借り　同
夫婦だなんてけちなものと濟してる　多郎
血液の型まで同じ夫婦です　同
(人)子が出來て夫婦戰線異狀なし　靈壺
(地)働きがないと妻君醒めたり　圓角
(天)戀だより妻より夫よりなどゝ　多郎

兼題　米　屋　路郎選

米屋まで借りをこしらへ平氣なり　翠夢
米屋の拂なりとも儲けたい　多郎
米屋との緣の遠さよ氣樂さよ　圓角
小ざつぱりした米屋さん淋しそう　飛佐志
米屋ではお客はいつも立話し　同
(人)米屋ちとマダムへ加勢して戻り　靈壺
(地)モーターを据えて米屋は儲けた　翠夢
(天)あてを忘れず米屋持つて來る　靈壺

席題　洋　食　路郎選

洋食が食へると母は威張つてる　みつる
乾盃は早や醉つて居る姿なり　多郎
定食へ亭主も助ける勇氣なく　圓角
急用にもう諦めたカキフライ　靈壺
ホークもつ手に通をば見せてゐる　翠夢
(人)ドツグサモンなど洋行て來た樣に云ひ　圓角
(地)御自慢のライスカレーの辛さ　靈壺
(天)判任官よりも薄いビフテキ　翠夢
(軸)スピーチを考へながらテキを切り　路郎
(軸)定食に手術の道具ほどならべ　同

席題　副　業　路郎選

副業に家庭教師もしたと云ふ　翠夢
本業が寂れ副業思ひ立ち　飛佐志
(人)副業を云ひ出しかれる得意なり　同
(地)副業のカフエーへ行つて遣され　みつる
(天)副業に旦那此の頃養はれ　多郎

（軸）家賃だけ稼いで女房氣が強し　路郎
（軸）副業を尻眼に奥へ通るなり　同

川柳雜誌社　**守口支部一月句會**（大阪）

一月二十五日　於原寫眞館階上

朝田新水報

兼題　羊　杏三選

嫁にゆく迄は羊も飼ふ理想　羊紫樓
サイレンへ羊の群は動きかけ　新水
春の雪羊の息に解けて行く　双車
夕陽へ向つて羊の顔がゆく　町二
拾年は羊のやうに生きて來た　蒼太
夕闇の底から羊啼いてゐる　同
羊小屋重り合つて夜が明ける　さち男
鐘の音は遠くかすかに啼く羊　同
（人）寄つてきた羊の鼻がくんな鳴り　町二
（地）羊飼ひ蒙古の街へ驢馬で來る　新水
（天）羊の鼻へ汚れた紙幣をつけける　町二
（軸）草笛に羊の夢の深みゆく　杏三

席題　咳　町二選

咳で誤間かす言葉のつぎめ　當り矢
深夜業此頃氣になる咳が出て　櫻天
淨るりを語るかたちの父の咳　村樂
くびり切りの噂さに咳をこらえて居　杏三
出前持格子に立つた咳になり　双車
咳き乍ら家主空家を直してる　同
（佳）冥默の咳に破れて頁繰る　蒼太
（佳）汽車こわいに子供は咳いてゐる　双車
（佳）働らけるる朝だよ咳に負けぬ　卯三
（軸）朝の窓咳を男に見上げられ　卯三

席題　春　互選

刑務所の日蔭にひよろり春の花　蒼太
春の雨鼓とも聞く醉心地　羊紫樓
口笛に心もかろし春の宵　櫻天
貸家札去年の儘に雲雀鳴く　杏三
叱られて春雨しきる窓に泣く　卯三
デパートは早くも春のトップ切る　同
春もよしいざり車の夫婦かや　新水
割箸をさくにも春のひらめきが　同
春の夜の大きな靴を寂しがり　町二
葱の香にはたちの春を哀しめり　同
思ひきり笑へば春の夜の朧　同
春の夜の糸に鳴りたる糸切歯　同

川柳雜誌社鶴町支部　**鶴町川柳會**

關本雅幽報

「題」貧　乏

子供等の儲けてくるをあてにして　小柳子
生きんが爲めに叫んで居れば中止され　變人
若夫婦貧乏などは知らぬやう　同
貧乏が作つて臭れた此の身体　のぶを
貧乏にいつそおいしく呑める酒　木馬
貧乏も今に見てろの稼ぎやう　山月
貧乏は親からうけて讓るなり　一龍
家主も氣の毒に見る暮し向き　紅
貧乏であるばつかりにもの言へず　愚圖坊
無邪氣さへ貧の生活解されず　同
貧乏と言へばお辭儀はしたくなし　雅幽
貧乏のそも始まりの支那鞄　同
貧乏も手鍋提げての面白し　同

洋食

洋食で飲む盃は透通り　木馬
洋食で互に急ぐ時間表　山月
洋食を週間献立表に入れ　一龍
靴ぬげば手製のカツの香ふなり　紅
洋食で今日も母親いやがらせ　小柳子
儲け口握つた書をテキで呑み　雅幽
トンカツが仲々切れぬ國の兄　同

御池橋支部發會（大阪）

村松夢裡報

曩に御池橋支部準備會を以て支部への發展の基礎を作つた吾等は、一九三一年の新なる年を迎へると共に、直に支部結成へ突進した一月十五日夜日本樂器會社大阪支店の樓上を占領して堂々發會式を擧行、迎へられた路郎師を始め琴人、杏三、萬よし、愚陀かほる、靈壺の諸先生、それは支部將來の發展に對する力強い拍車であり、一同の如何ばかり感謝した事だつたか！

川柳界に新なる歴史的記錄を作るこの支部結成は、未だ貧弱なる素地しか持たないにしろ、會員一同の熱意は高い、この熱意をもりたてる事に依り、然して幸にして諸先輩各位の御指導と御後援とが賜はれるならば、必ずや斯界の一翼に連つて進み得るであろうことを信じて居る。

努力！吾等のスローガンだ。

何卒各位の深大の御援助を願ひます。

兼題　ピアノ　靈壺選

連彈の愛の囁き睦まじく　千舟
ピアノなぞ遠い理想よ共稼ぎ　雅純
ピアノさえたゝいて居ればよいです　いわを

ピアノはあれど生活の糧　同
ピアノ弾くその指先に血が滲み　忠彌
失業者ピアノの音に腹を立て　三碧
情熱を娘ピアノへたゝきつけ　杏三
ピアノに負けまゐとする應接間　杏三
ステージの艶へピアノが輕う鳴り　琴人
(人)ピアノなる〳〵友愛のモボとモガ　杏三
(地)何氣なピアノのキイに觸れてみる　夢裡
(天)調子よくピアノへ乘った靴辷り　琴人

兼題　餅　琴人　選

新嫁に少し重たい里へ餅　永井
堅くなつて慈善の餅が配ばられる　三碧
同情の餅に淋しい人の春　夢裡
失業へ餅なき正月訪れる　聞錄樓
餅が燒ける間密柑を食べてゐる　三碧
餅搗き切つて餅をよばれる　靈壺
幼子の顔の手寒くもらい餅　聞錄樓
搗き立てを子供心にさわつてみ　夢裡
雜煮餅殘らぬ樣に數を聞き　千舟
加減しても御飯が殘る松の内　三碧
失業も子供の爲に餅を買い　宏朗
餅搗に力を見せた食客　宏朗
鏡餅ずみが先に失敬し　宏朗
(佳)餅搗きの白きも女らしく見へ　杏三
(同)姉の指妹の指にやける餅　三碧
(同)郷里の餅だ胃の腑よ嬉しがう　三碧

兼題　寒　月　杏三　選

病床に返事しそふな寒の月　宏朗
寒月に六甲山の高いこと　いわを
泣く女の顔が寒月に白かつた　蛙川
寒月に火の見櫓の生きて居る　三碧
ルンペンの夢を寒月のぞいてる　聞錄樓
すゝかけの枝に寒月ひつかゝり　靈壺
(人)寒月へ醉歩まんさん熱い息　琴人
(地)寒月よお前の瞳は鋭いれ　宏朗
(天)錢を落して寒月が身に泌みる　琴人
(軸)氷山は峨々と寒月迷ひ出る　愚陀

席題　煙　草　愚陀　選

勸められ平素は吸はぬ手つきなり　雅純
カッフェーの隅で草煙の錢が要り　かほる
輪に吹いてぢつと見つめてる應接間　蛙川
母の長煙管が吸ひ初めでれ　三碧
やめて見た煙草の味が氣にかゝる　蛙川
(軸)煙草の煙にエキゾチックな顔なの　かほる

席題　祝　かほる　選

昇給を祝ふ妻の痩せてゐる　宏朗
懷の都合で祝に不義理をし　忠彌
子が生れたつた二人で祝つてる　いわを
祝事田舍すぐさま知れわたり　星光
入營を祝すの旗がふるえてる　三碧
引出物出して御祝片付ける　夢裡
初孫に里の祝ひの初衣きせ　永井
壽に祝と云ふ字を太く書き　同
入營を祝つて母は蔭で泣き　いわを
花嫁もしるしばかりは祝いけり　雅純
御祝品思案の擧句は親許へ　同
流すには惜しい祝の帶だがれ　三碧

雜　吟

もう會ひませぬとも言つたせて泣いた　蛙川
大阪に來て拾年だ何をした　忠彌
待ちぼうけされて迄も信じてる　いわを
長く待つたとは云ひきれぬ男なり　三碧
厄年の厄へ女難も這入るかれ　同

川柳雜誌社　**簸川支部二月例會**（島根）

二月十一日　於　麗亟居　伊藤絲之助報

兼題　火　絲之助　選

草履を作つてゐる夜業の火を圍み　久磨緒
火の見臺一と足先に人がゐる　夢二
餘生たゞ送るたどんの火のまるみ　雷相
叱る人　默す人　炭火はれる　麗亟
(人)ゐろり火に戀猫の尾は乘れて　作一
(地)一撥の藁火に映えて蓮旗　麗亟
(天)焚火とろ〳〵鎌研ぎをはり　同

席題　手　術　夢二　選

手術の日はるゝ〳〵父が來てくれる　絲之助
手術服の白さ博士の大膽な　久磨緒
ほつれ毛もさびしものよ手術臺に居る　麗亟
(人)手術室不安な顔がよつて來る　雷相
(地)神經が冴え返る眞晝の手術臺　麗亟
(天)大手術博士の腕に筋が浮き　絲之助

席題　喝　采　雷相　選

喝采へ女王の樣に立へてゐる　久磨緒
喝采を女藝人は輕く受け　麗亟
喝采をさてもキョトンと支那手品　絲之助
喝采の渦に歌劇のエロチック　同
(人)喝采へ舞臺しづ〳〵進むなり　麗亟
(地)喝采に婦人辯士のつゝましさ　絲之助
(天)階級と別に喝采鳴りやまず　麗亟

席題　試　合　麗亟　選

ゲーム取り親がないのに強く生き　久磨緒
一ト試合濟んだ木蔭に風があり　雷相
試合にも慣れて米國から戻り　絲之助

ゲーム取り美男の汗を見逃さず　同
(人)試合の日帝都の空に雲もなく　同
(地)昂奮の眼試合の順が來る　雷相
(天)焚火たゞとぼく燃える闇試合　夢二

席題　秘密　久磨緒選

おぼろげな記憶秘密がよみがへり　雷相
妻にある秘密冷たい飯を食ひ　同
(人)あごけなくむき小さき秘密あり　綠之助
(地)拾萬圓政黨首領として秘密　同
(天)紅唇の秘密うれしく乾いてる　麗亟

席題　空　綠之助選

空模樣氣にしてマント斜にかけ　夢二
意氣地なき身と思ふなり雲の湧く　雷相
車窓から故郷近き晝の月　麗亟
青空へ再び捨てる溜息ぞ　同
(人)青空よプロレタリアは吠ゆてる　久磨緒
(地)落膽の午後黃色き空の色　雷相
(天)異國の土を堀返してる青空　麗亟

川柳難誌社
小松支部

節分川柳句會（石川）

二月四日　於兼六館　上野錦水報

參會者二拾七名と云ふ近來にない盛況、大聖寺の高田茶撫郎氏も親しく出席されて一夕の歡ひを共にされました。

兼題　福　盜鐘選

ウインドの中の福助色が褪せ　白柳子
大福帳ほぐせば先祖の筆の癖　兎月
福耳の御子ですと言ふ世辭を聞き　千華
妻の汲む福茶秘法少し見え　六坊
謠曲ののごを聞かせて福は内　白柳子
幸福な寢顏よ母を信じきり　松水
一等がまだ出てゐない福引所　柳々子
福壽草も漸くものになつて春　加賀子
新妻は幸福ですと書き馴れる　哲郎
(秀)肥えてゐるだけに幸福なる伯母　同
(同)福引の卷頭母の膝にゐる　柳渟
(同)幸福は來るものにして醉つて居る　吉祥
(同)弟を訪へば福神漬を切り　北山人
(同)大福帳開く眼鏡の紙の紐　東風

兼題　和　茶撫朗選

裏長屋今日も和解の酒を飲み　六坊
お互に貧乏をして和解出來　柳渟
義齒とれば柔和な顏になつて見え　羅丈
團体の音停車場の日和下駄　東風
和やかな夕餉の膳を望むのみ　錦水
植木屋の鋏がひゞくいゝ日和　北山人
和解して元の女房の笑ひ癖　兎月

（五　客）

仲裁へチト義理もあり和解する　松水
自分にも弱みがあつて和解する　松月坊
雪達磨和尚の留守に出來上り　東塢
料理屋へ和服で今日も刑事來る　北山人
文化屋根並んで平和な村でなし　柳渟
(人)和製だと聞いてコーヒの香がうし　六坊
(地)哀調に和す魂の置きどころ　錦水
(天)受付の和服に物の言ひやすく　逸紅

兼題　内　白山坊選

其内にどうにかならう酌を受け　茶撫朗
年頃の内輪にあるく下駄のへり　柳葉
町内にもめ事がある裏傳ひ　東風
炬燵から聞く新内へお酌の手　井々樓
内心と別に笑つて事がすみ　吉祥
内密にすませて欲しいお茶の冷え　逸紅
内密の話がはずむ膝がしら　思芥郎
表彰の子を持つてゐる手内職　柳々子
三ヶ日内儀に成つて重い髷　柳塢

（五　客）

内密に吳れる社長の鼻の穴　思芥郎
内側は露になつてる硝子窓　兎月
嫂の智慧に内輪の丸み合ひ　素佛
一人子の内から羽子の音を聞き　富久雄
境内の落葉と別に鳩の群　哲郎
(人)家内に聞けは小簞笥に入れてる　萬魚
(地)内兜見すかされてる襟の垢　東風
(天)内容はまだ話せない頤を撫で　同

席題　ふくらみ　美ごり葉選

ふくらみを數へ朝顏椽へ出し　羅丈
波足を逃げる袂に風ふくみ　兎月
人知れず乳を押へる嫁きおくれ　北山人
紅梅のふくらみ見せて渡り鳥　盜鐘
鉢植がちとふくらんで酒にする　思芥郎
判取をふところにしてぬつと來る　北山人

（五　客）

還暦の父ふくらみて席につき　松雪堂
盆栽のふくらんだ間で待たされる　盜鐘
夜具の裾ふくらんでゐる猫の聲　東風
ふくらんである丹前へ藝者つぎ　松雪堂
ふくれんぼ父ちやん吹いてすぐ破れ　千華
(人)風呂敷の外から林檎だと判り　北山人
(地)懷ろのふくらみ子供見逃さず　東風
(天)坐布團のふくらみ過ぎて氣が引ける　盜鐘

席題　粒　北山人選

年男ついたてへ來た豆の音　美ごり葉

念入りに拂ふ米屋の空俵　白山坊
（五客）
丸藥が一粒殘りいがむ顏　萬魚
香具師喋り散らし一粒づゝを吳れ　盜鐘
大粒に成つて角力に木がはいり　柳塢
一粒は戴いて飲む母は病み　松月坊
燒香の一粒種に泣かされる　柳三
（人）大字宙けし粒程の我が生き　松雪堂
（地）仁丹の小粒仲仕の手が大きい　兎月
（天）一生を一粒づゝの鳥の口　美葉

席題　小原節　兎月　選

小原節手もつけられぬ聲になり　柳葉
小原節に藝者も負けぬ聲を出し　錦水
湯の仲居廊下行くにも小原節　松雪堂
一ぶくをさせずに踊る小原節　柳々子
盃の數が足りない小原節　思芥郎
小原節踊る手付へ頰が觸れ　羅丈
小原節までは自分に覺えあり　千日坊
（五客）

スコップ音にまじつた小原節　北山人
小原節踊る手足に醉つた色　松月坊
課長級去つて始まる小原節　東風
小原節惡醉などにも目もくれず　柳々子
小原節合ふも合はぬも限り　千華
（人）目を閉じて顏一ぱいの小原節　千華
（地）二次會へ行く自動車の小原節　東風
（天）小原節行儀のよいを叱りつけ　柳々子

川柳雜誌社　螢ヶ池支部

湖舟追悼句會

二月八日　愚寵報

當支部の前幹事植田湖舟兄が肌まだ寒き、二月一日、惜しくも逝かれましたので、故人を偲ぶ追悼句會を開催いたしました。

此日本社からは、綠雨、雨町、かほる、の三氏及び鶴峯の諸氏をお迎えして故人を偲びながら、しめやかに作句冥想に耽りました。參會者參拾餘名。

追悼吟

寒念佛はありがたしつめたき死　綠雨
その中に君のベッドが一つあき　雨町
柳友の死は一しほにさみしけれ　鶴峯
うまかつた君の小唄へ涙する　白眠
春ひらく櫻をまたで散りし君　春柳
冥土へも支部を興さむ君の意氣　藏六
悲しくも漕ぎ出し舟のかへりこず　愚寵
追悼會今日は何だか曇りさう　播洲
枕頭に今は主なき川柳誌　鬼子
假初ならぬ雨の日のしらせだつた　照夫
湖舟兄待つて吳れ僕も逝くよ　吳柳
川柳になぐさめられて友は逝き　喜久兒
思ひ出は久しくかゝぬ病日記　穰
安養の淨土へ君を疑はず　沙門
まちかねて居るのへ顏も見ずゆき　水馬
句幟のみ殘せし君のなつかしく　大觀
春雨にそむき靜かに君眠る　好郎
氷雨降る川に蛙がむせび泣く　沚涙
淋しくも花火線香の燃へつくし　奈緒美
咯血がついに命をうばひしか　銀花
それぎりで歸らぬ旅と知つてゝか　可章
お粥はまづい〳〵で死んで行き　梨風
一切の苦惱をすて彌陀のひざ　十德
臨終へ雨の音のみ靜かなる　康夫
艶つぽい噂も殘し眠る君　長二郎
土の下のふとんは重くないだらう　都久路
度々に逢へども口をきかぬ人　可都惠
藝術を生かせて置いてそつと散り　操
親友も淋しく逝つた今日の會　美和子
在りし日の句を雜誌から親しまれ　涙路

兼題　空　綠雨　選

病室の窓越しにみる青い空　百萬石
咯血の心に滲みる秋の空　康夫
空模樣見ては洗濯出して來る　長汀
故郷の空へ乙女は病み續け　沙門
曇つてはきたが去れないこの釣れ樣　禮二
水底が深くも見える青い空　銀花
空を見た目に天井のつまらなさ　鬼子
サーカスの天幕へ空の晴れてゐる　奈緒美
空さへも見えぬベッドで病みつゞけ　竹葉
漁に出た父が氣になる空模樣　吳柳

病床にて

運命とあきらめられぬ春の空　逸朗
空を見る老婆に飛行機見つからず　鶴峰
姉の死へ悲しみを增す空の色　紅蔦
ぼんやりと仰ぐみ空へ月がさへ　伊勢子
階級を外れて空は青々し　照夫
（住）世を拗れて空見ることも暮らし　一流
（同）此の空でさへも行けぬ日曜日　長汀
（同）故郷は昔も同じ空の色　沙門
（同）花ざかり空まで花の色に似て　六華
（同）ひげをそる鏡に空がうつゝなり　かほる

兼題　新聞　雨町　選

新聞はちと大袈裟な記事を書き　播洲
新聞で見れば自活の道があり　逸朗

新聞をポケットに押しこんで急ぐ　緑雨
歸郷した身へ壁の新聞なつかしや　照夫
新聞も讀む氣になつた病み上り　杜洋
夕刊へ店の電氣を借りに立ち　可章
出勤の給仕社長を眞似て讀み　長二郎
新聞を見るだけが重役の仕事　喜久兒
樂隱居新聞と眼鏡をさがしてくる　道喚
まだ待たされて新聞を裏返し　石松子

（優勝野球大會）

一ヶ月だけの大朝取るときめ　奈緒美
新聞ではじめて知つた近火なり　涙路
聞かされて其の新聞を探すなり　鶴峰
新聞屋矢鱈に頭下げてくる　百萬石
かわいらし新聞賣りの手に迷ひ　かすず子
あはれ住人ジヤーナリズムに踊れる　康夫
三面は又職工の馘の事　泣涙
震災の夕刊種々買つて來る　禮二
留守の戸へ新聞の隙見付からず　鬼子
新聞を見て來ました と失業者　可都恵
新聞屋夜逃げと知らず入れてゆき　銀花
記事中に國の名があり讀んで見る　紅蔦
寢ころんで新聞を讀むひとり者　春柳
病床へくる新聞のまちどしさ　十德
（五客）電車から二錢にぎつた疲れた手　都久路
（同）生返事して新聞を子に取られ　水馬
（同）落ち付いて讀む新聞へ日は永し　可章
（同）夕刊へ今日一日を草臥れる　同
（同）新聞をちつと見つめた生活苦　杜洋
（人）失業者たゞ新聞の字を拾ひ　同
（地）取り込みのあつて新聞ほつとされ　涙路

（病院にて）

（天）新聞でも日〳〵の婆婆を知り　よし坊

席題　湖　かほる　選

湖が見えて登山隊活氣づき　六華
汽車はまだ琵琶湖のふちを走つてゐる　道喚
湖へ今ロケーション忙がしく　長二郎
期待して來た湖の小さい事　十德

（往年松江宍道湖に遊び）

旅の宿こゝでとれたが膳へのり　石松子
湖へ影をうつして餘念なし　同
繪の樣に今湖を夕陽染め　水馬
汽車の窓はるかに湖水見えてゐる　春柳
寒鮒の腹見せて浮く岸邊なり　禮二
湖へ書の知らせの旗を立て　緑雨
夕陽ぎら〳〵湖のたそがるゝ　奈緒美
湖へたゞ一片の白い雲　康夫
湖を二つ眺めて故郷へ着き　鶴峰
（人）湖へスケートと云ふ寒さなり　紅蔦
（地）湖の青さへしばしとらわれぬ　杜洋
（天）湖を渡つて鮭を買つて來る　禮二
（軸）湖の周圍へ赤い屋根が殖え　かほる

席題　舟　鶴峰　選

ひや〳〵とさせる木曾川下る舟　吳柳
寒月へ二人默つて舟を待ち　水馬
民謠を奏せて漁船の櫂がきしる　泣涙
仲買と舟をはさんで値がきまり　緑雨
積めるだけ積んで舟出の晴れてゐる　康夫
雞船のSOSかすかに聞へて來　かすず子
見送つた舟黑點と消へて行き　紅蔦
春の陽へ舟唄のたり動き出し　杜洋
ちと醉うて靑くなつてる舟の客　春柳
マドロスの命を小舟波に乘り　照夫
川巾が變つて違う舟に乘り　かほる
保津川の舟に四五人赤い顏　同

川柳雜誌　發會式句會

高知支部

高知柳壇は芳郎、紫溟、悠羊、春風、春水の斡旋に依り一月五日午後一時より、神宮光彩殿にて、壇友の初顏合せを兼ね支部發會式を擧げた。會するもの三十餘名、芳郎の開會挨拶後會則を議し濁水の挨拶と希望ありて句作に入り大都會に於ける句會にも劣らざる緊張裡に午後六時散會した。

時計　互　選

元旦の時計元氣に時をうち　鐵吉
風邪に寢た父へ時計の邪魔な音　清水
試驗日は母の片身の腕時計　濁水
帶むすび拔ける時計は醉つてゐる　悠羊
時計屋に不氣味な程もかけてあり　春水
釣革にこれ見よがしの金時計　哲山
子の時計借つて親父も出席し　夢郷
はみ出した時計そばから注意うけ　未若
なり止んで起る時計へまた寢入り　白牛
貧乏はしても時計を放されず　春水
れぢ切つた時計そのまゝ置く暮し　悠羊
金側の時計で今日もチボを釣り　松風
乘り後れ店屋の時計悪く言ひ　溪花
一人り寢は柱時計だ耳にたち　未若
親分の時計少々太すぎる　昭六
豆腐屋を時計替りにする長屋　紫溟
田舍驛時計の音もはつきりし　稔
うすものに見えてる腕の金時計　芳郎

優勝者涙で受ける金時計　秀峰
正直な時計をだます更け戻り　紫涙
長針が去年を命令し　麥風
難問題時計は進む氣はせくし　春雨
何時でも問はれた時計とまつてる　白牛
時計屋の時計みんながちがつてる　昭六
出來てます時計屋ちよいと耳へあて　濁水
臨終へ時計ばかりは無關心　悠羊

足袋　互選

白足袋のあとを追つてく暗い路次　濁水
看板の足袋へカ士も微苦笑し　清水
ぬくい目に祖母椽先で足袋をつぐ　白牛
戀をまだ知らで九文の足袋を履き　春風
三番叟しきりに足袋の裏を見せ　未若
霜踏んで鳥居をくゞる足袋はだし　悠羊
ぼろに賣る足袋に亡父の太い足　司迷
足袋の紋女小さい聲になり　麥風
病上り鍬に成る足袋佗しがり　啞聲
買ひ過ぎた足袋へ一家の足が寄り　春水
足袋の底ぬけて居るので膝組めず　秀峰
野良息子親より太い足袋を履き　昭六
年玉に貰ふた足袋をまた配り　夢郷
つくろつた足袋も姑氣に入らず　悠羊
もう出來たと言ひ〳〵甲をかけて居り　里見
若い父あわない足袋を買つてくる　啞聲
獨り身の悲哀は足袋の裏に見え　麥風
羨れる程の身分でつゞり足袋　紫涙
大旦那何時も木綿の足袋を履き　紫世
急く出かけ使の足袋が紋ちがひ　紫涙
ゴム足袋を買うて一足強く踏み　溪花
白足袋で御輿の步調よく揃ひ　春風

病妻が癒えて繼足袋履かされる　司迷
破れ足袋の爪先墨を塗つて出で　鈍翁
奥さんの古足袋下女へ又ゆづり　虎雄
赤いのをほめて母親子にはかし　鐵吉
獨り者足袋の先から爪が見え　未若
足袋の砂濱の景色を見てふるひ　啞聲
探す足袋みんな破れた右ばかり　濁水

兼題　初對面　濁水選

十年を文通でして初對面　里見
初對面背の子供をもてあまし　春水
初對面江戸つ子辯も混へて見　春雨
初對面名刺にも一度お辭儀をし　昭六
初對面　次々古い話が出　秘
初對面仲居それから先きを言ひ　清水
兄嫁は見度く恥し籔入し　鈍翁
初對面親族のことよく問はれ　哲山

（十客）

初夢に七福神と初對面　松風
初對面若過ぎるのを連れて居り　司迷
歸朝してから初孫と初對面　春水
紹介をされた方から吹まり　秀峰
箸拳で少し見くびる初對面　昭六
二次會でもう初對面世話をかけ　春風
初對面手持ち無沙汰が子を叱り　哲山
初對面ホールバックの無口過ぎ　春風
初對面波止場の風に押されて居　蝸牛
初對面國の訛りをなつかしみ　麥風
（人）ドン底の親へスターの初對面　春風
（地）初對面心の襟も正し合ひ　啞聲
（天）初對面趣味に隔ての幕がとれ　麥風
（軸）初對面成る程シヤンだな思ひ

觀月居小集（大阪）

一月廿日夜　川村觀月報

題　笑ひ

笑つたなまた空想になつてゆく　卜居
兩親のない友笑ひこけてゐる　同
眞すぐな道を笑ふてゆくふたり　同
壁百う笑ふたプルの影うすし　同
その笑ひ君はかくしてゐるのだな　同
笑はして置いてコップの水をのみ　觀月
先方が怒れば怒る程笑ひ　同
親の笑顔にこゝろ笑ひぬ　同
二三日まへから笑ひだしました　同
笑ふにも程度があると叱られる　同
恩人の笑ふは寒き朝なりき　鮎美
女給もう笑ひかへして猪口をうけ　同
物干で笑ふ姿のあからさま　同
お師匠と膝つきあはせ笑ふのみ　同
狂人の笑ふて步く傘をさし　同

春秋、明珠對座吟

二月八日　春秋居　喜多春秋報

手紙、幕

青春を煙にする日手紙束　春秋
村芝居幕から首が出て叱かり　同
思ひつめて書ぐ手紙と知るまいが　明珠
張りつめた心へ芝居幕になり　同

春秋居偶會（神戸）

二月十二日晝　日野華水報

題　即答

即答へ母たしなめる口を持ち　華水
即答は女の意地を見せただけ　春秋

題　灰

灰皿を二人して見る話なり　華水
煮えて來た土鍋の蓋に灰があり　春秋

川柳座偶會（大阪）

二月一日　かほる居にて

許嫁信じきってるお茶を出し　華水
許嫁歸つた後の手が冷へる　二南
許嫁勝氣に云ふて氣が晴れる　同
かわうその襟が嫌いな許嫁　かほる
持たされたマントが重い許嫁　同
惡役のいつち終ひはおちつかず　華水
肝心の話惡役みんな聞き　二南
此の幕も煙草をふかすかたき役　かほる

第一回　關西土地句會（大阪）

廣瀨無鬼報

一月十七日夜關西土地會社事務所にて、初句會を催し、川柳雜誌社より松盛琴人、福田山雨樓兩氏の御足勞を煩し「銀行」「夜業」の課題の下に作句十時半散會しました。

銀　行　山雨樓　選

金五圓也を引出す恥かしさ　無鬼
信用をその小切手に笑はれる　同
銀行の頭取太い首で來る　素月
銀行も塲末に行けば墓子を出し　同
銀行の守衛行つたり來たりする　同
行員の手に百圓の貨幣價値　琴人
（佳）据置きへ入れると稅金が來る　琴人
（佳）厳壁の樣に銀行休み也　同
（佳）とりつけの噂へ下駄を穿き違へ　同
（軸）銀行へ冗談口もきける顏　山雨樓
（軸）銀行へ女中を連れる暮し向き　同
（軸）銀行のせわしい中の大時計　同

夜　業　琴人　選

夜業して歸れば、妻は針仕事　一久
夜業する窓へ大きく影をかき　同
（佳）夜業して戻れば鍵が冷てゐる　素月
薄給の夜業が濟めば一時半　同
その夜業あはれむ樣に停電し　無鬼
夜業迄してボーナスを減される　同
（佳）夜業する歌へひょつこり支配人　同
支那ソバを不意に夜業の言ひ立ち　同
夜業の灯男の首の細いこと　山雨樓
夜業の灯へ啞の如く立ちつくし　同
社宅まで明りの屆く夜業の灯　同
夜業から戻れば毛糸編んでゐる　同
（佳）夜業から戻れば銅壺たきってゐる　同
（佳）もう歸る夜業へ辨當殼の音　同
（軸）居殘りの事務へ欠伸の九時が鳴る　琴人

絲の街川柳會

「絲の街」發刊祝賀句會（長野）

一月廿七日　於柳兒居　高峰柳兒報

新　澄　磨　選

白粉の女もう居る新開地　史
新聞の勾ひなつかし初入選　青蛙
懷手また新らしい借が出來　金坊
新聞屋朝の勾ひを持つて來る　白揚子

強　柳　枝　選

合格の子へ未亡人強く生き　多佳史
何一つ持たず庄子の強く居る　ひろし
強敵と出會ふ明日へ二時をきゝ　秀戀坊
言譯はもう盡きて居る居催促　金坊
強情を今褒められる特許權　多佳史
親心いやがる藥無理に強い　清廣

派　手　多佳史　選

ちと派手でせうかと妻は媚を見せ　安丸
子が出來ぬ寂しさ派手にして暮し　可醉
母を言ひ負かして出來た派手な柄　柳兒
あの頃の派手虫干へふと淋し　笑路

筆　蛙　皷　選

局の筆書損なつて穗先拔き　柳兒
貸しさの筆に馴れてる無心狀　金坊

浮　氣　秀戀坊　選

賣れっ妓の浮氣を女將だけが知り　柳兒
醉醒めの浮氣を悔ゆる子の寢顏　金坊
また別れ話しの指輪よく光り　有爲郎
（軸）浮氣から醒めて此の身の置ところ　仲裁

仲　裁　柳兒　選

仲裁が來て女房が強くなり　柳枝
この揉めへ又親方の顏が要り　多佳史
おのろけを聞いて仲裁引きさがり　安丸
（軸）仲裁をしたのも少しほこばし　同

海洋人君を迎へて（大阪）

一月二十日　於有三寓居　中村有三報

頑強なる心悸亢進のため、强迫觀念に罹り、半歲有餘屋外一歩も外出する能はざりし、海洋人大兄、幸に小康を得て大阪南堀江なる君宅より、豊中なる拙宅に來遊さる、仍て紀念として聊か乍ら歡迎句會を催す。

席題　エロ　有三　選

女ひとりのエロに花咲く　石竹

赤白青と目を覺ましたるエロの街　拓二
(人)赤いヅロウスの長さを計る　海洋人
(地)眞白な足匂ひけり藤の柵　同
(天)ひさぐ者のエロの靜けさ　石竹
(軸)燃え上るエロと見ゑは春の影　有三

席題　滿足　拓二選

それでも滿足に暮してゐると云ふてやり　有三
滿足な朝の散歩の濱千鳥　海洋人
圓滿な顔の揃ひし朝餉なる　石竹
(軸)たどん一つついて今宵も足るさする　拓二

席題　勝手　石竹選

(人)勝手たるべし酒をのむ　海洋人
(地)御勝手にお上りいなさの親しさだ　拓二
(天)僕が勝手だつたら川端柳さ　有三
(軸)勝手にしろと親なればこそ泣く　石竹

席題　生活　海洋人選

拍子木の深夜の底をとぼ〳〵と　拓二
不甲斐ない兒です坊主にでもします　有三
船を出て煙上げゆく陽の高さ　石竹
(軸)雀三匹南天三つついばむ　海洋人

席題　朝　互選

南天の雀の影に朝霧の立つ　拓二
目覺むれば夕べの悔ひの冷くて　有三
お妾さん朝は眉毛を剃つて居り　海洋人
白雲に殘れる星やみゝず鳴く　同
靜かな人のおどる朝なる　石竹
ところどこ牛の顔して明けてくる　同
顔を洗つてお隣りの聲　同

至誠團新年句會（大阪）

竹内多聞報

兼題　廻禮　路郎選

廻禮の三軒目から日が當り　多聞
廻禮の途すがらにて此處もより　游水
廻禮の名刺乳屋が五六枚　樂居
廻禮に庭の廣さも見て戻り　一壺
廻禮のすんで白髮の多いこと　寛
廻禮は足りないそうで飲んでゐる　瓢山
得意から傘借りて來る禮廻り　一杉
廻禮を長男にさせのんでゐる　青砂郎
廻禮の飲めない方は先にする　樹光
廻禮の白足袋に雨容赦なし　格子樓
明日もまだあると廻禮腰を据へ　同
(人)廻禮に扇子のかたい一二軒　多聞
(地)追羽子の下を廻禮くゞらされ　黒天子
(天)濕布して來たは二日の禮廻り　一杉

兼題　羊　路郎選

見るからに羊のやうな男なり　一壺
うつむいた羊の背がよく揃ひ　多聞
牛も飼ひ羊も飼つて喰へぬなり　樹光
平等に羊は初日受けてゐる　萬年青
羊飼ひいつちあとのを輕く打ち　青砂郎
(人)うつかりと羊鼻紙喰ふところ　貴山
(地)勅選に羊のやうな髯があり　樂居
(天)指圖する杖を羊は忘れてず　貴山

席題　久し振り　樂居選

久し振り會ふた弟に連れがあり　格子郎
久し振り逢へば散髮してるなり　貴山
高島屋グリルで會ふた久し振り　瓢山
お久しふおますは涙ためてゐる　黒天子
久し振りまあ〳〵〳〵の女連れ　多聞
久し振り小學校が珍らしく　樹光
杯をとれば昔の人であり　一杉
久し振り逢つた二人が啞になり　未成
久し振り嫁の世話まで引受ける　萬年青
(人)久し振り母は急いで焚きつける　萬年青
(同)恐ろしい程眞劍な久し振り　夏曉
(地)丸腰になつて相見る久し振り　一杉
(同)久し振りまぐる目がつきフト出逢ひ　無人
(天)久し振り骨の尖つた頰を見る　青砂郎
(軸)戀人が母になつてる久し振り

席題　米俵　互選

米俵積まれて屠蘇のくみ加減　路風
米俵値は兎も角もお正月　萬年青
不景氣を外に荷揚げの米俵　夏曉
食ふ丈けは床に小作の米俵　樂居
米俵十俵買へる暮し向き　天郎
米俵積んで世間を驚かし　須田
米俵積み直されて春になり　格子樓
米の値を氣にして俵〳〵めるなり　樹光
兄さんの腕には輕い米俵　青砂郎
米俵グツサリさして値がきまり　貴山

席題　水洟　互選

水ばなをすゝるに氣性あらはれる　格子樓
水洟に話しの急所押へられ　無人
本人は知らぬ水洟氣にかゝり　樂居
水洟に火鉢の灰は均される　一杉
行末を思ふ水ばな膝へ落ち　一杉
糟汁は熱し水洟一つ落ち　多聞
水洟が手を突込んだ炭俵　同
水ばなの音で父親歸へるなり　黒天子
水ばなの母へ甚兵衛の重たさう　同
反り橋の上で水洟かんで下り　貴山
下洟が電車の窓へうつるなり　同

財産と關係の無い水ばな　青砂郎
捨鉢になつて水ばなこすり上げ　同

至誠團二月川柳句會（大阪）

二月九日　天下茶屋例會場　竹内多聞報

思案路郎選

防波堤の思案へ波の荒いこと　將吉郎
想はれてゐることすらが惱みなり　夏曉
思案する歳に三十若からず　一杉
月一の金を使つて思案あり　同
一杯を飲んで思案のつゞきなり　貴山
思案の外の職にありつき　黒天子
思案する目に雲脚の早いこと　樹光
支那うどんも通つて思案更けて行き　鳥莊
思案する背へ子供は邪魔になる　籬下
（人）思案する二人へ鷗低ふとび　黒天子
（地）膝打つてゐの思案は立つて行き　多聞
（天）ステツキが書き靴が消す天王寺　格子樓

兼題　頑張路郎選

頑張つて見たが相手は親父なり　將吉郎
頑張つた妾の凄さ美しさ　格子郎
頑張つてゐるは課長のお氣に入り　瓢山
何處までも頑張り通して實を見せ　天郎
頑張つてゐるに搦手崩れて來　籬下
頑張りの個性認めてやるも母　黒天子
（人）頑張つて見ても一人で齒が立たず　天郎
（地）一生を頑張り通すつもりなり　夏曉
（天）頑張つてゐると判れば淋しくて　多聞

席題　失言互選

今更失言などゝ言へぬなり　樹光
失言のぐるり守衛護つてゐ　瓢山
失言に子供のやうにあばれ出し　貴山
あつさりと失言にして恙なし　夏曉
失言へ度量を見せる仲であり　黒天子

奉天川柳會新年大會

一月八日　於粋松亭　岩崎柳路報

三寒四溫の内三寒に屬する零度以下二十餘度の寒い日でありました。立井登美坊氏よりの電話で午後四時より大會開催に付きか非出席をとの事でしたが、所用の爲め三時間も遲れて七時出席、柳友各位に登美坊氏の引合せで初對面の挨拶を交したのですが、異鄕の地に同好者の多い事に驚かされ、新年大會兼小生の觀迎招待の會なる事を承り「初對面」席題の選をも仰せ付られる等光榮と恐縮を滿喫し、尙田中連樂氏の發議により宴酣なる頃餘興として小生選角力吟を始め、エログロの句百出、美形連をして抱腹絶倒せしめ、いやが上にも氣勢を揚げ、尙白洋氏の隱し藝、連樂氏の川柳どゝ逸等を拜聽し、十一時半萬歳を三唱盛大なる宴の終りをつげました。

（出席者席順）新朗、福來、六角、登美坊、柳路深太樓、笑鬼、白洋、連樂、星明、杢堂其他數名

兼題　初對面柳路選

初對面猪口の數から馴れた口　連樂
雙方の親が出て來る須磨の浦　六角
末席は一口ですむ初對面　同
初對面大阪辯の口を切り　登美坊
初對面思つた通り髭があり　福來
初對面流石世慣れた社交振り　同
初對面伯父さんに似た辯があり　同
謙讓のほど初對面かしこまり　登美坊
あらたまる言葉の中の國なまり　笑鬼
初面對ハツキリ顔のアザを知り　連樂
新任の課長へ給仕眞面目なり　六角
子が出來て女房の親に初對面　同
十年の知己乍ら越味の初對面　白洋
（客）子供もう初對面ではない無邪氣　連樂
（同）初對面疊のしみが眼にとまり　杢堂
（同）お目見得の何處か淋しいつゝまし　登美坊
（同）初對面とは見へませぬデツカンシヨ　笑鬼
（同）追善の席で母親初對面　星明
（人）初對面地酒を賞めて氣がそろい　新朗
（地）洋髮の方がと思ふ初對面　同
（天）初客へ妻たしなみの前へ立ち　杢堂

席題　冷え登美坊選

冷えた手に世帶慣れない火吹き竹　新朗
喜びを冷える勝手で母は受け　同
冷酒の味梶棒に親しまれ　杢堂
冷え切つた拜殿に響く拍手　星明
今日の冷え便所で知つた大旦那　六角
人の飯初めて食つた夜半の冷え　同
底冷えがする黒襟の頭痛膏　連樂
女房の初七日濟んだ床の冷え　六角
寒行の曲つたとこに夜泣きそば　連樂
しみ〴〵と冷えて來た事煩の疵　星明
冷性の母が氣に病む寒の入り　福來
夜とぎから冷え切つて妻歸つて來　柳路

席題　醉ひ杢堂選

醉つた振り廊以へ出ると耳へより　杢堂
千鳥足天下は俺が物になり　登美坊
返盃を押し返し〳〵醉ふて居　星明
泥醉ひのフト交番で子を思ひ　連樂
床の間へ首完全に醉ひつぶれ　星明
醉ふた目が床の達摩をまぶしがり　新朗
醉ふたのを無邪氣な方にしてくれ　登美坊
生醉に小言も云へず松の内　福來
交番で醉ひが言はせる良い度胸　同
女房の意見鋭い二日醉ひ　六角
水洟へまだ醉ひたらぬ北の風　新朗
三疊の間借も屠蘇の醉ひ心地　登美坊
醉ひ冷めの水へ三鐘聞いて居る　柳路
酒のくせ父に似てくる母の愚痴　笑鬼
何事も忘れて醉つた三ヶ日　同

編輯の窓

路郎生

▼今年は雨がよく降る。それが各人の生活を暗くすることが夥しい。が川柳雑誌は眞一文字に堅實な足取を見せてゐる。これも愛讀者各位の不斷の庇護によるものと深く感謝してゐる。

▼十日の夜不朽洞で月評會を開いた。從來の「卓を圍んで」とは少しく趣きを變へ作家本位に句評を續けることになつたので今後は月評を「作家展望」と題することにした。

▼曾つて「北廂記」「漱石さんの坊ちやん」等を本誌によせられた長野吉高氏から隨筆「柳の絮」が届いたが原稿が輻輳したので次號から連載することにした同氏は支那劇の研究家であるが特に本誌の爲め執筆されたものである。今より御期待を乞ふ

▼岡田博士から「難解史句」の續稿が届いたが編輯後であつたので次號に掲載することにした新年號に掲載した「難解史句」が紙面の都合上出所を省略した爲め博士及研究家に非常な迷惑をかけたので、次號で再發表をして其責をふさぎたいと思つてゐる。

▼八日の日曜の午後に突然森東魚氏の來訪を受けた。それは全く突然だつたので膝を交へて夜十一時迄川柳を語り柳友について話合つた。同氏は勤先の都合で大阪に居を移されるそうである。本誌の爲めにより一層の後援をされることゝなつたので我等は大いに力強く感じてゐる。

▼ひろし君から欣女追悼の册子を出すので其題字「はるかの希望」を求められる儘に書いた。

欣女が亡くなつたのはつい此の間のことのやうに思つて居るのに最早一ヶ年の月日が流れてゐる自分は今更のやうに聖い欣女のありし日を偲んでゐる。

▼龜井花童子君が「ひぐま」の客員を辭した。同時に神尾三休氏も同社の顧問を辭した旨の通知に接した。函館川柳界の爲めに大くの犧牲を拂つて來た兩氏のこの擧は理由の如何は別として「ひぐま」の爲めにも函館柳界の爲めにも惜むべきである。

▼本社客員小出檜重氏が二月十三日午後三時腦エンボリーで亡くなられた。行年四十五歳謹んで哀悼の意を表する。同氏と小生との交友は實に十有七年の長きに亘つてゐる。本誌の爲めにも尠なからざる後援を仰いで居ました。

▼岸本水府君の令息伸一郎君（舊冬十一月生れ）が十六日に永眠された。子の親として同氏の悲歎を思ふと同情に堪えない。

▼芦城川柳社（石川縣）とふあうすと川柳倶樂部（神戸）から寄せ書が届いた　前者は四日追難會を催し後者は紀元節に有馬で溫泉と作句の會を催された記念である。

社告

本社客員小出檜重氏豫て病氣の處藥石效無く去る二月十三日永眠致され候に就ては生前辱知諸君に謹告候也

二月

川柳雜誌社

本社基金醵金者御芳名

前號で基金募集をいたしましたところ早速左の方々から醵金を拜受いたしました茲に御芳名を錄し御厚志の程を深謝いたします。

金拾圓也　宮武　外骨殿
金五圓也　山本　靜香殿
金壹圓也　森　十四九殿
金拾圓也　麻生　路郎殿
金貳圓也　淺井冷々子殿
金拾圓也　カナメ喫茶店殿
金五圓也　岡崎　桂枝殿
金拾圓也　太田　朝陽殿
小計金五拾參圓也

社告

本社基金募集

「川柳雜誌」が柳壇の力强い存在として創刊以來八星霜に亘り獨立自營、孜々として其標榜たる川柳の社會進出、質的向上、量的發展の大旆を揭げつゝあり一ぱいに奮鬪して來ましたことは諸君の夙に御承知の事と存じます。これと申しますのも、わが社の主義主張に贊同され、直接間接多大なる御聲援と御助勢を頂きました皆樣御愛護の賜と深く感謝してゐる次第であります。今や多幸なるべき辛未柳壇を迎へ、つら〳〵過去現在の實績を顧み、更に將來を深思しますときに、本誌の使命の益々重大なる事を自覺する次第であります。しかしながら如何に絶大なる熱に燃えつゝあるとは云ひましても物質上に惠まるゝことの薄い同人社友の意氣だけでは到底充分なる躍進的効果を擧げることは容易ならぬことゝ存じますどうしても川柳に熱を持たれ「川柳雜誌」を愛して下さる諸君の御力添へを仰いで時勢のテンポに副ふべく現在の狀態よりも、より以上に積極的な畫策の實現に努めなければならぬことを痛感するのであります。

就きましては去る一月十四日の社友同人會の席上充分審議を重ねました結果、左記規定に依りまして各位に淨財の御喜捨を願ふことゝ致しました。何卒本社の微意のあるところを諒とせられ本社關係の方々は勿論、大方の各位に於かれましては本計畫の爲め奮つて御申込あらんことを祈ります。

昭和六年二月

川柳雜誌社

規

○一口一圓以上とし幾口にても御申込願ひたく、一口以上であれば端數がついても結構です。この意味は全くの淨財の喜捨を仰ぎたいからです。

○御送金は大阪市住吉區杭全町六〇三、川柳雜誌社事務所內、基金募集係宛になるべく振替(大阪七五〇五〇)か爲替でお願ひ致します。

○〆切期日は別段定めませぬがなるべく本年中に一先づ打切りたいと思ひます。

○御芳名は誌上に錄し領收の證と致します。

○基金として拜受いたしました分を誌代に振替へ又は誌代を基金に振替へる等のことは御用捨願ひます。

○御喜捨は現在の社の經常費に充つるものではありません。將來への堅實さを保證せしむるためのものでありますから、その點御含み願ひます。

投稿規定

▼近作柳樽及課題吟の句稿は葉書又は同型の厚紙に各題別紙に認め、住所氏名雅號を明記すること。

▼近作柳樽は一部又は二部のいづれかを明記する事。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記のこと。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認めること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第八卷第五號課題

三月五日締切（各題十句以内）

▼スポーツ　森東魚選
▼塲末　松丘町二選
▼船客　住田亂耽　朝田新水　共選

第八卷第六號課題

四月五日締切（各題十句以内）

▼笛　竹内多聞選
▼梯子　松盛琴人選
▼森　伊藤綠之助　友淵貴山　共選

毎號募集

▼近作柳樽（一部）十句以内　麻生路郎選
▼近作柳樽（二部）十五句以内　安井ひろし選

◇近作柳樽の一部と二部（同一人で投句することはお斷りします。

▼光耀抄　麻生葭乃選
▼各地柳壇（會報）
▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定價

一部　金參拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）壹圓六拾錢
（半ヶ年分以上御送金の方には投句用箋を贈呈致します）

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます　▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

昭和六年二月廿五日印刷
昭和六年三月一日發行

第八卷第三號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸一郎

發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社
振替口座大阪三一五一四番
電話天下茶屋二五七九番

事務所　大阪市住吉區杭全町六〇三番地　川柳雜誌社
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店。（明文堂　其他　市内　各書店）
（東京仲見世）五森堂（神戸）米田、後藤、寶文館（國館）
石塚（京都）三宅（松山）弘文舍（石川縣）マコトヤ

川柳雜誌社關係の人々 (いろは順)

賛助員

池澤樂居　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　國枝史郎　藤村作　藤本卯之助　赤井清司　淺田一　末弘嚴太郎

客員

伊藤彦造　大島濤明　岡田三面子

川上三太郎　川村花菱　吉岡鳥平　吉田清　窪田銀波樓　安川久流美　前田雀郎　前田五健　柴谷柴舟　篠原春雨　蛭子省二　森東魚　椙元紋太

社友

伊藤綠之助　生田翠夢　池田雪峰　石川双葉子　西田艸樂

西村明珠　友淵貴山　川村觀月　片桐靈壷　河野双車　辻左馬　永田里十九　中川めかく子　長山元水　中野柳陽　中野裸人　中澤濁水　中見光路　村松夢裡　上野錦水　上村村樂　桑原京郎　松田多郎　山本雨迷

山本丹路　増位汀柳　熊本黄蛾　藤岡櫻果　福田鶴峰　柳川洲馬　楊井二南　越田久水　淺井冷々子　阿形一杉　阿部閑生　櫻井圓角　北山悟郎　喜多春秋　木村晃卓　水田光穂　三輪夏曉　三好計加

白井梅里　平井蒼太　日野華水　須崎豆秋　杉谷專路

同人

岩本素人　岩崎柳路　伊藤愚陀　長谷川一徹　太田朝陽　龜井花童子　高橋かほる　竹内多聞　中島鐵洲　藤里好古　酒井駒人

朝田新水　關本雅幽　水谷鮎美　庄萬よし

編輯局(同人)

橋本綠雨　安井ひろし　松丘町二　松盛琴人　福田山雨樓　出口雨町　安西杏三　麻生葭乃　住田亂耽　主幹　麻生路郎

道頓堀支部(大阪市)幹事庄　万よし
天滿支部(大阪市)幹事北山　悟郎
濱寺支部(大阪府)幹事太田　朝陽
神戸支部(神戸市)幹事楊井　二南
山口支部(山口縣)幹事柳川　洲馬
函館支部(函館市)幹事龜井　花童子
高知支部(高知市)幹事中澤　濁水
梅田支部(大阪市)幹事川村　觀月
螢ヶ池支部(大阪府)幹事硲　一流
金澤支部(金澤市)幹事中川めかく子

田邊支部(和歌山)幹事辻　左馬
簸川支部(島根縣)幹事伊藤　綠之助
豊橋支部(愛知縣)幹事白　里
平塚支部(神奈川)幹事酒井　駒人
加古川支部(兵庫縣)幹事水田　光穂
京都支部(京都市)幹事桑原　京郎
鳥取支部(鳥取市)幹事中島　鐵洲
別府支部(別府市)幹事木村晃卓
堺支部(堺市)幹事友淵　貴山
松山支部(松山市)幹事岩本　素人

守口支部(大阪府)幹事朝田　新水
御旅支部(大阪市)幹事櫻井　圓角
高岡支部(富山縣)幹事越田　久水
天王寺支部(大阪市)幹事須崎　豆秋
平野支部(大阪市)幹事熊本　黄蛾
鶴町支部(大阪市)幹事關本　雅幽
小松支部(石川縣)幹事上野　錦水
高知第二支部(高知縣)長山　元水
御池橋支部(大阪市)幹事村松　夢裡

道ブラから
公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石なごのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が來たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法としては古本を買へばいゝ。古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過ぎてしまつた。道ブラの次でに公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。(路郎生)

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南五六二番

清酒

白鶴禮讃

白鶴をチントンシャンと提げて來る
午後六時白鶴が待ち妻が待ち
百事意の如く白鶴呑んでゐる
白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
腰掛へ白鶴狹う飲むうまさ
來意も聞かず白鶴の猪口を强ひ
白鶴が緣とはなりぬ君と僕
白鶴に素直な父となつて寢る

攝津灘

嘉納合名會社釀

郵便はがき

大阪市住吉區杭全町六〇三番地

川柳雜誌社内

創作奬勵懸賞川柳係

川柳雜誌第八卷第三號（通卷八十六號）附錄　昭和六年三月一日

切取線

川柳雑誌【第二回】懸賞川柳投句用紙

（内以句五數句）

住所

氏名

（没は反違定規）

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪

今直に御愛用下さい

全國有名化粧品藥店にあり

伊豆椿香油本舗

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

川柳漫畫 累卵の遊び

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入　定價一圓（送料拾錢）

内容概目

川柳漫畫 累卵の遊び
日月は輝く
大衆と共に

著者のサイン御希望の方はその旨附記して御注文ありたし

麻生路郎著	川柳漫談	價壹圓五拾錢 送料拾八錢	
岡田三面子著	寛政改革と柳樽の改版	價貳圓五拾錢 送料拾八錢	
同	隨筆 虚心觀	價貳圓參拾錢 送料拾八錢	
今井卯木著	誹風柳多留拾遺	價貳圓 送料拾八錢	
川上三太郎編	新川柳壹萬句集	價壹圓五拾錢 送料拾錢	
同	川柳滑稽句集	價九拾錢 送料八錢	
近藤飴ン坊編	新川柳分類壹萬句	價壹圓五拾錢 送料拾錢	
西原柳雨著	川柳江戸歌舞伎	價參圓五拾錢 送料拾八錢	
同	川柳江戸名物	價貳圓五拾錢 送料拾貳錢	
同	川柳吉原志	價四圓八拾錢 送料拾八錢	
同	川柳風俗志上卷	價參圓八拾錢 送料拾八錢	
武笠山椒著	誹風柳樽通釋	三卷各卷參圓 各送料拾八錢	
谷脇素文編	川柳漫畫 いのちの洗濯	價壹圓八拾錢 送料拾二錢	

柳書取次　御注文は前金の事

大阪市西成區千本通五の七
大阪文案社
電話天下茶屋二五七九番
振替大阪三〇三九二番

大正十三年三月三日第三種郵便物可認（毎月一回一日發行）
昭和六年二月廿五日印刷納本　昭和六年三月一日發行

川柳雜誌（第八十六號）　定價金三拾錢